
魔王内戦
カンピオーネ!
Campione XIX
丈月 城
Illustration シコルスキー
ダッシュエックス文庫


魔王内戦
カンピオーネ!
Campione XIX
丈月城
Illustration シコルスキー
スーパーダッシュ

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。


丈月 城
Illustration
シコルスキー
魔王内戦
カンピオーネ!
Campione XIX

Contents




スミス
護堂
アレク
アイーシャ
羅濠
ドニ
ヴォバン


「わたしだって、リリィとふたりで
護堂とこうするのは初めてで――
どきどきしているんだから」
「え、エリカ……」
背後から金髪の幼なじみに抱きしめられて、
リリアナが陶然とささやく。
その唇を正面から奪うのは、
もちろん護堂だった。

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XIX 魔王内戦

丈月　城

Campione Character Profile

カンピオーネ！登場人物紹介

草薙護堂 くさなぎごどう



高校1年生。軍神ウルスラグナの権能を有するカンピオーネ。自らを真面目・普通と評するが、周囲の評価は異なる模様。

エリカ・ブランデッリ



《赤銅黒十字》の魔術師。自称、護堂の「愛人」。周囲がたじろぐほど護堂に積極的にアプローチする。

リリアナ・クラニチャール



《青銅黒十字》の魔女。剣の妖精。護堂に仕える「騎士」を自任する少女。

万里谷祐理 まりやゆり



霊視の力を持つ媛巫女。護堂の「正妻」と称される。護堂とは非常に息が合う様子。

清秋院恵那 せいしゅういんえな



当代随一と称される「太刀の媛巫女」。護堂の「剣」として侍る。

護堂陣営

カンピオーネ

サルバトーレ・ドニ
イタリアの「剣の王」。護堂と決闘を行い、引き分けた。強敵として護堂の成長を願う。



ジョン・プルートー・スミス
(アニー・チャールトン)

ロサンゼルスの闇に君臨する魔王。護堂とは友好関係にある。性別を含めその正体を知るのは身近な者のみ。



サーシャ・デヤンスタール・ヴォバン
東欧の魔王。最古参のカンピオーネの一人。激闘の末、護堂を終生の敵と定める。



アレクサンドル・ガスコイン
黒王子アレクの異名を有するイギリスのカンピオーネ。護堂とはどこか似ており、互いに嫌い合う。



羅 翠蓮 らすいれん
字は濠。魔教教主として中華に君臨するカンピオーネ。護堂と相討ち、引き分ける。



アイーシャ
100年以上生きる最古のカンピオーネの一人。「夫人」の尊称を贈られ、永遠の美少女とも呼ばれる。



まつろわぬ神



アテナ
一度は護堂に敗れたが、再戦。護堂に勝利し、その存在は消えていったが、のちに魔女王パラス・アテナとして転生する。



ランスロット
『東方から来た者』の名を持つ《鋼》の神の一柱。



ラーマ王子
様々な神の加護を受けた魔王殺しの英雄神。様々な伝承から『最後の王』と呼ばれている。最後の顕現から１０００年の時を経て復活した。



孫 悟空（そんごくう）
斉天大聖の称号を有する鋼の英雄。



ハヌマーン
ラーマの盟友である古代インドの猿神。『最後の王』の素性を隠すため、自身も正体を隠していた。



ペルセウス
ローマ帝国で崇拝された新興の英雄神。

Introduction

これまでのあらすじ

神を殺し、その権けん能のうを簒さん奪だつした者をカンピオーネという。

高校生の草薙護堂はカンピオーネとなって以来、自称・愛人のエリカや媛巫女・祐理たちと共に、世界各国のカンピオーネやまつろわぬ神と数々の激戦を繰り広げてきた…。

戦いの中で護堂たちは、神々が称える『最後の王』の存在を知る。

「神殺しを殺す」という『最後の王』の封印が解かれるのを阻止すべく奔走する一行だったが、努力も虚しく『最後の王』は四英雄の手によって復活してしまう。

その圧倒的な力の前に退却を余儀なくされた護堂だったが、唯一の切り札である『最後の王』の真の名「ラーマ」を突き止め、死闘の末に辛勝する。しかし、カンピオーネが現存する限り「ラーマ」は何度でも甦り、カンピオーネの数だけ強くなるという——。

カンピオーネたちが「ラーマ」に対抗し得る手段は、同士討ちを行い、生き残った最後の一人が「ラーマ」と戦うというものだった…。

第１章　Prelude of Civil War

1

　二月といえども、ロサンゼルスはそこそこあたたかい。

　冬の寒さが厳しい土地ではないのだ。温暖な海辺の大都市。だが、治安がいいとは言いきれない地域も存在する。

　夜、女性がひとりで歩くにはとても不向きな界かい隈わいなども。

　そして今、アニー・チャールトンはそうしたダウンタウンを夜歩きしていた。観光地でもある日本人街リトル・トーキョーにも程近い辺りだ。

「……決して居心地のいい場所じゃないのは、たしかみたいね」

　ぼそりとアニーはつぶやいた。

　深夜零時を過ぎているので、人通りはすくない。が、ときどき通行人とすれちがう。それもあまり柄がらのよくなさそうな。ストリートギャングやホームレスなど珍しくもない界隈なので、まあ当然であった。

　こんなところを女ひとりで深夜に出歩く――。

　夜の商売の関係者か、よほどの遊び人くらいだろう。

　だが、かちっとしたスーツ姿のアニーはどちらにも見えまい。だからか、すれちがう男たちが向けてくる視線はあからさまに胡う乱

ろんそうであった。

　しかし、その割に。

「…………」

　男どもは不思議と、失礼な声などをかけてこない。

　もしかしたら、アニーのまとう『隙すきのない雰囲気』ゆえだろうか。

　さりげない目配りで危険の予兆をことごとく見み出いだす猛者もさのたたずまい——。そんなものをアニーに感じているのかもしれない。実際、私服刑事や荒っぽい業界筋の女用心棒などと思われることもすくなくないのだ。

「まあいいわ。妙な犯罪に巻きこまれなくて助かるし」

　つぶやきつつも、なんとなく釈然としないアニーだったが。

　目的地に到着した。ロスでは平屋の建物で営業する店舗は珍しくもない。ここもそのひとつだ。ただし、売るのは夢・未来・悩みの解消など。

「Mystic Reader by Bianki……ここね」

　メゾネットの玄関口。その脇わきの小さなプレートに書かれていた。

　文字は油性ペンによる手書きで、ぞんざいな筆跡だった。いわゆる『占い師の店』であるはずなのだが、店主は商売熱心ではないようだ。

　ガラス戸越しに店内をのぞきこんでも、明かりはついていない。

　どう見ても閉店している。だが、これでもしっかりと営業中なのだ。

「情報どおりだわ」

　治安のよくないダウンタウンである。

　本当に閉店中ならシャッターを下ろすなりして、ガラス戸にさわ

れないようにする。でないと石やバットの一撃で破られてしまう。

　アニーは躊ちゅう躇ちよなくドアを開けて、店に入った。

　店舗スペースを抜けて、廊下も通り抜けていく。

　ここまで照明はひとつもついていない。ガラス窓越しに外から差しこんでくる街灯の明かりだけが頼りだった。

　しかし、廊下の奥の部屋からは暗めの光が洩もれ出ている。

　ドアは開け放しにされている。アニーはずかずかと入っていった。この部屋の光源はなんと蛍光灯でもＬＥＤ電灯でもなかった。

　壁に据えつけの古式ゆかしい燭しよく台だいで、数十本の蠟ろう燭そくが橙だいだい色の焔ほのおを揺らしている……。

「ようこそ、ダヴィド・ビアンキの館へ」

　部屋の中央に、品のいい美男子がいた。

　白人である。二十代なかばだろう。ドット柄のワイシャツにネクタイを合わせて、なかなか洒落しやれた雰囲気のいでたちだ。

「恋愛相談、経営指し南なん、人生の悩み解決……なんでも気軽に相談してくれ。すでにご存じだろうが、ぼくの観相術をもってすれば、どんな回答もお望みのままだ」

　気取った口ぶりがやや軽薄であった。

　だが、数カ月前に南なん欧おうから流れてきた魔術師にして、地相術の達人だという。土地や人の霊気——その流れを読んで、さまざまな情報を得る術のことだ。

　魔術の本場たるヨーロッパで、正統なる修練を積んだ使い手らしい。

　実際、うす暗い部屋の書棚には、魔導の古書がぎゅうぎゅうに詰めこまれている。

　どこかの遺跡から発掘されたとおぼしき古物や骨こつ董とう品ひん、古地図などもあちこちに転がっていた。まるで博物館か美術館

の倉庫である。これらはただの参考資料ではない。おそらく魔術の触しよく媒ばいでもあるはずだった。

　全てビアンキなる魔術師の見識と技ぎ倆りようを証明するものだ。

　そんな男がどうしてカリフォルニアにまで流れてきて、占い師の真ま似ね事ごとで小銭を稼かせいでいるのか？　その理由をアニーは知っていた。

　間かん髪はつ容いれず、こうつぶやく。

「汝なんじの意志することを行え、それこそ法の全て」

「……ああ」

　所定の合い言葉を聞いて、ビアンキは微笑した。

「もちろん、そちらの用件もうけたまわるとも。――我が邪法の学まなび舎やへようこそ。邪術師ダヴィド・ビアンキに何をお望みかな？　死。殺さつ戮りく。大勢の死。無む垢くなる者の死。嘆なげき。愛する者の死。悪徳。退廃。破滅……。君が然しかるべき対価を払うのであれば、ぼくはこの世に混こん沌とんと凶事を呼びこむべく、微力を尽くすことにしよう」

　名門正派の魔術師でありながら、ビアンキは何か大失態を犯おかしたらしい。

　ヨーロッパ中のあらゆる魔術結社から罪人と見なされるにいたり、ここ北米の西海岸まで逃げてきたのだという。

　あげく悪と邪法に魂たましいを売り、邪術師にまで身を堕おとした。

　退廃と狂気と悪徳のみを行動原理とするカルト集団の走そう狗く。魔術界のテロリスト。そして何よりロスの守護聖人ジョン・プルートー・スミスの敵――。

　アニーの目の前にいる男は、そういう輩やからなのだ。

　数カ月前にロサンゼルスでも最大の邪術師カルト《蠅はえの王》が崩壊して以来、この手の小者が街に増えつつあった。なかでも

〝やんちゃ〟を繰りかえしているという新参者の仕事ぶりを内ない偵ていするため、今夜はここに来たのである。

　だが。

「……ん？」

　不意にビアンキが眉まゆをひそめた。不審そうにアニーを凝ぎよう視しする。

「どうかしたのかしら？　私の顔に何か？」

「ああ、いや。すこし気になることがあってね。君は……よく言われるのではないか？　運気を読みづらい相だと」

「相？　つまり、あたしの顔とか、面つら構がまえという意味？」

「そんなところだ。厳密には顔つきだけでなく、全身のたたずまい、風格、その人物がまとうオーラの色……そういった全てをひっくるめて『相』というのだがね」

「そういえば、あなたはその道の達人だったわね」

　アニーはうなずいて、それから言った。

「残念ながら、観相術のマスターに会ったのは今夜が初めて。今みたいなコメントをされた経験は記憶にないわね」

「そう……か。なら説明させてもらうが、君はきわめて特異な相を所有している」

　ビアンキは今まで開いていた右手を――さりげなくにぎりこんだ。

　ちょっとした仕草。だが、アニーの観察眼はそれを見逃さない。この時点ですでに迎撃のスイッチはオンになっていた。

「言うなれば『覇は者しやの相』だな。君の心身には善よき運気と悪あしき運気、そのどちらもが途方もないほど大量かつ激烈にみなぎっている。常人の尺度でいう幸運や凶運など、君はとっくに超越した存在であるはずだ」

「…………」

　いつのまにかビアンキは真剣な表情になっていた。

　彼の物言いから、軽薄な気取りが消えた。代わって、錐きりのように鋭いまなざしでアニーの顔をまっすぐに見つめる。

「ぼくは前に一度だけ、同じ相を観みたことがある。その意味するところを……あのときはよく理解できなかった。だが、今はちがう――」

「そう」

　アニーは淡く微笑した。

　察するに、ダヴィド・ビアンキは〝同族〟と対面したことがあるのだろう。

　そして、おそらく失敗を犯した。その経験は良くも悪くも糧かてとなり、術者としての彼を大きく成長させるきっかけとなったはずだ。

　アニー・チャールトンを観て、一目でchampionの本質をかいま見てしまうほどに。

「とても興味深いお話ね、ビアンキさん。よかったら、あたしの運勢を占いながら、もっとくわしく聞かせてもらえるかしら？」

「残念ながら、お受けできかねる話だな！」

　にぎりこんでいた右手を、ビアンキはさっと振った。

　同時に掌てのひらを開く。魔術で手のなかに召喚しておいた金属粉が部屋中にばらまかれ、そして、全ての粉が燃焼と爆発を起こす――。

　ゴゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウンンンンッ！

　焰と、爆発の衝撃がアニーの全身を吞のみこんだ。

　しかし、その程度でロスの英雄がひるむことはない。余裕綽しゃく々しゃくのまま笑う。

「ふふふふ。なかなか熱烈な歓待だな」

「やはり君もそうだったか……。姿だけ人間のふりをした最悪の怪物、尊き神々すら殺あやめる地上の災さい厄やくそのものめ！」

「邪術師である君がそれを言うか。まあ、たしかに私は魔王そのものだが」

　二秒前まで、アニー・チャールトンだった。

　しかし、焔と爆発に呑まれた瞬間、アニーは魔術で衣ころも替がえを行った。

　いまや黒き鉄仮面で顔を隠し、黒のケープをその身にまとう。腰には鋼はがね色の魔ま銃じゆうをおさめるホルスター。足元は鉄てつ鋲びよう付きのブーツである。

　魔王ジョン・プルートー・スミスの姿で、ビアンキと向き合う。

　スミスを襲った爆裂の魔術によって、部屋中が猛火につつまれていた。だが、人間の魔術で生み出したものがカンピオーネを害することはない。

　めらめら燃える焔にあぶられながらも、スミスの衣装には焼け焦こげひとつなかった。

「念のために断っておくと、これでも熱いことには変わりないのだがね」

　スミスが笑うと、その震動でくつくつと仮面が揺れる。

　唇くちびるから吐き出す声も低くなり、凜り々りしいテノールに変じている。

　尚なお、すこし精神集中して魔術への耐性を高めれば、まわりで燃えている魔ま性しようの焔は一瞬にして消え去るはずだった。それも王者カンピオーネの特権なのだ。

　しかし、スミスはあえてそうしない。

　激しい焔のなかにたたずむ黒衣の魔王——。絵になる光景だからだ。

　ジョン・プルートー・スミスには、自分自身を劇的に演出する義務があるのだ！

　それに何より『焔をまとう仮面の王』の偉容に呑まれて、ダヴィド・ビアンキは逃げることも忘れている。まだこのままでいい。

「さてビアンキくん。私の方で名乗る必要はあるかな？」

「く……っ！」

「よろしい。なしでいいわけだな。今日のところは内偵だけの予定だったが、ご覧のとおり緊急事態だ。ロサンゼルスの平穏にささやかながら貢こう献けんする自警団員として、君の逮捕まで済ませてしまうとしよう」

　スミスは腰から魔銃を引き抜いた。

　大口径の六連発リボルバー。地上のいかなる銃ともちがう。

「それを――そんなものをぼくごときに使うつもりか⁉」

　愕がく然ぜんとして、ビアンキが叫ぶ。

「まつろわぬ神でも、神殺しの魔王でもないぼく相手に――⁉」

「私の銃について知っているようだな。神をも滅ぼす魔ま弾だんであるがゆえに、一ひと月つきに六発しか撃てない。おそろしく貴重な銃弾だ。濫らん用ようは避けたいところだが……」

　かちゃり。撃鉄を起こし、銃口をビアンキの心臓に向ける。

「安心してくれ。実はこういう使い方もできる」

「ああ――っ！」

　かちっ。引き金をひく。ビアンキが恐怖のあまり絶叫する。しかし、光の魔弾は鋼の銃口から出てこない。空くう砲ほうだったのだ。

　だが、銃口から吐き出された衝撃波が南欧出身の邪術師をふっとばした。

「これは私のために、アストラル界の黒鍛冶師ブラックスミスが

造ってくれた魔王専用の武具だ。空気のかたまりを撃ち出すだけでも結構な威力になる。まあ、神々相手の戦いではまず役に立たない追加機能だがね」

　飄ひよう然ぜんとうそぶいてから、スミスは気づいた。

　今の一射、ビアンキを壁に叩たたきつけ、ノックアウトしただけではない。

　銃口から放たれた衝撃波はまわりで燃えていた焔をもきれいにふきとばし、消火の役目を果たしていた。

　残されたのは黒焦げになった部屋と、鼻をつく焼け跡の匂においばかり——。

　また、衝撃波はこの占い店のガラスというガラス、割れ物という割れ物を木こっ端ぱ微み塵じんになるまで粉砕していて……。

「ふむ」

　スミスはわずかに肩をすくめた。

「すこし威力が出すぎたか」

　この感じだと、衝撃波はビアンキの店をふくむダウンタウンの一区画まるごとを駆け抜けていったのではないか？

　その範囲内では、ここと同じ粉砕現象が発生しているはずだ。

「勝利のためのささやかな代償というわけだ」

　悪びれずにつぶやいて、魔銃をホルスターにもどす。

　ジョン・プルートー・スミス。彼をよく知る近しい人々は仮面の英雄を『結果オーライの勝負師』と呼び、その慈じ善ぜん活動にともなう（周囲の）犠牲を聞くたびに眉まゆをひそめているともいう——。

「でもデニス。非道な邪術師がこの先、ロス市民にあたえたであろう損害を考えたら」

　自宅にもどったあと、アニーは淡々と指摘した。

「ワンブロック分の家屋で壊れやすいものが粉々になるくらい、すばらしく軽微な被害だったとは言えないかしら？」

「そういう見解が成り立つことには同意します。ただし」

　チャールトン邸を管理・維持する老ろう執しつ事じ、デニス。謹厳実直ながら皮肉屋でもある彼はちくりと主あるじへ反論した。

「一区画分ではなく、被害範囲は五区画分に相当する模様です。あと、ふつうなら壊れるはずのない精密機器の類たぐいにも深刻な損害をあたえていたとか。エリア内のコンピューターと携帯電話を一瞬にして破壊する超音波とは、さすが妖精境の武器だと言えましょう」

「そう」

　謹厳に報告されて、アニーはこくりとうなずく。

「とりあえず、この件へのクレームはあたしの方からスミスへ入れておくわ。勝利のために必要な代償だったとは思うけど、市民生活にささやかな影響も出た事実を忘れるなと、きちんと釘くぎを刺しておくから」

「……なあアニー」

　神殺しの女王アニー・チャールトンに、黒人の同席者が声をかけた。

　ジョー・ベスト。サマンサ大学の人文学部教授にして、黒衣の魔王をサポートする《善の魔術師》のひとりである。

　老齢ながら、アニーにとっては親しい友人でもあった。

「スミスに伝えるも何も、君自身がジョン・プルートー・スミスじゃないか」

「たしかにそうなのだけど」

　もっともな事実を指摘されても、アニーは他人ひと事ごとのようにつぶやく。

「彼の行動哲学や倫理観は、あたし個人のそれとは結構ちがうのも事実よ。賛同できる点もあれば、そうでない点もたくさんある。やっぱり、彼とアニー・チャールトンは区別して語る方がいろいろしっくりくるわね」

「…………」

「きっとスミスも同じ意見よ」

「…………」

　アニーの発言を受けて、ベスト教授は「ほう」とつぶやき、執事のデニスは「ははあ」と適当に受けながす。実はこのやりとり、もう何年も事あるごとに繰りかえされてきた会話なのだが、老友ふたりはいまだに納得してないようだった。

　しかし、アニーと黒衣の魔王のなかではひどく自然な結論でもあった。

「まあ、今夜の件はひとまず棚上げしよう」

　ベスト教授はせき払いした。

　ダウンタウンの占い店を訪ねたのは二時間前。アニーはすでにロスフェリス地区の広壮な屋敷に帰宅していた。

　ダヴィド・ビアンキは《善の魔術師団》が運営する精神病院に引き渡し済みだ。

　危険な邪術師たちを収容——否いな、収監するための施設であった。表向きこそ病院となっているが、実際は監かん獄ごく同然だという。

　彼はそこで数カ月から数十年にもおよぶ矯きよう正せいプログラムの対象者となる——。

「さっきデニスから聞いたんだが……アニー、君は今夜このまま旅

立つ予定だそうだな。東京へ――日本のチャンピオンと『最後の王』が対決したばかりの街へ」

「ええ。ほかの連中も動き出しているでしょうしね」

　プリンセス・アリスから連絡が入ったのは、昨夜のことだった。

　すなわち、『最後の王』こと軍神ラーマチャンドラと草くさ薙なぎ護ご堂どうが相あい打うち、旧知の少年がぎりぎりで勝利したと。

　しかし、スミスは冷静にこう発言した。

『結局、問題の根っこは何もかたづいていない。今の段階で一いつ喜き一いち憂ゆうしても、意味はないと私は思うのだが』

　地上にカンピオーネがいるかぎり、ラーマ王子は何度でも甦よみがえるという。

　だから、アニー／ジョン・プルートー・スミスは旅立つのだ。魔王殺しの英雄という大問題の原因を根こそぎ消滅させるために。

　アニーは老友たちへ、淡々と告げる。

「賢人議会のプリンセスによると、ラーマ王子が活動しているだけで世界各地の火山帯は活性化を続け、地球規模の温暖化も際限なく進行していくそうよ。誰かが彼を止めなくてはいけないでしょうね」

「しかしアニー。君の推測どおりになったら、どうする？」

　ベスト教授は不安そうに訊たずねてきた。

「昨夜、君はこう言ったな？　……この地上に誕生した神殺しの数だけラーマ王子の力が増すなら――神殺し同士でバトルロイヤルを行い、最後に残ったひとりが代表として戦うことになるだろうと……」

「ええ」

　アニーはうなずいた。

「あたしとスミスもその魔王内戦に……参加するしかないでしょうね」

「ほかに選択肢はないのか？」

「ないわ。あなたたちも知っているでしょう？　あたしはともかく……スミスやほかのカンピオーネに話し合いなんか通用しないって」

　最初に神を殺あやめてから、もう一〇年ほどが経たつだろうか。

　その間、数々の実体験をもって学んだ経験則である。七人全員の意見が一致するなど絶対にありえないカンピオーネたちだが、これについては全員が賛同するはずだった。

「そして」

　アニーは遺い憾かんの意を込めて、ため息をついた。

「カンピオーネ七人による内戦が激化していけば、ラーマ王子の再さい臨りんを待たずして、地上の崩壊がはじまりかねない……。となれば、あたしが取るべき道はひとつ。いち早く魔王内戦の勝者となって、破壊の規模をできるかぎり抑え込む」

「ううむ」

　ベスト教授はなんとか反論したいらしく、眉み間けんにしわを寄せていた。

　しかし二〇秒後にあきらめて、黙もく然ねんとかぶりを振る。苦悩に満ちた表情が彼の内心をあからさまに語っていた。

「その理屈、ツッコミどころばかりだというのに何ひとつ反論できない。認めよう。たしかに君の言うとおりだ、アニー」

　ベスト教授がすっと右手を差し出してきた。

「君の幸運を祈る。幸いの運の加か護ごが君と共にあらんことを」

「ありがとう。あなたの祈りは百万の味方以上にあたしを支えてくれるわ」

老友の手をしっかりと握りかえし、アニーはうなずいた。

「しかし、その厄やつ介かいすぎる内戦をどう勝ち抜くつもりだ？　強大無比であるはずの神殺しが七人もそろい、自分以外の全員を敵にまわすわけだろう？」

「ポイントとなるのはたぶん、彼女の存在よ」

「彼女？」

「アイーシャ夫人。あの人は権けん能のうも、行動理念もほかの六名とはまったくちがう。彼女が適切な形で『妖精の通つう廊ろう』を開くことに成功すれば、全てのカンピオーネをまとめて時の彼方かなたへ送り出すことさえもできる」

「なるほど、たしかに」

「アイーシャ夫人にどう対応するかで、内戦の経過はかなり変わってくるはずよ。ただ、そこがバトルロイヤルの綾あやとなることは――」

確信を込めて、アニーは言い切った。

「夫人以外の全員が承知しているでしょうけど」

3

死すべき人類の暦こよみで言えば、一〇年ほど前あたりから――

新世代の神殺したちがぽつぽつと誕生しはじめた。

まずアレクサンドル・ガスコイン。そしてジョン・プルートー・スミス。その数年後にサルバトーレ・ドニ。最近では草くさ薙なぎ護ご堂どう。

いずれも独特の個性を持つ曲くせ者ものばかり。だが、ひときわ異彩を放つ存在は、やはり。

「アニーになるわよねえ」

　女神パンドラはしみじみとつぶやいた。

「神殺しの子たちは何人も見てきたけど、自分から仮面までかぶっちゃう子はさすがにアニーが初めてだし」

　まつろわぬ神などとちがい、真なる神である彼女は『不死の領域』の住人である。

　地上への干かん渉しようを好き勝手に行うことは許されない。愚ぐ者しやエピメテウスとパンドラの落とし子たる魔王たちとも、ちょくちょく対話できるわけではなかった。

　彼らが『生と不死の境界』にやってきたときを狙ねらって、連絡する程度だった。

（死すべき人間たちがアストラル界、幽かくり世よなどと呼ぶ領域のことだ。あそこでは物質よりも霊魂こそが重きを成し、地上より気軽にパンドラも介入できる）

　そして——

「アニーだけが生と不死の狭はざ間まにいつでもふらりとやってきて、好きなだけ滞在して、妖精王としての特権さえも行使できる……」

　アニー・チャールトンは魔神テスカトリポカを倒して、神殺しとなった。

　月女神アルテミスにも勝利している。また、生と不死の境界に妖精王として君くん臨りんしたオヴェーロン王にも。

　結果、アニーは『妖精王の支配力』を権けん能のうとして獲得した——。

　彼女は今もその特権を使って、生と不死の境界に入りこんでいる。もうすぐ魔王内戦がはじまろうとしているのに。

「一体、何を企たくらんでいるのかしらね～？」

　パンドラのなかでうずうずと好奇心がうずいていた。

　神殺しのなかには、自力で『生と不死の境界』に来られる者もいる。妖精の門を開くアイーシャや、方ほう術じゅつで世界を越えてしまう羅ら翠すい蓮れんのように。

　しかし、妖精王でもあるアニーほど悠ゆう々ゆうと〝世界移動〟する者はいない。

　だから実のところ、女神パンドラにとって最も気やすくコンタクトを取れる養子はアニー・チャールトンなのである。

「ちょっと声をかけてみようかしら――」



　妖精王のひとり、オヴェーロンより簒さん奪だつした権能。

　これは賢人議会によって、『妖精王の帝てい冠かん』と命名された。

　アストラル界にあるオヴェーロンの旧領地を散歩程度の気やすさで訪問できて、あちらでは〝新・妖精王〟としてふんぞり返れるという能力だ。

　割と使いどころのむずかしい権能なのだが。

「持っている以上、どうにかして有効利用したいところだな」

　というわけで、ジョン・プルートー・スミスはアストラル界を訪ねていた。

　物質や肉体よりも、魂たましいと精神こそが重要——。

　それがアストラル界の決まりだった。この世界を旅してまわるとき、足や交通機関などは使わない。代わりに、行きたい場所のことを念じるのである。

　すると、一瞬にして目的地へ瞬間移動できる。

　長旅の苦労とは無縁の世界なのだ。旅行でも肉体ではなく精神を用いる。

（魔導の素養を持たない者などは目的地を上手うまくイメージできず、異界の迷子になってしまうともいうが）。

　しかし——瞬間移動では直じかに飛び込めない〝禁きん足そく地ち〟も存在する。

　そういうところへはひとまず近くまで転移して、あとは地上と同じように足なり翼なり泳ぎなりで地道に移動するしかない。

　スミスも今、そうした旅の真っ最中だった。

　ぎらぎらとした太陽の光を浴びながら、白い砂漠を黙々と歩いている。

　砂煙が舞う白砂の上を、黒面黒衣の怪人がさまよっているのである。ある意味、砂漠の民・ベドウィンにも似た格好であった。

　そして、黄色い蝶々がスミスのそばに飛んできた。

　こんな砂漠には不似合いすぎる昆虫は、可か憐れんな声で問いかけてくる。

「もしかしてシャイターンの魔神宮へ行く途中なのかしら、アニー？」

「義母はは上うえか」

　人語を発する蝶々、もちろん只ただの昆虫であるはずない。

　全てのカンピオーネの義母たる女神がメッセンジャーとして派遣したものだ。一目でそうと見抜いて、スミスは言った。

「ご指摘のとおりだ。ついでに言うなら、もう先に王女サロメの宮殿を訪ねているし、このあとは北の暴風王ボレアスの荒野をめざすつもりだ」

「あら。めんどくさいところばかりに行くのねー」

　いつものお気楽さでコメントしてから、女神は面白そうに訊きいてくる。

「生と不死の境界に君臨する妖精王の聖域を歩いてまわって、何をするつもりなの？　あなただって地上で——例の内戦に参加するつもりなんでしょう、アニー？」

「単なるあいさつまわりだ。特に意味はない」

　スミスはさらりと言った。

「いくら私でも、魔王同士の内戦から生還できる保証はない。万一の事態にそなえて、同じ妖精王の方々にあいさつしてまわってもおかしくはないだろう？」

　実はアストラル界には『かつてはまつろわぬ神であったが地上を去ったもの』『神とまではいかないがかなり上位の霊性をそなえた半神』『生身の肉体を捨てて不死となった元人間』なども隠れ住ん

でいる。

　そうした者たちが稀まれに、妖精王としてアストラル界の支配者層となるのである。

　彼らはたいてい、己おのれのプライベートスペースを禁足地としている。

　ぶしつけな瞬間移動では入りこむことのできない結けつ界かい空間として、迎え入れるに足る訪問者がやってきたときだけ、聖域の扉を開くのだ。

「それより義母上。この姿のときはあの名前で呼んでいただきたい」

「あー。例のあれね、はいはい。今のあなたはアニーじゃなくてジョンだものね。ほんと、こんなこと言い出す子は長い歴史のなかでもはじめてだわ……」

　いつもマイペースな女神パンドラが感かん慨がい深げにつぶやいている。

　彼女が現実世界に顕あらわれることはほとんどなく、逢あうのはもっぱらアストラル界でだ。真なる神と人間たちとの交流はそれほどむずかしいものなのだ。

　だからだろう。

　ほかのカンピオーネは地上にもどると、義母と対面した記憶を失ってしまう。

　だが、ジョン・プルートー・スミスだけがちがう。妖精王の権能を得て以来、パンドラとやりとりした言葉の大体を記憶している。

「年長組の子たちではアイーシャ、年少組の子たちではやっぱりジョンがいちばんの変わり種よね。持っている権能もちょっとだけ特別だし」

　女神パンドラの意思を宿した蝶々は愉たのしげにつぶやいた。

「ま……だからってアイーシャかジョンの勝ちとか有利って言えないところがあなたたちの面白いところだけど。とにかく誰がラーマ

王子と戦うのでもいいから、あいつにだけは絶対に負けたらダメよ！　いい、わかった⁉」

　義母の叱しつ咤たを聞きながしつつ、スミスは思う。

　たしかに、こうしてアストラル界をどさまわりしての仕込みが決定打になるかはあやしいところだが——

　ほかのカンピオーネにはないアドバンテージにはなるはずだった。

　ジョン・プルートー・スミスだけの切り札。問題はこれをいつ使うか。チャンスは一度きりしかない……。

4

　ラーマ王子との対決から三日後。

　護ご堂どうはひさしぶりに新しん宿じゆく歌か舞ぶ伎き町ちようを訪ねていた。

　が、お目当ての少年とその関係者に会うことはかなわず、ぼそりとつぶやく。

「もぬけのから、か……」

「ここの人たち、どこへ行っちゃったんだろうねえ……」

　いっしょについてきた清せい秋しゆう院いん恵え那なも怪け訝げんそうにしている。

　時刻は夜の七時になったばかり。この街の基準で言えば、まだまだ宵よいの口に過ぎない時間帯であった。

「香ホン港コン陸りく家けの秘密基地って、ここでいいはずなんだよね？」

「ああ。俺も前に来たことがある。鷹よう化かのやつはここに寝泊

まりしてるっていうし、たいてい誰かがいるって話だったんだけどな」

　とある雑居ビルの最上階だった。

　ここは――羅ら濠ごう教主の直じき弟子でし・陸鷹化が若わか頭がしらをつとめる香港陸家の日本支部。安っぽい業務用の机やイスがならび、小さな会社のオフィスっぽい場所なのだが。

　誰もいなかった。

　陸鷹化はもちろん、その舎しや弟ていさえも誰ひとり。

　……一応、彼らの私物やパソコン、書類などはほとんど残っている。

　だが人間は皆かい無む。ワンフロアまるごと『もぬけのから』であった。もちろん、天井の蛍光灯はひとつもついていない。

　窓の外から差しこむ月とネオンの明かりだけが、真っ暗なオフィスの光源である。

　ひどくさみしい眺めだった。

　尚、ここのドアを開けた合い鍵かぎは、共用玄関の錆さびついた郵便受けに隠してあったものだ。前に陸鷹化が隠し場所を教えてくれたのだ。

「陸家の鷹化くん、王様からの電話にも出ないんでしょ？」

「何度かけてもつながらないし、折りかえしもない。そのうえスカイツリーからは姐ねえさんまで消えた……。たぶん、準備をはじめたんだろうな」

「カンピオーネ全員でつぶしあう魔王内戦の、ね……」

　護堂と恵那はそろって、ため息をついた。

　いつも能天気な自然児の少女までが不安を感じている。ラーマ王子との対決者を決めるためのバトルロイヤル開催が近いと悟って。

「行こう王様。陸家の舎弟さんたちがどこに消えたかは、甘あま粕

かすさんとかが調べてくれるよ。恵那たちも——準備をはじめなくちゃ」

「そう……だな。それにしても姐さんのやつ」

　太刀たちの媛ひめ巫女みこにうなずきながら、護堂はぼそっとつぶやく。

「俺に伝言のひとつもなしに消えたってことは、相当やる気だな。きっと俺とも戦うつもり満々なんだと思うぞ」

　確信を込めての断言であった。

　恵那も反論しない。ふつうなら突とつ飛ぴすぎる可能性だが、羅翠すい蓮れんの気性を考えれば、むしろ自然な展開だとすら思える。

　ともあれ、ふたりは歌舞伎町の街中にもどった。

　にぎやかすぎる夜の繁華街。多すぎるネオンの明かりと人間たち。こんな場所を未成年がうろつくわけだから、学校の制服は当然着替えてある。

　護堂は無難なグレーのコートにセーター、ジーンズなど。

　可もなく不可もなく。特別おしゃれに気を遣つかうわけではない平均的男子高校生の私服姿と言うべきだろう。

　恵那の方も、いつもの制服を脱いでいた。

　黒のゆったりしたセーターに、フレアのミニスカート。そして黒いタイツにかかとまでの短いブーツという装よそおいだ。

　由ゆい緒しよある家いえ柄がらの大和やまと撫なでし子こにふさわしく、なかなかお嬢さまっぽい格好である。

　が、三尺三寸五分の大刀をおさめた布袋も持ち歩いている。紐ひもを結わえつけて、肩にかけているのだ。この大荷物のせいで、バンドでもやっている女子と見えなくもない。

「……よし！」

「どうした、清秋院？」

　護堂は訊たずねた。連れの少女が急に拳こぶしをにぎりしめたのだ。

「こうなったら恵那たちも切りかえなくちゃと思ってさ。教主さまやサルバトーレの王様なんかがまとめて敵になったとしても」

　いつもの快活さをとりもどして、恵那は力強く宣言する。

「絶対に草くさ薙なぎ護堂をラーマ王子と対決させられるよう、バックアップするからね！」

「…………」

「あれ？　王様の方はやる気ないの？」

「あのなあ。何度だって言うけど俺は平和主義者なんだ。カンピオーネ全員がしゃしゃり出てきそうなバトルロイヤルなんか、これっぽっちも参加したいとは思わないぞ」

「でもさ」

　護堂の答えを聞いても、恵那は悪びれずに言う。

「よろこんで戦う気はなくても、参加するつもりはあるんだよね？」

「……まあな」

「だよねえ。そうでなかったら東京に残っていたりしないもんねえ！」

「ぶっちゃけた話、自分以外のカンピオーネは信用できないからな。姐さんとかアメリカのスミスは結構あれで信頼できる相手だとは個人的に思うけど」

　護堂は静かに言い切った。

「信用できるかっていうと、また別の話だ」

「ははははは」

　微妙な言いまわしで訴えたいことを察してくれたのか。

　恵那が屈くつ託たくなく笑っている。気の置けない男友達のような少女であり、信用も信頼もできる仲間たちのひとりだった。

　その安心感にまかせて、護堂はふとつぶやいた。

「それにさ。今いるカンピオーネのなかで、ラーマのやつといちばん戦っているのは……俺だからな。俺があいつと戦うべきだと思うんだ」

　己おのれでなければ、大敵ラーマチャンドラには勝てない――などではなく。

　自負心や闘争心などとはまったく異なる感情ゆえに、護堂は淡々と語った。それはもしかしたら、軍神ラーマとの間に生まれつつある何かのせいかもしれない。

　一切の気負いなしに、護堂はさらりと言う。

「うん。やっぱり俺はあいつと勝負しなくちゃいけない」

「そうなの？」

「ああ。それが俺とあいつ、どちらのためにもなると思う」

「ふふふふ」

　急に恵那がふくみ笑いをしたので、護堂は首をかしげた。

「どうした清秋院？　俺、変なこと言ったか？」

「変じゃないよ。逆。王様のそういうところ、恵那は大好きだから」

「!?　い、いきなり変なことを言うなよ！」

「いいじゃない。王様と恵那の仲なんだし。おかしなことはひとつもないよ」

　太刀の媛巫女がふざけて、護堂の腕に抱きついてきた。

　にこにこと満面の笑みを浮かべて、ひどく楽しそうだった。思わず護堂もつられて笑い、ふたりして和なごんだ気分を共有し合ったのだが。

　……偶然だった。

　ふたりの前を若い男女のカップルが通りすぎていった。

　大学生くらいだろう。男の腕に女の子が抱きつきながら、仲むつまじく笑顔でおしゃべりしている。ちょうど今、護堂と恵那がそうしていたように……。

「…………」

「…………」

　護堂と恵那はハッとして、真顔になった。

「そ、そういえばさ。王様とこんなふうにお出かけするの、初めてかもね……」

「た、たしかにな。清秋院はよく山ごもりしているし、いっしょに出かけるときはヤバイ事件が起きてることが多いし」

　私服の清秋院恵那と、夜の盛り場をふたりきりで出歩く。

　考えてみれば、かつてなかったシチュエーションだ。ふつうの男女がふつうにデートでもするかのような……。

　自覚した瞬間、護堂はやけにどきっとした。

　恵那の方も同じなのか、急に目を伏せてしまい、もじもじとする。

　いつもの明朗快活な自然児ぶりがうそのようにしおらしい。だが、恵那はそれでも護堂の腕に抱きついたままで――。

「き、気にしてなかったけどっ。この辺ってさ、男の子と女の子で

仲よさそうな二人組の人たちが……結構多いよねぇ……」

　護堂と目を合わせないようにしながら、ぼそぼそとささやく。

　清秋院恵那にあるまじき振る舞い。だが男女のことを意識しだすと、いきなりひっこみ思じ案あんになる。それも彼女の性格なのだ。

　そして、こういうとき護堂も余裕を持てる方ではない。

「お、俺もふだん来ないから忘れてたけど……そういうところでもあるしなあ……。飲み会とかの本場っていうか……」

「あ——っ!?」

「どうした清秋院!?」

「な、なんでもないよ王様っ！」

　恵那がごまかそうとしている。しかし、ふたたび顔を上げた彼女の見つめる先にはさっきのカップルがいる。そして、新宿歌舞伎町にいくつかあるホテルのなかに——入っていくところであった。

　結果、ふたりで「…………」と沈黙することになり。

　護堂の腕にしがみつく恵那が『ぎゅっ』と密着を強め、それで護堂の心臓は『どきっ！』と心拍数を急上昇させてしまい——

　もろもろの勢いが盛り上がりかけた瞬間だった。

　唐突に、護堂の携帯電話が着信のメロディを奏かなではじめた。

「「!?」」

　恵那といっしょにのけぞりながらも、護堂はあわててコートの内ポケットから携帯を取り出した。リリアナからの着信だった。

浜はま離り宮きゆう恩おん賜し庭園。

かつて女神アテナと草くさ薙なぎ護ご堂どうが対決した戦場のひとつである。

もとは徳とく川がわ将軍家別邸の庭園であった。明治維新のあとは皇室に譲られて、のちに一般市民へも公開された。

隅すみ田だ川がわの河口に面していて、庭園内の池は海水を引きこんだものだ。

その浜離宮に護堂がふたたびやってきたのは、歌か舞ぶ伎き町ちょうの香ホン港コン陸りく家けアジトを訪ねてから二時間後だった。

べつにノスタルジーゆえではない。

集合場所として、ここがいちばん都合がよかったのだ。

「来たわね、護堂」

「こちらの準備は全て終わっています。あとは女神の御み心こころ次第。彼女が宣言どおりに旅立つおつもりなら——」

「何も問題はないというわけね」

恩賜庭園の敷地内に入ったら、エリカとリリアナが声をかけてきた。

エリカは紅と黒ロツソネロを紋章代わりにするだけあって、ワインレッドのコートを当然のように着ていた。丈たけは腰までと短めだ。

そこに白いトップスと黒のデニムジーンズを合わせている。

リリアナの方は青と黒ネラツズーロの申し子。グレーの短いブラウスの上に青いコートと黒タイツを組み合わせ、白いマフラーとニット帽を加えていた。

もちろん、清せい秋しゆう院いん恵え那なも歌舞伎町から同行したままだ。

　ただし、万ま里り谷や祐ゆ理りの姿はない。最高の霊視力を誇る媛ひめ巫女みこはラーマ王子との決戦時から護堂のもとを離れたままなのだ。

『最後の王』の真ま名なをたしかめるために幽かくり世よへ行った際、祐理はあちらに残った。

　今も向こうから草薙護堂の戦いを見守ってくれている……。

「でも意外だよね。あの女神さまが急に折れてくれるなんて」

　しみじみと恵那がつぶやいた。

　恩賜庭園の奥へと歩く途中だった。

「本当にそうだわ。ラーマ王子との戦いのあと、護堂が何度アストラル界への移住を勧すすめても承しよう諾だくしなかったというのに」

「今日になって、いきなり『そうしてやってもかまわん』だからな」

　エリカの言葉にリリアナもうなずいている。

　幽世／アストラル界への移住——正確には『隠いん居きよ』というべきか。

　一部のまつろわぬ神がたまにやるらしいのだ。地上をさまよう間に流る浪ろうの日々を厭いとうようになり、アストラル界での静かな暮らしを選択する……。

　恵那の保護者である〝おじいちゃま〟スサノオも、隠居した神のひとりだった。

　そして今回、問題の女神とはもちろん——

「アテナのやつ、昨日までは『志こころざしなかばで戦場を去るくらいなら、自決するまで』とか、いつ死んでもいいくらいのことを言ってたのになあ」

　宿敵でもある因いん縁ねん深い女神の名を、護堂は口にした。

　一度は死んだ女神アテナだが、彼女は神しん祖そパラス・アテナに転生しながらもかつての神性と記憶を取りもどし、地上にもどってきた。

　だがラーマ王子の復活時に生命力をほとんど失い、瀕ひん死しの状態でもあった。

　もう幾ばくの日数も生きられまいというほどに——。

　死にかけた肉体を捨てて幽世に隠居すれば、延命もかなうかもしれない。その可能性に懸かけて、護堂は『現世を去れ』と何度も勧めていたのだ。誇り高いアテナがうなずくことはないだろうなと、なかばあきらめつつ。

「……あいつが来たみたいだ」

　体に力がみなぎってきたので、護堂は言った。

　神々が近くに来ると、カンピオーネの心身はすぐに戦闘準備をととのえるのだ。確信にまかせて恩賜庭園の夜空を見あげる。

　一羽のフクロウが頭上を横切っていくところだった。

　まちがいなく女神の化け身しんである。ラーマとの対決が終わったあとからアテナは姿を隠してしまっていた。

　だが名を呼ぶと、どこからともなく小蛇やフクロウに変へん化げして出現する。

　そして今朝、人ひと気けのない道みち端ばたで護堂の前に顕あらわれて、告げたのである。

『例の件——生と不死の境界に妾わらわは旅立つべしという話。応じてやってもかまわぬぞ。すこし気が変わった』と。

　浜離宮から歩いてすぐの船着き場であった。

　隅田川のほとりである。ふだんは民間の船舶がいくつも係けい留りゅうされているのだが、今夜は全て片づけられている。

正せい史し編へん纂さん委員会とその責任者・沙さ耶やの宮みや馨かおるの手配だった。

この船着き場と浜離宮恩賜庭園を封へい鎖さして、草薙護堂とその関係者だけが使えるように配慮してくれたのだ。

だから今、ここには護堂と——銀髪の少女しかいない。

アテナ。ギリシア神話においては智ち慧えと戦争の女神だが、より古い神話では死と生命を司つかさどる大だい地ち母ぼ神しんとされる。

短めの銀髪と闇やみ色の瞳ひとみを持つローティーンの少女。

それが地上におけるアテナの現うつし身みなのだ。尚、どこから調達したのか、前にときどき身につけていた学校指定の制服らしき衣装を今夜も着用中だ。

「今こ宵よい、ここから妾は旅立つことになるのだな」

「ああ。人払いもしてあるし、俺の仲間がこのあたりの空気を清めて、あんたが力を使いやすいように調整してくれている」

命がけの決闘を何度も繰りひろげた女神と神殺し。

それがウソのように、ふたりきりでおだやかな言葉をやりとりしている。



「今朝いきなり隠居してもいいとか言われたもんだから、急に準備するのがたいへんだったらしいぞ。まだ気は変わってないだろうな？」

「うむ」

「そもそも、何だって急に心変わりしたんだよ？」

「……予兆を感じた」

　護堂とアテナの間には、三メートルほどの距離がある。

　しかし、どちらも詰めようとはしない。これでいいのだ。その気になれば即座に間合いを詰め、つかみ合いの死闘もはじめられる。吐と息いきを死の呪じゅ詛そに変えて、草薙護堂の口に吹きこむこともできる。

　近いようで遠く、遠いようで近いという微妙な距離感――。

　これこそがふたりの関係そのものであった。

「よかったら、俺にもわかるように教えてくれよ」

「異変の予兆だな。まだ子し細さいはわからぬ。が、この都――神殺し同士のつぶし合いがはじまろうとしている都の外でも、只ただならぬ何かが動き出している」

　天てん啓けい・直感などの形で多くの叡えい智ちや知識を得る。

　それもアテナの権けん能のうだという。彼女はそれゆえに智慧の女神なのだ。

「異変？　それってやっぱり……」

「まずまちがいなく、あなたがた神殺し七人の誰かが元凶になるのであろう。あるいは七人全員でしでかすのやもしれぬが」

「この都――東京の外で起きる揉もめ事なのにか？」

　自分で言ってから、護堂はすぐにハッとした。

「もしかして……その異変、幽世の方で起きそうなのか？　あんた

たちの言葉だと、生と不死の境界ってやつ」

「ふっ」

　アテナは冷たく微笑しただけだった。

　だが、この女神とのつきあいもなんだかんだで長い。わずかな唇くちびるの動きに肯こう定ていの意味を見み出いだして、護堂はようやく納得した。

「それであんた、この隠居話を急にオーケーしたのか」

「その異変がラーマ太子とのいくさにどこまで影響をおよぼすかはわからぬ。だが、影響しないのであれば、するように細工してやればいい……。命尽きかけた我が身でどこまで成せるかは読めぬが」

　くくくとアテナはほくそ笑む。

「あの者に復讐の一撃を加える最後の機会となるかもしれん。だったら、朽くちかけたアテナの命を——そこで使い切るのも悪くない」

　この期ごにおよんでも、まだ闘志を失っていなかったのだ。

　延命ではなく、報復のチャンスに懸けるため、女神は旅立とうとしている。つくづくアテナらしいと護堂はうなずいた。

「わかった。なら、好きにするといい。向こうには万里谷……俺の仲間もいる。その物ぶつ騒そうな異変とやらが起きたときは、よかったら守ってやってくれ」

「知らぬ。そのような些さ事じに妾が心を砕くべき理由、何ひとつない」

「…………」

　さすがと言うべきか。こんなところにもブレがない。

　それ以上の要請はせず、護堂は肩をすくめた。そして、アテナの方はひどくさらりとした口ぶりで簡潔に言う。

「此こ度たびはこの言葉を口にしよう。さらばだ、草薙護堂」

前回、消え去るときのアテナはこう言った。別れは告げぬと。

それは護堂と女神の間で、絆きずなっぽい何かができたからこその変化——なのだろうか。あるいは、単なる気まぐれなのだろうか。

いずれにせよ、アテナの肉体が端から砂になっていく。

細い銀髪の先端、白い繊せん手しゆの指先などがさらさらと崩れはじめ、その崩壊はすぐに全身へと広がり、少女の形はあっというまに失われてしまう。

そして、夜風に乗って宙を舞う砂の間から、青白い光の玉が出てきた。

女神アテナの霊魂、なのだろうか。

いずれにせよ光の玉は隅田川河口へと飛び出し、そのままふわふわと東京湾——海に向けて漂っていく。

古来、海という領域は異世界のメタファーでもあるらしい。

彼ひ岸がんに対する此こ岸がん。此この世に対する彼あの世。海の果てには極楽浄土や理想郷があると、数あま多たの国の伝でん承しようが語っている——。

甘あま粕かす冬とう馬まが教えてくれたうんちくを、護堂は思い出した。

だから旅立ちの場所を海辺に用意して、幽世に行きやすくしたのだとか。

その理屈を裏づけるように、光の玉は沖合いへと飛ぶうちにすこしずつ小さくなり、やがて唐突に消え失せてしまった。

女神の魂は今、彼方かなたの世界へと旅立っていったのだ。

「行ってしまいましたねえ」

護堂に声をかけてきたのは、甘粕冬馬だった。

　うんちく語りが好きな正史編纂委員。いつもどおりにくたびれた背広を着ている。経験豊富な彼も、しみじみと海の方角を眺めていた。

「これで一区切りついたと、休憩していただきたいのはやまやまなんですが」

「やっぱり無理ですか？」

「はい。草薙さんのお仲間が続々と日本にやってきてますよ」

　黒王子アレク。

　剣の王サルバトーレ・ドニ。

　アイーシャ夫人。

　そして真打ちともいうべきヴォバン侯こう爵しやく。

　四名もの神殺しがすでに来日していることを確認したと、甘粕は報告してくれた。

　ここに羅ら濠ごう教主と、草薙護堂が加わるのである。ただジョン・プルートー・スミスだけは居所を確認できなかったがと断ってから。

　正史編纂委員会のエージェントは感かん慨がい深げに言う。

「いやはや、これで何にも示し合わせてないんだから、カンピオーネの方々というのは本当に常じよう軌きを逸いつした存在です」

「同感ですけど、そこに俺は交まぜないでほしいような……」

「はははは」

　笑ってごまかす甘粕を尻しり目めに、護堂はふとコートのポケットに手を入れたのだが。

　そこで気づいた。何か入っている。すくなくとも浜離宮にやってくる前まで、ここには何も入れてなかったというのに。

　取り出してみると、それは折りたたんだ紙片だった。

「手紙か……」

　広げた紙片には、美しい筆跡で短文が綴つづられていた。

　それは草薙護堂に宛てた、ある人物からのメッセージであった。

第２章　七戦士、一堂に会す

1

「アレクサンドル・ガスコイン。あなたの神をも恐れぬ大胆さは承知しております。ですが今回、あなたがしでかしたことは――到底許せそうにない……」

「何を言う、アイスマン」

　腹ふく心しんの部下にして最高の守護騎士が唇くちびるを震わせている。

　怒りを静かに押し殺しているのだ。しかし、そんなサー・アイスマンへ、黒王子アレクはにべもなく言った。

「俺の単独行動にいつも文句を言うのはおまえじゃないか」

「たしかにそうです。しかし、今回のあなたは人間としてやってはならない一線を越えてしまった……」

「そうだろうか？」

　アレクは肩をすくめて、横にらみするアイスマンから顔をそむけた。

　代わりに、すばらしい眺望を見わたすことにする。高層ビルの集まった東京の新しん宿じゆく副都心でも、四八階建てと特に高いビルの四五階にいるのだ。

　西新宿のランドマーク、東京都庁である。

　このフロアは展望室になっている。高さ二〇二メートルだという。

　大東京の名所という名所をここから見わたすことができる。

　お台だい場ばのレインボーブリッジ、東京タワー、スカイツリー、さらには横浜のランドマークタワー、富士山なども……。

　平日の正午で天気は快晴、雲もすくない。おかげで抜群の眺めだ。

　みごとなパノラマを楽しむアレクへ、アイスマンはさらにねちねちと言う。

「無論、あなたが三カ月前に通達していたのであれば、話はちがいます。『アイスマンよ、来きたる日本遠征の折にはおまえを護衛として同行させるぞ』と。私はイエスと即答し、日本への船便を抜かりなく確保して、堂々たる来日を果たしたはず――」

「バカを言うな。そんな大航海時代のやり方でどうする？」

　部下の蒙もうと直面して、アレクは眉まゆをひそめた。

「イギリスから極東アジアまでは遠い。遠すぎる。素直に空路を使うべきだ」

「だからといって、いやがる私に一いつ服ぷく盛って、だまし討ちの形で飛行機に乗せるなど……言語道断だ！」

　重度の飛行機恐怖症であるサー・アイスマンは弾だん劾がいする。

　まさしく血を吐くような叫びであった。

　こんなことを口走る彼は欧おう州しゆうでも最高レベルの実力を誇る大騎士。俗な言い方をすれば、なかなかハンサムな美形中年でもある。

　にもかかわらず。

　飛行機だけは死んでも御免という信念を絶対に変えない、頑固者でもあった。

「済んだことをいつまでもぐだぐだと。眠ったおまえを機内に連れこむときは、俺も苦労したんだぞ？　あれこれ術を使って、空港職員やＣＡたちをごまかして……」

「自じ業ごう自じ得とくでしょう」

「大体、一週間前には東京に来る予定もなかったからな。船便の取りようもない。が、俺の補佐役として、どうしてもおまえを連れていきたい。以上の要件をクリアするためにやったことだ。そろそろ納得しろ」

「まったく、あなたという人は……。まあ」

　アイスマンはようやくごねるのをやめて、鋭い視線を外に向けた。

　その冷静さを氷に喩たとえられる男は展望室の外――東京タワーをじっと見つめる。赤く塗装された電波塔は、メジャーな東京名所として、広く知られてきた。

　高さ三三三メートル。堂々たる電波塔。

　どこかレトロ感のただよう、郷きよう愁しゆうを催もよおす外観だったそうだが。

　その巨大な鉄塔、今は見るも無惨なほどに全体が焼け焦げてしまっている。激しい稲妻で数え切れないほど打たれた結果だという。

　一部の再建工事がはじまっているものの、復活の日はまだまだ遠い……。

「今回はたしかに私もいた方がいい。あの東京タワーとやらの惨状――デヤンスタール・ヴォバン侯こう爵しやくと草くさ薙なぎ護ご堂どうが共演した結果なのでしょう？」

「ああ」

　半年ほど前、激しい嵐の夜にふたりは対決したらしい。

　結果は引き分け。このニュースは欧州魔術界にも伝わり、新たなる魔王・草薙護堂の名をさらに知らしめる一因となった。

「カンピオーネ二名による決闘であれなら、直じきにはじまるであろう魔王総動員の大戦がどれほどの被害を生み出すことか。考えたくもありません」

「同感だ。だから」

　アレクは肩をすくめた。

「ほかのカンピオーネを出し抜く方法は臨機応変に考えていくべきだろう。おまえをこの街に連れてきたのも、それを手伝わせたいからだ」

「承知いたしました。飛行機の件はしばらく保留といたしましょう」

「きれいさっぱり水に流すのも男の器量だと思うがな……」

　若じやつ干かんのわだかまり（？）を残しつつも、主従は目的意識をひとつにした。

　尚、アイスマンとアレクはどちらも背の高い白人である。そんなふたりが声をひそめながらも早口の英語でやりとりしている。

　日本ではかなり目立つコンビのはずだが、さすがにここは新宿だ。

　同じ展望室に居合わせる日本人も、外国人観光客なども、それほどアレクたちに注目していない。

　しかし、ふたりはとっくに察していた。

　物陰や人ごみのなかに、自分たちを監視する輩やからがひそんでいると。

「日本の組織……正せい史し編へん纂さん委員会でしたか？　彼らはなかなか勤勉ですな」

「まあ、今はしっかり仕事をさせてやろう。どうせいつでも振り切れる。連中が上司に叱しつ責せきされる回数を面白半分に増やすこともない」

「同感です」

　正直に言って、アレクたちは正史編纂委員会など眼中にない。

　彼らと自分たちでは、修しゅ羅ら場ばをくぐり抜けた経験がちがいすぎる。まあ、『最後の王』の真ま名なを委員会のスタッフが突きとめたらしいという一件だけは瞠どう目もくに値あたいするかもしれないが……。

　ともあれ、アレクはささやく。

「ロスのコスプレ狂だけは現在地不明だが、それ以外のカンピオーネは全て日本……それもここ東京に集まっているという」

「降りかかる火の粉を払うために、火薬持参で花火会場へ集まったわけですか」

　アイスマンは痛ましげにかぶりを振った。

「示し合わせたわけでもないのに、どの魔王殿もつくづく業ごうが深い」

「住所不定の侯爵どのと、容姿以上に頭の中身が可か憐れんな貴婦人どのは途中までいっしょに行動していたらしいがな」

「ほう」

「ただし、貴婦人どのが今もあの老人に同行している可能性は……低いな」

　アイーシャ夫人の強烈すぎる個性を、アレクは思い浮かべた。

「彼女はあれで、危険の匂においには異様なほど鼻が利きく。世界で唯ゆい一いつ、ヴォバン侯爵を翻ほん弄ろうできる〝魔ま性しようの女〟であっても、あまりに長く〝狼おおかみ〟と共にいるのは——自殺行為だと、理性ではなく本能で承知しているはずだ」

「あの御方が魔性の女ですか……」

「実情とは若干ちがうかもしれんが、まちがってもいないと思うぞ？」

「まあ、たしかに。それでアレク、あなたは来きたる魔王内戦で——まず最初にアイーシャ夫人を排除すべしと言っておりました

が」

　アイスマンは探るように言った。

「その方針に、今も変わりはありませんか？」

「ない。例の……妖精の通つう廊ろうには、何度か俺もひどい目に遭あわされたからな。おかげで学習できた。カンピオーネが何人いようと、通廊のなかにまとめて突き落とすことさえできれば——全員を時間旅行に巻きこめるはずだ」

「…………」

「上手うまくすれば、それで現世から全てのカンピオーネがいなくなる。『最後の王』も魔王討とう伐ばつの使命を果たして、ふたたび眠りにつける」

「申し分のないハッピーエンドに聞こえますな」

「だろうな。だが——俺にはわかる。一見、誰も傷つかない最良の決着だと思えても、逆にそれこそが最悪の破滅への一本道であることが……」

　暗い瞳ひとみで黒王子アレクは言い切った。

「その未来を回避するために、あえてアイーシャ夫人を最初の標的とすべきだ」

「なるほど——ん？」

　不意にアイスマンが目をみはった。

　アレクはその視線の先をたしかめて、「ほう」とつぶやく。

　四五階、高さ二〇二メートルから大東京を見わたせる展望室——その人ごみのなかに、いつのまにか旧知の人物がやってきていた。

　アレクも前に一度だけ、顔を合わせたことがある。

　狷けん介かいそうな目つきの美少年。一四歳前後だろう。

　魔教教主・羅ら翠すい蓮れんが育てる只ただひとりの直じき弟子でし——だったはずだ。彼はまっすぐアレクサンドル・ガスコインを見つめている。

　長なが袖そでのＴシャツ一枚の上に、黒い革ジャンを羽織っていた。

「珍しい客だな」

　つぶやくアレクの方へ、少年は歩みよってくる。

　彼は右手に封筒をにぎっていた。何か手紙でも入っているのか、それを黒王子に手渡すつもりらしい。差出人は誰か、考えるまでもない。

「我が師・羅ら濠ごうの命めいを受けて、参上いたしました」

「ああ」

　公衆の面前であるにもかかわらず、美少年はアレクの前でひざまずく。

　もちろん周囲の注目が集まるものの、そんな些さ事じは気にしない。うやうやしく差し出された封書を鷹おう揚ように受け取り、さっと中身を取り出して。

　入っていた手紙の内容に、アレクはにやっと微笑した。

　最古参の神殺しのひとりがついに、本格的な動きを見せたのだ。

　これこそ魔王内戦のはじまり。

『今こ宵よい、皆様と是ぜ非ひお目にかかりたく思い——』

魔教教主・羅翠蓮からのメッセージがアレクの闘志に火をつける……。

2

再会の場所は、贅ぜいを尽くした造りの豪邸だった。

東京都港みなと区、六ろつ本ぽん木ぎに位置している。館全体の壁は白く塗られていて、瀟しよう洒しやかつ垢あか抜ぬけた雰囲気であった。

なんでも『南なん欧おうの洋館』をイメージして、建築されたらしい。

匠たくみの技とこだわり、そして予算をふんだんにつぎこんだお屋敷である。

玄関ホールには豪ごう奢しやなシャンデリアなどもつるしてあり、内装も壮麗だった。こんなところで夏のバカンスを過ごせたら、すばらしく楽しい経験になりそうだ。

だが、しかし。

屋敷の応接間でリリアナは思う。ここはまちがいなく、欧おう州しゆう某国の大使館——その敷地内にある建物なのだがと。

「侯こう爵しやく閣かつ下か」

「なんだね、リリアナ・クラニチャール？」

「ひとつ質問をお許しください。わたしの認識がたしかなら、ここ

は……」

　リリアナからの質問を聞いて、瘦やせた老紳士はにやっと笑う。

　威厳あふれる大人物ながら、ひねくれたユーモアの持ち主でもあるのだ。

「私のしもべを祖父に持つ騎士としては、いささか呑のみ込みが悪いな」

「恐縮です」

「まあ、いい。要するにここは、我が陣営の適当な者に声をかけて用意させた——当座しのぎの仮住まいなのだ。東京で駐ちゆう日にち大たい使しをつとめる者の大使公邸とやらを、デヤンスタール・ヴォバンのために明け渡させたわけだな」

「…………」

「なに、本国にも話は通してあるらしい。気兼ねせずにくつろいでくれ」

「……承知いたしました」

　尚、リリアナは老カンピオーネの前でひざまずいている。

　サーシャ・デヤンスタール・ヴォバンの名で知られる彼は、実に二〇〇年以上もの歳月を魔王として君くん臨りんしてきた。

　そうした土台ゆえに、こうもバカげた蛮ばん行こうが罷まかりとおる。

　南欧の大国より派遣された大使を追い出し、その住居を『バカンス期間中の別荘』程度の気やすさで私物化してしまう。

　しかも、侯爵自身は指の一本も動かさないままで……。

「閣下。本日はなぜわたしをこちらに？」

　日本時間の午前五時頃、リリアナは祖父からの連絡を受けた。

『侯爵閣下よりの召集に必ず応こたえよ』

　と、場所と時間まで指定されて。ヨーロッパ中を気ままに渡り歩くヴォバン侯爵だが、故郷でもあるバルカン半島での影響力が抜きん出て強い。

　彼の地の生まれである祖父は、ゆえに侯爵の信しん奉ぽう者しゃであった。

　リリアナはカンピオーネ同士のバトルロイヤル直前だというのにと首をかしげつつ、ここまでやってきたのだ。

「伝言を頼んでおこうと思ってな。例の言葉を覚えているかと」

「…………」

「無論、誰に宛てた伝言かは——」

「心得てございます。必ず草くさ薙なぎ護ご堂どうに報告いたしましょう」

「うむ」

　半年前——草薙護堂と決闘した直後、ヴォバン侯爵は告げた。

『次に相あいまみえるときこそ、貴様を全力で狩り捕ってやろう。そのときに備えて、腕を磨いておけ。修しゆ羅ら場ばをくぐり抜けておけ。今のままの貴様でかなうほど、本気のヴォバンは甘い敵ではないぞ』

『いまより貴様は、我が敵のひとりとなる』

　老いたる狼ろう王おうから、未来の宿敵候補へ宛てた挑戦。

　伝えるべきはそれに決まっている。いまや草薙護堂の騎士となったリリアナ・クラニチャールは主あるじの代理として、老カンピオーネの視線を受け止めた。

「ふっ」

　ヴォバン侯爵はかすかに唇くちびるをゆがめ、微笑した。

　生者を等しく塩に変えるエメラルド色の邪じや眼がんも、どこか愉たのしげに見える。

　七人ものカンピオーネが一箇所に集まり、最後のひとりになるまで戦い抜くという未み曾ぞ有うのゲームを前にして、戦士の血がたぎっているのだろう。

「そういえば」

　ふと思い出して、リリアナは言った。

「閣下はアイーシャ夫人と共に来日されたと耳にしております。よろしければ夫人にもごあいさつをさせていただきたく思うのですが──」

「さて。すこし前から姿を見なくなっている。どこに消えたものかな？」

　本当に知らないのか、あるいは韜とう晦かいなのか。

　さらりと受けながしてから、ヴォバン侯爵はにやりと笑った。決して多くを語らなかったリリアナの口ぶりから、何かを察したようだ。

「どうやら、おまえたちもついにあの魔女と遭遇したようだな」

「はい。先日、機会を頂ちよう戴だいいたしました」

「運の悪いことだ。まあ、神々と神殺しの近くをさまよい歩く以上、その不幸にいつか見舞われてしまうのは必然だとも言えるのだが」

「…………」

　侯爵のコメント、聞きようによっては同情とも取れる。

　冷酷なる神殺しの暴君から、こんな発言がまさか出てこようとは。

　さすがはアイーシャ夫人というべきか。そして、リリアナは夫人への不敬に当たる相づちをつい打ちそうになって、あわてて口を閉ざした。

「それよりもクラニチャール」

　一方、ヴォバン侯爵はある品を取り出していた。

　封書だ。昨晩、同じものが草薙護堂の手元にまぎれこんでいた。おそらく投とう函かんの魔術で送られてきたのだろう。

　あのなかには魔教教主からの文ふみが――リリアナはハッと顔を上げた。

　人間の皮をかぶった狼にも喩たとうべき魔王は獰どう猛もうに笑いながら、問題の封書をぐしゃりとにぎりつぶしてみせた。

「おまえの主人も誘いに乗るつもりなら、思ったより早く再会がかないそうだな。なかなか愉しい夜になりそうだ」

「お帰りなさいませ、ご主人さま～！」

　アイーシャは元気よく、おきまりのあいさつを声出しした。

　スズメは一〇〇歳まで踊りを忘れない、昔取った杵きね柄づかなどともいう。かつてインドが大英帝国の植民地だった頃、天涯孤独の少女アイーシャは英国貴族の屋敷で働く住みこみのメイドであった。

　あの頃と変わらぬ朗ほがらかさで、今日も潑はつ剌らつとメイド仕事をこなしている。

　まあ、ただし。

「お帰りなさいませ、お嬢さま～！　こちらのテーブルへどうぞ～！　ただいま今月の期間限定メニュー『しろくま風お好み焼き・生クリームとアボカドを添えて』がみなさまに大好評なんですよ～！」

　勤務地は東京都千ち代よ田だ区の秋あき葉は原ばら。

　いまや世界的に有名なメインストリート〝電気街〟からはすこしはずれた、神かん田だ川がわ沿いにある雑居ビル内の――いわゆるメイド喫茶、なのだが。



　無論、こんな稼か業ぎように精を出す理由はある。ちゃんとある。

「東京に来たばかりなのにおサイフを落としちゃうなんて……わたくしとしたことが、とんだ大失敗でした」

　なのだ。

　運悪く、六本木にある友人の仮住まいを離れた直後だった。

　きっかけはあの屋敷の台所で、たまたまニシンを見つけたことだ。いろいろ世話になっているお礼として、アイーシャは英国伝統のフィッシュパイを作ろうとした。パイ生き地じのなかに魚を何匹も埋めこみ、その頭だけをニョキッと突き出させる。

　死んだ焼き魚ににらまれて、初めて見た外国人はたいていドキッとするらしい。

　しかし、調理の途中でなぜかオーブンから出火して、ボヤ騒ぎになり——

　直後、アイーシャは衝動的に屋敷を去った。

　逃げたわけではない。新しいオーブンを買うつもりだったのだ。

　……まあ、日本に到着した頃から〝ヴォバンお兄さま〟が闘志を着々と高まらせつつあったので『そろそろかしら？』と潮しお時どきを察していたことも、すぐに逃げなきゃと衝動を爆発させた理由のひとつかもしれない。

　ともあれ、アイーシャは秋葉原の家電量販店で気づいたのである。

　愛用のサイフをいつのまにか紛ふん失しつしていた一大事に。

　もちろんアレクサンドリアの本宅や世界各地にいる友人たちと連絡を取れば、すぐに送金してもらえただろう。

　だが、そうした連絡先のメモまでいっしょになくしていたわけで……。

かくして、アイーシャは決意した。

『自分の道は、自分で切り開かなくっちゃ！』と。

すぐさま秋葉原近辺で人材募集のビラを見つけ、そのメイド喫茶に押しかけた。

尚、面接の際に二十代後半の男性店長は、

『えっ、履歴書ないの!?』『住所も保証人もなし!?　そもそも日本在住じゃない!?』『観光目的の来日でバイトっていいのかな？』『国籍は一応イギリス……一応って何？』『喫茶店じゃない本格メイド経験ありって、どこで？』『年齢一七——おまけに未成年かあ』

などなど、頭をかきむしりそうになっていた。

が、最後にはアイーシャの笑顔と懇こん願がんに免じて、快こころよく雇こ用ようしてくれた。

それどころか『泊まる当てもないなら、店で寝泊まりするといいよ！』と、住みこみで働く許可までくれた。本当にいい人だ。

おかげでここ数日、アイーシャは閉店後の店内でぬくぬくと寝られている。

さすがに寝具はなかったので、近くの電器店から大量のダンボールを頂戴してきた。もちろんタダ、代金は笑顔のみだ。

ダンボールを布ふ団とんの代用品にするのは、初めての体験だった。

『下手へたな寝袋とか安い布団よりもあったかくていいッスよ。ぼくも昔、会社に泊まるときはよく使っていたッス。一週間に六、七回くらい……』

調理場で働く男性スタッフがすすめてくれたのだ。

ちなみに彼は三十代前半、三カ月前までは某ぼう美少女ゲームメーカーとやらで制作進行をしていたのだとか。アイーシャにはよくわからない職種だった。

　昼と夜の食事はまかないで出してもらえる。

　おとなりの上うえ野のまで行けば、銭湯という公衆浴場もばっちりある。

　メイド仲間の女の子たちもやさしい。

　まあ、ときどき『連絡帳もなくしちゃったから、知り合いの住所も電話番号もわからないんですか～っ!?　スマホとかのバックアップは——ええっ!?　アイーシャさん、ガラケーもパソコンも全然使わないの!?　ふふふふっ。うちのひいおばあちゃんみたいです～！』などの無邪気さに打ちのめされることもあるが。

　何はともあれ、冬のスラム街の道みち端ばたで毛布もなしに寝ていたときより遥はるかにいい。

　世界中どんな時代に行っても、会う人みんなが親切にしてくれる。

「わたくしって本当に幸せ者だわ」

　しみじみと実感しつつ、今日もランチ営業でいそがしい。

「萌もえ萌もえきゅん、はあと♪　いかがですか、ご主人さま？」

「いっしょにおまじないをお願いしますっ。おいしくなあれ、おいしくなあれ」

「きゃあっ!?　申し訳ございませんご主人さま！」

　オムライスへのケチャップがけ、特殊な接客用語など、秋葉原メイド特有のハウスルールもすでに習得済みである。ときどき配はい膳ぜん中に転んだり、お皿を落として割ったりなどのアクシデントもあるが、おおむね順じゆん風ぷう満まん帆ぱんだろう。

　かつてのメイド時代よりヒラヒラの多いエプロンドレスにも慣れた。

「あら？　わたくしが日本に来た理由って……なんだったかしら？」

　首をかしげながら、テーブルの片付けをしていたとき。

　今、帰ったばかりの女性客の忘れ物に、アイーシャは気づいた。ビラだった。

「何かしら？　ええと、『世界のＡＫＩＢＡで活躍するアイドル候補生を募集中』『一次審査は写真・書類選考。二次審査は歌とダンスの実技試験』……これは！」

　アイーシャは天てん啓けいを得た思いであった。

　ＡＫＩＢＡから世界へ発信。ただの女の子を超えた偶像崇すう拝はいの対象へ。世界中の人々へ感謝の気持ちと愛を伝えるアイドル――。

　もしかすると、これこそ己おのれの天職なのではないか？

「お、オーディションの参加資格は『秋葉原に通勤可能な一二歳から二五歳の女性』であること。そう……そうなのね。条件的にはちょっと厳しめ――ううん、ほとんど問題ないし、思い切って受けてみようかしら……」

　ぶつぶつ言いながら、アイーシャはビラを取りあげる。

　きれいにたたみ、エプロンドレスの前ポケットにつっこんで――気づいた。すでにべつの品物が入っていた。

「何かしら、これ……？」

　封書だった。投函の術あたりでポケットに送りこまれたのか。

　誰が何のためにこれを？　不思議がりながら中身をチェックして、アイーシャは激しいショックを味わうのだった。

「そもそも、これは何の酔すい狂きようだ？」

　サルバトーレ・ドニの親友は冷たくコメントした。

　アンドレア・リベラ。イタリアの全魔術師を代表して〝剣のカンピオーネ〟を補佐（監視ともいう）する切れ者だった。

「真冬の二月にわざわざ海へ繰り出して、こんな旧式の船で沖合い

にまで来て、釣り糸を垂らす……。訳がわからん。まったく必然性がないぞ？」

「我が内なる心の声にしたがったまでだよ、アンドレア」

　東京湾の洋上、停船中の釣り船の上。

　船ふな縁べりで折りたたみのイスに腰かけるイタリア男ふたり以外、乗客はいない。海風を浴びながら初老の船長がタバコを吹かしている。

　釣り糸を垂らすのはドニのみで、リベラはただ隣に付き添うだけだ。

「メバルとかアジとかスルメイカとか、冬の東京湾の魚も美味おいしいもんだよ。ちょっとつまみ食いしたくなったもんでねえ」

「どこか適当な料理屋に入れば済む話だろう！」

「いやいや。自分で釣るからいいんだよ。運がよければフグもゲットできる」

「あれか。体内に毒をふくんでいるという日本の高級魚……」

「釣れたら料理してあげるよ、フグ。刺身に鍋、唐揚げ、どれも絶品でね。大丈夫、毒のある肝きもさえ取っちゃえば大体は問題ないはずなんだ」

「絶対に御免こうむる」

「おいおい。僕が料理もいける方なの、君も知ってるだろう？」

「無駄に手先が器用だからな。だが、そもそもフグとやらの調理には専門資格が必要だと聞いている。毒のある部位はフグの種類や個体ごとにばらばらで、あつかいには知識と慎重さが求められるともな！　どれもおまえに欠けているものだ！」

「さすがアンドレアだ。僕よりくわしいじゃないか」

「その程度も知らないで死亡遊戯に足を突っ込むおまえがおかしいだけだ！」

ひとしきり糾きゆう弾だんしてから、リベラは肩をすくめた。

声をいつものトーンにもどして、じろりとドニをにらみつける。

「それはそうとサルバトーレ・ドニ。おまえにしてはずいぶん日本の事情にくわしいな。釣りやフグだけじゃない。そいつの入手ルートも……」

「はははは」

ドニは軽薄に笑った。

ロッドなどの釣り具と共に、船へ持ちこんだ品物がある。

布袋に入れてカモフラージュしてあるが——漆うるし塗りの鞘さやに収めた日本刀だ。

マサムネ、ムラマサ、ムラナマだのといった独特の銘めいはない。第二次世界大戦中、どこかの軍需工場で製造された無む銘めい刀とうだという。あの凄せい惨さんな時代、こだわりと匠たくみの国・日本でもそういう無む節せつ操そうな大量生産品が誕生したのである。

名工の手による一品物こそが正当なる日本刀。

そのイメージを神聖視したい人々には、甚はなはだ不評であろう。

だが、なかなかよく切れる。しかも頑丈。ドニにはそれで十分だった。

「実はねえ。護堂なんかが僕のお仲間になる前だけど、何カ月か日本に滞在してたことがあるんだよ。東京はもちろん、京都とか奈良にも行ったりして。イタリア語訳された日本のニンジャ漫画カートウーンを読んで、興味がわいたからさ」

「ふん。そんなことだろうとは思っていたが、やはりな」

「ふふふふ」

前回の来日時に、とあるヤクザ組織と縁ができた。

　右う翼よく団体だった気もするが、その辺には興味がないのでどうでもいい。

　とにかく、その組織のトップが自宅の床とこの間まに日本刀を飾っていたと思い出して、強引に押しかけたあげく、拝借してきた。

　愛用の刀剣類はイタリア出国時に置いてきたから、かなり助かる。

「これでいつ内戦がはじまっても大丈夫。僕の準備はバッチリ完璧ってわけだ。ゆっくりトラフグかサバフグあたりが釣れるのを待って、のんびりするとしよう」

　なんとも自じ堕だ落らくな宣言をしたときだった。

　快晴の青空を——一羽のカモメが横切っていった。ドニたちの釣り船に、何かを落としていくおまけつきで。

　それは封書で、リベラの目の前にひらひらと落下してきた。

「何だ、これは？」

　空中でひったくるなり、封書の中身をリベラは一いち瞥べつした。

　そのまま無言でドニの方へ差し出してくる。めんどくさいなと思いつつ渡された手紙をつらつらと読んで——

　無む双そうの剣王はうんとうなずいた。

　いよいよ今夜、一大イベントの幕開けとなるのだ。

3

　夜が来た。

　木曜日。晩ばん冬とう二月の午後八時過ぎ。夜よ闇やみが深い。

「ひさしぶりに寒いな」

　護ご堂どうはぼそっとつぶやいた。

　世界中の火山帯を活性化させるラーマが一時復活した影響か、最近は連日かなりのあたたかさだった。その反動がついに出たのだろう。

　今夜の冷えこみはかなりきつい。

　真冬らしさ、日本の二月らしさがもどってきたとも言える。

　ラーマの影響低下がどこまで保もつかは——自分とほか六名次第、なのだが。

「こういうときってふつう、『みんなで協力し合って事件を解決しよう』みたいな流れになるはずだよなあ……」

　しみじみとつぶやきながら、護堂は夜道を歩いていた。

　ただし、道は道でも——

「まさか羽はね田だ空港のこんなところに来るなんて、夢にも思ってなかったよ」

　護堂は今、ひとりきりで夜の滑走路にいる。

　昨晩とどけられた義姉あね・羅ら翠すい蓮れんからの招待状。そこには『明日、皆様と是ぜ非ひお目にかかりたく思い……』云うん々ぬんと綴つづられていた。

　集合場所として、ここ羽田空港が指定されていて——

「今夜、羽田で発着する予定だった飛行機が全部欠便になるって、とんでもない話だぞ。世界中の人たちにどれだけ迷惑かけてんだよ……」

　Haneda Airportに今夜、七名のカンピオーネが集結するかもと。

　正せい史し編へん纂さん委員会によって、世界各地の国際空港に通達されたという。結果がこの特別かつ緊急な措そ置ちであった。

　夜間といえども、羽田空港に出入りする飛行機は多い。

　その全てを欠航に追いやった理由、表向きは『空港施設のトラブル』だ。しかし、本当のところは神殺し七人の威い名めいと悪あく名みようなのである。

　尚、これもカンピオーネたちへの配慮なのか。

　夜間に着陸する飛行機のための誘導灯――滑走路に埋めこまれたライトの大部分が点灯中だった。空港関係者が気を利きかせたのかもしれない。

　ただし、護堂をふくめた全てのカンピオーネは夜目が利く。

　自分たちはいわば〝神殺しの獣けもの〟であるらしい。獣であるがゆえに闇など苦にせず、夜であっても自由闊かつ達たつに戦うことができる。

　天に太陽がなければ、星々と月のわずかな光を頼ればいい。

　それさえもなければ、音と気配と空気の動きを読み取ればいい。剣と剣を打ち合わせたときの火花を照明代わりにすればいい。

　どんな戦場でも、戦い方なんてものはどうとでもやりくりできる。

　それができるからこそ、神殺しの戦士なのだ。

「みんな、ろくでなしばかりだけどな……」

　羽田空港にはＡ□Ｂ□Ｃ□Ｄと滑走路が四つある。

　そのうちで最も北に位置するのがここＢ滑走路。護堂が北側に来たのは、前にどこかで聞いたうんちくを思い出したからだ。

　古来、中国では天てん帝ていを北極星に喩たとえるという――。

　となれば、羅翠蓮がいそうな方位はおそらく。当てずっぽうは正解だった。

「やっぱりか」

　護堂の進む先に、絶世の佳か人じんがたたずんでいた。

　姓は羅、名は翠蓮、字あざなは濠ごう。滑走路に埋めこまれた誘導灯の光よりも、天からこぼれる月の輝きこそが彼女にはふさわしい。

　趣おもむきのある漢かん服ぷくをまとい、地上に降りた仙せん女によのごとき優ゆう婉えんさである。

「来ましたね、護堂」

　羅翠蓮が浮かべる微笑に甘さはなく、闘士の凛り々りしさのみが宿る。

　そして、ここに現れたカンピオーネは自分たちだけではない。護堂とはべつの方角より、黒髪長身の白人青年が歩いてくる。

丁てい寧ねいな仕立ての黒いジャケットに白シャツ、上品な柄がらのネクタイを合わせていた。

「なつかしい顔ばかりのくせに、たいしてうれしくないものだな」

アレクサンドル・ガスコイン。黒王子アレクその人だった。

しかし、彼の憎まれ口に能天気かつ軽薄そうな青年の声が異を唱える。

「そうかい？　僕なんかはクリスマスと万ばん聖せい節せつ、おまけに聖カタリナの日がいっしょに来たような気分だけどねえ」

のんきそうな足取りで、四人目がやってきた。

サルバトーレ・ドニ。灰色のマウンテンパーカにえんじ色の長なが袖そでＴシャツ、カーキ色のカーゴパンツとだいぶラフな格好だった。

「つまり、すばらしくめでたいってことだけど」

「おめでたいのは、貴様の頭のなかだけにとどめておくといい」

「はははは。君のそういう口の悪さ、ひさしぶりですごくうれしいよ。また前みたいにいろいろと、僕の遊びにつきあってよ」

軽やかな誘い文句にも、アレクはちっと舌打ちするだけだった。

サルバトーレ・ドニのたわごとに、まともな返答はすまいということだろう。

気持ちはわかる。思わずうなずいた護堂へ、ドニがウインクしてきた。こちらもこちらで、さすがの調子のよさだった。

そうこうするうちに、もうひとり増えた。

「まあ！」

今度は愛らしい、若い女性の声だった。

「こんなことって初めてです。神殺しの力を持つわたくしたちが——こうして同じ国の同じ場所に集まるだなんて！　草くさ薙なぎさんにドニさんにアレクさん……あっ、お姉さまとはたしか一世紀

ぶりくらいじゃ――!?」

　言わずと知れた、アイーシャ夫人であった。

　ただし、なぜか＆まさかのエプロンドレス姿である。秋あき葉は原ばらのメイド喫茶から抜け出してきたような格好に、護堂は目を疑った。

　一方、夫人から熱烈な視線を送られる女じょ傑けつはすっと目をそらしている。

「……あなたに何度申し上げたか、もはや覚えておりませんが」

　羅翠蓮の声は麗うるわしくも冷酷だった。

「わたくしはあなたの姉ではありません。そこのところをはきちがえないように」

「またまたぁ。お姉さまもお兄さまもそんなことばかりをおっしゃって、いつもわたくしを困らせて……。でも大丈夫。アイーシャは承知しております♪」

　おっとりと微笑みながら、インド生まれの神殺しは言う。

　それはあたたかなストーブの前に放置したバターさながらで、とにかく柔にゅう弱じやくすぎるアイーシャの受け答えだった。

「おふたりの冷たいお言葉のなかにはバッチリたっぷり愛情が隠されていると。どじでそそっかしいアイーシャをいつもあたたかく見守ってくださるおふたりのこと、わたくしはいつでも心の兄、心の姉としてお慕したい申し上げているんですよ！」

「勝手に勘かんちがいするのはかまわんが」

　なつかしい老カンピオーネの声がぴしゃりと告げた。

「君たち女性陣のなれ合いに、私を巻きこまないで欲しいものだな」

「狼おおかみ王おう。あなたの方こそひかえるべきでしょう。勝手な決めつけで、わたくしの威厳をおとしめるのは」

　羅翠蓮の反発に、六人目の参加者はくくっと失笑を押し殺す。

「失敬。おたがい苦労の多い身の上ということかね」

　闇のなかより、ついにデヤンスタール・ヴォバンが現れたのだ。

　侯こう爵しやくの称号にふさわしいクラシカルな背広と漆しつ黒こくのコートのみならず、圧倒的な威圧感をもその身にまとっていた。

　ある意味で、最も典型的な〝魔王〟カンピオーネの来らい臨りんであった。

「さて——我が希少なる同どう朋ぼう諸君」

　朗々とヴォバンは言う。

「この機会をよろこぶよろこばないという話があったようだが。いちばんの老いぼれである私としては、寿命が尽きる前に君たち全員と再会できたことは——まことによろこばしい。実にすがすがしい気分だよ」

　老いて尚、この怪人物は闘争心のかたまりである。

　鋭く羅濠を見つめ、アイーシャを無視し、アレクとドニと最後に草薙護堂を傲ごう然ぜんと見据えてから、満足そうにエメラルドの邪じや眼がんを輝かせた。

　このようにして、六人もの神殺しがいよいよ集結した直後。

かつん。

特徴的な足音が響く。

かつん。かつん。かつん。かつん。かつん。かつん。

鉄てつ鋲びようを打った革ブーツの足音だ。前にも聞いた。あの男が遅れて登場するとき、この音が必ず鳴りひびくのだという。

「招待状を持たない身で恐縮ではあるが」

黒き仮面をかぶり、黒のケープを闇夜になびかせる。

その姿こそが英雄の象徴。生ける伝説ジョン・プルートー・スミスの到着だった。

「舞台の開幕にはぎりぎり間に合った……で、かまわないかな？　私のすわるべき席はまだ空あいているようだ」

「一応な。遅刻である事実は変わらないが」

アレクが皮肉っぽく、仮面の神殺しへ告げる。

気やすい感じではあるが、やや棘とげがある。旧知ではあっても決して美しい友情で結ばれてはいないのだろう。まあ。

純然たる交友関係が成立するカンピオーネ同士など、一組もいないはずだが。

護堂はひそかに肩をすくめた。

最も良好な間あいだ柄がらであろう自分と羅翠蓮でさえ、この内戦で手を取り合うか否いなかは——かなりあやしいのだ。

試しに、義姉あねに目配せしてみた。

麗うるわしき魔教教主は潑はつ剌らつと輝く瞳で見つめかえしてくれた。

これはたぶん『共にこの内戦を切り抜けましょうね』ではなく、『おまえもひとりの神殺しとして、姉を超えてみせるのです！』と解釈すべき視線のような……。

非常識きわまりないが、それが羅翠蓮という人物なのだ。

「さて」

当の義姉がほか六名へ、いよいよ訴えかける。

「わたくし羅濠の呼びかけに応え、お集まりいただけたことに深く感謝いたします。文ふみをとどけられなかった御方にも、こうしてお越しいただけました」

「たまたま会合のことを知る機会があったものでね」

羅濠教主の言葉に、スミスは軽くうなずいた。

まだ、カンピオーネ七人の間には殺気も緊張感もない。これはいわゆるセレモニーなのだと全員が承知しているからだ。

だからこそ、義姉はにこやかにスピーチを続ける。

「みなさまに『最後の王』ラーマチャンドラと、恐るべき盟めい約やくの大だい法ほうについて……ご説明する必要はなしということでかまいませぬか？」

誰も口をはさまない。沈黙が肯こう定ていであった。

「かの大英雄に対抗するため、われら七人が採とるべき策も……あらためて語り合う必要はございますまい」

　やはり沈黙。またしても肯定的沈黙だった。

蓮

　同じ穴の住人同士の度しがたさを前に、羅翠は涼やかに微笑する。

「であれば、いつはじめることにいたしましょう？」

「今すぐ――というのは、少々せわしないな」

　羅濠教主とならぶ最古参のひとり、ヴォバン侯爵が意見する。

「諸君、せっかくの機会だ。たった一度きりのゲームになるだろう。各おの々おのしっかり堪たん能のうすべきだとは思わないか。今夜……零時となった時点で開始というのはどうかね？」

「わたくしに異論はございません」

「もちろん僕もだよ。その時間になるまでは自由行動にして、ばらばらに散らばるってことでいいんじゃないかな」

　うなずく古参組の輪に、サルバトーレ・ドニも加わる。

　特に好戦的な三魔王の間で、早くも合意が成立した。するとアレクサンドル・ガスコインはあきれたようにかぶりを振った。

「もっとスマートな解決法はいくらでもあるはずだが、七人中三人がこのありさまでは検討しても仕方ないな。俺としては『最後の王』と対決するのが誰でもかまわない。ただ、降りかかる火の粉があるなら、しっかり払わせてもらおう」

　俺はおまえたちとはちがうとアピールしつつも、戦意を隠そうともしない。

　はあと護堂はため息をついて、いよいよ口を開いた。

「言いたいことはいろいろあるけど、たしかに言っても無駄かも

な。まあ、俺としてはラーマのやつと勝負する権利――俺にまかせてほしいと思っているよ。俺の希望をみんなが認めてくれるとうれしい」

「お、護堂にしては好戦的じゃないか」

　にやっとドニが笑いかけてきた。

「ちなみに認めなかったら――どうなるんだい？」

「ふん」

　にべもなく突き放して、護堂はそっぽを向いた。

　なにしろ、この面メンツ子が集結してしまったのである。戦う以外の選択肢など、どのみち天地がひっくりかえってもありえないはずだ。

　そして、ジョン・プルートー・スミスが低く笑いはじめる。

「ふ、ふふふふ。全て事前に想像していたとおりだ」

　気の利いたジョークを聞いたあとよろしく、彼は仮面を震わせている。

「やはりこうなる以外、われらに道はないというわけか。私もせいぜい自衛につとめさせていただくとしよう」

「ま――待ってください！」

　必死の面おも持もちで、アイーシャ夫人が訴えにかかった。

「みなさん！　わたくしたちが仲間同士で戦うなんて、絶対にまちがっていますっ。みなさんに足りないのは『愛』です！　みんなで愛を取りもどし――え、ええっ!?」

　羅濠教主とヴォバン侯爵。

　夫人が涙ながらに呼びかけた瞬間、魔王ふたりが動き出した。

　無言でアイーシャ夫人に背を向けて、べつべつの方向へと歩き出し、さっさと立ち去っていったのである。

「お兄さま、お姉さま！」

　引き止めも無駄だった。夫人は愕がく然ぜんとして、立ち尽くしてしまう。

　それを尻しり目めに、残った魔王たちはそれぞれの言葉で方針を明らかにしていく。

「あまり言いたくないが仕方ないな。近いうちに東京のどこかで会おう」

「はははは。明日の朝日を見る前に再会しちゃうかも、だけどねえ」

「というより、今夜が東京壊滅の厄日ドウームズデイとならなければよいのだが……」

　黒王子アレクも去っていく。

　ドニは飄ひよう々ひようかつ弾はずむような足取りでそれに続き、ジョン・プルートー・スミスも肩をすくめてつぶやくだけで、異論は唱えない。

「そんな……」

　アイーシャ夫人はしばらく呆ぼう然ぜんとしていたのだが。

　結局、そのまま憔しよう悴すいした面持ちでふらふら歩きはじめた。行く当てもないはずなのに、あらぬ方角をめざして立ち去っていく……。

　かくして、残ったのは草薙護堂ただひとりとなった。

4

「どうだ？　いたか？」

「駄目ね。完全に見失ってしまったわ」

リリアナ・クラニチャールとエリカ・ブランデッリ。両名は確認し合ってから、そろって表情を曇らせた。

「わたしとしたことが大失態だわ。ほかの誰でもなく、アイーシャ夫人の御姿を見失うというのは……結構ショックが大きいものね」

「この間、イタリアのトスカーナでもやられたばかりだしな」

エリカはため息をつき、リリアナは軽くいらだっていた。

羽はね田だ空港の新国際線ターミナルビル。飛行機への搭乗のみならず、一〇〇店以上の飲食店や売店がひしめいている。

商業施設としても有名なエリアを、騎士たちは見回っていたのだ。

カンピオーネのひとり、アイーシャ夫人がどこに行ったのかを突きとめるために。

「尾行をまく手て管くだに通じておられるとは、とても見えないんだが」

「前回はイタリア魔術結社の精鋭たち、今回は日本の正せい史し編へん纂さん委員会が監視網を張っていたのに……。本当に、どうやって抜け出されているのかしら？」

「まさか魅み了りょうや幸運の力を使って……？」

羽田を発着ないし経けい由ゆする航空便は全て欠航となっている。

だが、空港施設を閉へい鎖さざせたわけではない。ターミナルビルにはかなりの客がいる。いつもの夜より、かえって多いくらいだった。

「ねえねえ。エリカさんもリリアナさんも——」

駆けよってきたのは、清せい秋しゅう院いん恵え那なだった。

神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを紐ひも付きの布袋に収めて、肩にかけている。

「気づいてる？　空港のなかにちょっと変な感じの人たちが交じっているよね？　委員会じゃない系の——」

「カンピオーネの方々が全員集合したわけだからな」

　リリアナは肩をすくめた。

「それぞれの配下や信しん奉ぽう者しや、支援者もつきしたがってくるだろう」

「直接の関係はなくても、魔王内戦がどう推すい移いしていくかを間近で見守りたい魔術師たちもいるでしょうしね」

　エリカも捕捉すると、恵那は感じ入ってうなずいた。

「そっか……」

「でも、そういう周辺環境に関しては、やっぱり東京をホームにしている護ご堂どうがいちばん有利なわけだから。神経質にならなくてもいいと思うわ」

「カンピオーネ同士の対決に介入できる術者もすくないだろうしな」

「警戒すべき実力者としては——まず香ホン港コンの陸りく鷹よう化かが一番手ね。他にはアイスマンのおじさまが来日されているという情報がいやだけど。わたしの叔父おじパオロ・ブランデッリにも対抗できる数少ない騎士のひとりよ」

「わたしやエリカが束になっても、あるいは……な」

「恵那さんが加勢してくれれば、さすがに負けはしないでしょうけど」

「エリカさんの——あのかっこいいおじさんと同じくらいの達人までいるのかあ」

　紅あかと青の騎士たちに口々に言われて、恵那は眉み間けんにしわをよせた。

「それに……たしかに日本が戦場である以上、あらゆる意味で王様をいちばん有利にしなくちゃいけないもんね。それが恵那たちや甘

あま粕かすさんの仕事なわけだし、できなかったら本当に恥ずかしいっていうか……」

　思し案あんをめぐらせているのだ。いつも明朗快活、感性と本能にまかせて突き進むのが信条の自然児が。その奔ほん放ぽうさと神がかりの力こそが、太刀たちの媛ひめ巫女みこをオンリーワンの存在として際きわ立だたせている理由なのだが。

　その彼女が熟じゆく慮りよの末に、いきなり言い出した。

「ふたりとも聞いて。ちょっとの間、恵那は王様のそばを離れようと思うんだ」

「なんだって!?」

「どういうつもりなの、恵那さん？」

「どこへ行くつもりなんだ、清秋院？」

「あっ、王様！」

　羽田空港のターミナルビル内に護堂はもどってきていた。

　うしろから恵那を呼びとめたのは、世界各国の航空会社がカウンターを連ねるあたりであった。ふつうはこのどこかで搭乗手続きを済ませる。

　しかし、今夜は飛行機に乗るわけではない。

　清秋院恵那がどこかに行くと聞いて、あわてて探しに来たのだ。

「おまえが変なこと言って、そのままどこかに消えたってエリカたちから聞いたぞ。携帯に電話してもつながらないし」

「ごめん、またバッテリーが切れてるんだよ」

　あっけらかんと恵那が言う。

　めったに国外へ出ない太刀の媛巫女が羽田には不案内なため、古典的に『空港を走りまわって知り合いを探す』で捕まえることができた。

彼女を発見できた幸運に感謝しつつ、護堂は言う。

「で、何を考えてるんだよ、一体？」

「今度の魔王内戦、たしかにカンピオーネ同士で戦うわけだけど。それでも王様——草くさ薙なぎ護堂のお膝ひざもとが会場なんだからさ。日本人の王様をできるかぎり有利にしてあげるのが、恵那たちの役目だと思うんだよね」

「そんなこと、気にしなくてもいいんだけどなあ」

「でも、イギリスの王様とか、すごい配下の人を連れてきたっていうし。それに陸家の鷹化くんたちだって」

「それはそうなんだけど」

申し訳なくなり、護堂は頭をかいた。

「結局、ろくでもないカンピオーネの連中が内うち輪わ揉もめしてるだけだとも言えるしなあ。まともな人たちにあまり迷惑をかけたくないぞ。それにさ。俺たち同士のケンカがはじまったら、下手へたに加勢できないだろ？」

良くも悪くもカンピオーネの力は絶大である。

神殺しの魔王同士で争っている場になんらかの形で介入する場合、死すべき人間たちには細心の注意が求められるだろう。力のステージがちがいすぎる。

まあ、エリカはじめ護堂を助けてくれる女子たち——。

彼女たちなら今までもそうだったように、今回もかなり上手うまくやってくれるはずだとは思うのだが。しかし、恵那は訴える。

「そこだよ王様」

「どういうことだ？」

「恵那みたいなのはいつでも王様の背中を守るために、準備していないとダメだと思うんだよね。ほかのカンピオーネに襲われたときでも、恵那が体を張って、五分か一〇分くらいは王様を守れるように」

「…………」

「天あまの叢むら雲くもがいっしょなら、今のままでもできなくはないけど——この内戦では、カンピオーネが六人も敵に回るわけだから……。草薙護堂がいちばんのピンチを迎えるときにそなえて、こっちも最高の用意を済ませておきたいんだ！」

「だから、すこし東京を離れるのか？」

「うん。できるだけ早く必要なものを取ってくるよ。清秋院恵那のとっておき」

　太刀の媛巫女はおごそかに宣言した。

　神がかりという特異な霊力を使いこなし、神刀・天あまの叢むら雲くもの劒つるぎを草薙護堂と共有する。ゆえに仲間内では、恵那こそが最も高い戦闘力をそなえている。

　だからかもしれない。

　護堂を守るために、誰よりも強く在あろうと彼女は自分を追いこんでいるのだ。

　十分な実力者であるエリカやリリアナであっても、どこかで力がおよばないときがくるだろうと危き惧ぐして。

　だったら、彼女たちにそんな危険を強しいる元凶として。

　恵那をひきとめるわけにはいかない。護堂は「わかった」と答えて、うれしそうな太刀の媛巫女にうなずきかけた。その直後だった。

　——おおおおっ!?

　すこし離れたところで、どよめきが起こった。

　フライト情報を表示するモニターの前で、外国人旅行者とおぼしき一団が歓声をあげたりガッツポーズを取ったりしているのだ。

「な、何があったんだろ!?」

「あれだよ清秋院。飛行機のフライトが再開するんだ。俺たちのせ

いで全便が欠航になっていたけど、一時間後くらいから振りかえの便が出はじめるみたいだな」

　事情を察して、護堂は言った。

　フライト情報のモニターには、新たな便の出発時間や行き先、航空会社、便名などがいくつも表示されていた。

「ここにいる人たちはみんな外にも出ないで、空港のなかの店とか待合室でひたすらフライトの再開を待っていたんだろうな。俺たちのせいで、いきなり羽田に足止めされることになったから……」

「あっ。それで今日の空港、妙に混んでいたんだ！」

「今頃、こういうシーンが世界中のあちこちで見られるわけか」

　海外旅行で航空便を利用する者などは、ほとんど事前に便を予約している。

　いきなりフライトが延期になったからといって、臨機応変に旅行のプランを変えるのにも限界がある。そうなると当然、空港で時間をつぶすしかないわけで。

　フライト再開が明日以降になっていたら、ロビーや通路に雑魚ざこ寝ねして〝夜営〟する旅人たちもたくさんいたはずである。

「俺ひとりでやったことじゃないとはいえ、本当に申し訳ないな……」

「すごいよねえ。さすが王様たちが全員集合したあとって感じ。むしろ、これくらいで済んでよかったんじゃない？」

「それ、殺人にくらべたら盗難は軽犯罪ってのと同じ理屈だぞ……」

　ともあれ、目の前の旅行者たちはまだ歓声をあげている。

　おおおおおおおおっ！

　この一団はみんな欧米人だったので、拳こぶしを突きあげたり、飛び跳ねたりと派手なアクション付きだった。このあたりが感情表現の小さな日本人とはちがう。

　また、彼らのなかにカップルらしき男女がいた。

　女性の方は手ぶらだが、男の方はキャスター付きの旅行ケースを持っていた。旅立つ恋人を日本在住の彼女が見送りに来たのだろうか。

　フライトの再開が恋人たちに別れを思い出させたのか。

　カップルはいきなり悲痛な面おも持もちになり、がしっと抱き合った。

　おまけに抱ほう擁ようを交わしながら頬ほおと頬とを寄せて、小声で愛と別れの言葉をささやき合ったあげく、熱いキスまではじめる始末で——

「ああっ、王様あれ!?」

「せ、清秋院、声が大きいぞ」

　目をそらす護堂に対して、恵那はカップルを凝ぎよう視ししていた。

　のぞき趣味や野次馬根性ではなく、単にびっくりしたせいだろう。天てん衣い無む縫ほうの自然児ながら、清秋院恵那は恋愛関係には免めん疫えきがないのだ。

　まだキスを続けるカップルたち。当分、終わらせるつもりはなさそうだ。

　それを呆ぼう然ぜんと眺めつつ、恵那が小声で訊たずねてきた。

「あ、あれ、別れのキッスってやつだよね？」

「そ、そういうことになるのかもな」

「やっぱり外国の人たちは進んでるよね……。あ、恵那たちもそういえば、王様とは結構しちゃってるのか……」

「た、たしかにそうだけど、人前で言うことじゃないぞっ」

「……思い出しちゃった。前にもお別れのとき、王様と恵那は——したもんね……」

　あれは恵那にどうしてもと頼まれたから、ではなかっただろうか？

　たしかイギリスへ旅立つ直前に。当時の記憶を引っぱり出しつつも、護堂はその辺を口にするのはやめておいた。

　恵那から頼まれたことが発端でも、応じたのは自分の意思なのだ。

　一方、奔放な自然児にして大和やまと撫なでし子こという両極端な二面性を持つ少女はいきなりハッとして、訊ききにくそうに言う。

「も、もしかしてエリカさんやリリアナさんとは、ああして人前でし——しちゃったりもするの？　ふたりともあっちの生まれだし、あいさつ程度のノリでお別れのキッスくらいしちゃいそうだし……」

「バ——バカ。するわけないだろ！」

　即座に否定した護堂だったが。

　訊かれた瞬間、『してないはずだよな？』と自問したのは秘密だ。

　なにしろ、こうした行為をどこでどれくらい重ねてきたか——回数と頻ひん度どが増えすぎて、あまり迅じん速そく・正確には回答できないのである。

「そうなんだ……」

　護堂の言葉を噛みしめるようにうつむいてから、恵那はおずおずと言う。

「じゃあさ。今ここで恵那と王様がしちゃったら……ちょっとずるいけど、エリカさんたちより進んでることになるのかな？」

「せ、清秋院？」

「ときどき不安になるんだよね。恵那はしょっちゅう王様のおそばから離れて、山とかに籠もったりしてるから。その間にほかのみんなが王様と……どんどん先に進んでいくんじゃないかな、みたい

に」

「…………」

「街にいつづけると恵那の体のなかが濁にごっていくから、仕方のないことなんだけどね」

「なら清秋院——ほ、本当にしてみるか？」

「ええっ!?」

　場の雰囲気と恵那のけなげさに押されて、訊たずねてみたら。

　恵那がびっくりして、例の外国人カップルを横目でチラ見する。彼らはキスこそやめたものの、熱い抱擁は当分まだまだ続けそうであった。

　いっそすがすがしいほど仲なか睦むつまじい。うらやましくさえある。

　だが、やはり。

　ラテンの情熱を持って生まれたエリカあたりとちがい、こういうところでひっこみ思じ案あんな清秋院恵那はもじもじとうつむき、護堂から視線をそらしてしまう。

　その瞬間、護堂のなかで箍たががはずれた。

「清秋院、こっちだ」

「王様!?」

　媛巫女の手を引っぱって、通路の奥に入っていく。

　角の突き当たりには運よく飲み物の自動販売機があった。その物陰に恵那を連れこんで、ぐいっと抱きよせて——

　すばやく彼女のやわらかな唇をふさいだ。

「あ……っ」

「しばらくお別れだからな」

「うん……」

　物陰に隠れながらのキス。それでも恵那は全体重をあずけるようにして、護堂とすこしでも密着しようと必死になっている。

　いつものように舌も絡め合って、おたがいの感触を精一杯たしかめ合う。

　キスしている時間がさっきの外国人カップルよりも長くなっていた。激しさもこちらが上だろう。しかし。

「あ——ち、ちょっと待って、王様」

　護堂に抱かれながらも、あわてて恵那が唇をずらした。

「どうしたんだ？」

「あ、あのね。忘れていたの。今は祐ゆ理りがこっちにいないんだから、その間は王様とこういうことをするの……控えなきゃダメかなって」

「万ま里り谷やか」

「うん。祐理がいない間にこうしてたら、あの子が悲しむだろうなって」



「…………」

　万里谷祐理やプリンセス・アリスはきわめてすぐれた巫女である。

　それはふたりが魔女たちの神しん祖そにつらなる血けつ脈みやくであり、さらに先祖返りと言えるほど霊的資質が傑けつ出しゆつしているからだという。

　だが、神祖とはいわば、軍神ラーマに仕つかえるため誕生する疑ぎ似じ女神。

　その血が過か剰じようなほどに濃いからだろう。祐理やアリスはラーマ復活にともない、いちじるしく体調を崩すようになっていた。

　祐理が幽かくり世よに残ったのは、その体調悪化を防ぐためでもあった。

　肉体よりも精神が重きをなす領域であれば、肉体への悪影響も小さくなるからと。

　だが、それはもちろん家族や友人たち、草薙護堂などとも離ればなれになるという選択であった。

　清秋院恵那と万里谷祐理は仲のよい幼なじみ同士。

　そんな友人を気き遣づかって、恵那はこういう行為をひかえるつもりだったのだろう。そんな媛巫女の唇を、ふたたび護堂はキスでふさいだ。あえて強引に。

「ん――!?」

「そういうことは全部、俺が考えればいい。清秋院が気にする必要はない」

「で、でも、祐理に悪いし」

「みんなから恨うらまれる役は全部、俺が引き受ける。それに清秋院だって」

「？」

「俺のこと、すこしは憎らしく思ってたりもするんだろう？」

「……ないしょ」

　恵那は照れくさそうにもじもじしながら、護堂の唇に軽く歯を立てるようにして、ちょっとだけ乱暴にキスしなおしてくれた。

　ともかく、ひとしきり接せつ吻ぷんと抱擁を繰りかえしたあと。

　ふたりは別れ別れになって、それぞれべつの方向に歩きはじめた。去り際ぎわ、清秋院恵那はこんなことを言った。

「じゃあね王様。本当に危険なのは王様の方なんだから、気をつけなくちゃダメだよ。それとさっきの『全部俺が――』ってやつ、ふたりだけの秘密にしておこうね」

「せ、清秋院」

　幸せそうな恵那の笑顔を前にして、逆に護堂は肝きもを冷やした。

「気分が盛りあがりすぎたときの話を蒸しかえすなよ。恥ずかしくなるだろ」

「ふふふふ。あれ聞いて、なんだかすごくうれしくなっちゃった。絶対、誰よりも王様を助けられるようになって、できるだけ早く帰ってくるからね。それでも一日か二日かかると思うけど……その間、絶対に死んだらダメだよ！」

　清秋院恵那は去っていった。

　明朗快活ながら、武将一族の末まつ裔えいらしい言葉をしっかりと残して。

第３章　零時到来

1

　恐れていたとおりになってしまった。

「まさか、わたくしたち神殺し同士で殺し合う日が来てしまうなんて……！」

　アイーシャの胸は心配で押しつぶされそうになっていた。

　ある意味、自分たちはこの世に七人きりしかいない兄弟姉妹のようなもの。だというのに骨こつ肉にく相あい食はむ同士討ちの日々がはじまろうとしている。

「これを阻そ止しするために、お兄さまといっしょに日本へ来たというのに！」

　激しいショックのおかげで、来日した目的をすっかり思い出していた。

　おサイフを落とすという不幸さえなければ、アイーシャは東京入りしたカンピオーネたちを訪ねてまわって、友愛の心を次々と呼び起こすことができたはずなのだ。たぶん。

　だが、運命はいつも意地悪だ。

　おまけに無む慈じ悲ひかつ理り不ふ尽じんですらある。

　今回もアイーシャは運命のいたずらによってむなしくもてあそばれ、魔王内戦を未然に阻止するという大望を果たすことができな

かった……。

「かくなるうえは、わたくしも」

　悲しい運命に立ち向かうため、例の言こと霊だまをアイーシャは唱えた。

「……善ぜん果かいまだ熟せざる間は善人さえも悪に遭あう。善果の熟する時に至れば善に遭う。善人には善果あるべし、悪人には悪あつ果かあるべし……」

　幸運の加か護ごを呼びこむ権けん能のう。その発動のキーワード。

　運命という最強の理不尽に対抗するには、これくらいのズルが必要なのである。

「この内戦を終結に導くまでの間、わたくしをどうかお守りください……」

　心からの祈りを口にしながら、空港をさまよった。

　実はアイーシャ、日本滞在も初めてではない。

　あのとき、東京はたしか全ぜん共きよう闘とうなる学生運動の真っ最中だったような——。

　いずれにせよ、前に来たときとは羽はね田だ空港の様子がかなり異なっていた。いつのまにか大規模なリニューアルを行っていたらしい。

　不案内な空港内で、何度も迷う羽目になったのだが。

　それでもバス乗り場にたどり着き、お目当ての駅までようやく到着できた。

（ときどき、うしろから誰かに見られている気もしたが、おそらく勘かんちがいだろう。褐かつ色しよくの肌を持つアイーシャは、日本では目立つらしいのだ）

　そして、バスを降りるなり。

「あら、Sinjuku Station……？」

　一瞬だけアイーシャは首をかしげ、すぐにハッとした。

「なんてことでしょう⁉　バスをまちがってしまったようです！」

　秋あき葉は原ばらにしては、夜なのにずいぶんと駅前の人出が多い。

　そう思ってから駅舎（これも秋葉原駅より、ずいぶんと大きい）に書いてある駅名『新しん宿じゆく駅』に気づいたのである。

　ここは新宿駅南口に併へい設せつされたバスターミナルだった。

　早く秋葉原の勤め先に帰らなくては――。

　切符売り場に走ろうとして、アイーシャは考えをあらためた。

「もうすぐ……内戦のはじまりですものね……」

　無防備な寝ね床どこで夜襲を受けるのは危険きわまりない、とまでは考えない。

　考えないが、そういう可能性がちらりと一瞬の火花よろしく頭の隅にちらついて、アイーシャはつぶやいた。

「こうなったら、ちょっと夜遊びしちゃいましょう！」

　夜の新宿をぶらぶらすべく、駅舎にくるりと背を向ける。

　気ままに足をのばした先は新宿駅東口周辺の繁華街。いわゆる『新宿歌か舞ぶ伎き町ちよう』、なかでも飲み屋街として有名な『一番街』であった。

「いらっしゃい、お姉さん！　素敵な格好ね！」

「まあ、あなたの方こそ」

　いきなりアイーシャを呼びとめたのは、ナース服姿の看護師さんだった。

ただし、ここは病院ではなく歌舞伎町一番街。ごちゃごちゃと飲食店やカラオケ店、ちょっといかがわしい業態のお店や大人の世界をかいま見られる類たぐいのお店がひしめく界かい隈わい、そのまっただなかであった。

ちなみにナースさんは長身の美女で、明るめの茶髪と厚化粧が印象的だ。

「ちょっとうちのお店に寄ってきなさいよ。コスプレのお客さんには一杯サービスのキャンペーンやってるのよ～」

「コ、コスプレ？」

言われて、ようやく認識した。

アイーシャはメイド喫茶の制服を着たままだった。羅ら濠ごうお姉さまからの招待状に気づいたあと、着替えもせずにあわてて店を飛び出したせいだ。

かくして、強引に誘われるまま雑居ビル三階の小さな飲み屋へ。

店名は『コスプレ居酒屋ばったもん』。そこはバニーガールや婦人警官、着物の花魁おいらんが接客し、客としてセーラー服美少女戦士や魔法少女、M78星雲から来た光の巨人、全身タイツの蜘く蛛も人間系アメコミヒーローなどが陽気に騒いでいた。

「ささささ、どうぞ一杯」

「い、いけませんっ。わたくし、ご覧のとおり花も恥じらう一七歳の乙女！　日本の法律では飲酒を禁止されている年齢なのです！」

ナースさんに連れていかれたのはカウンター席。

目の前にビールの中ちゆう瓶びんとグラスを出されて、アイーシャは固こ辞じした。しかし。

「ふふふふ。お客さん、あなた今ウソついたでしょ」

「ふぁっ!?」

「一目見てピンときたわ。本当のことを隠して生きてる顔だって。でも安心して。アタシもいっしょだから。このお店はね、そういう

クズみたいな連中が集まって、ひとときの癒いやしを得るところなのよ」

「な、何をおっしゃっているのか、さっぱりわかりません！」

　すっとぼけた直後、アイーシャは気づいた。

　このナースさん、身長一八〇センチ近いうえに喉のど仏ぼとけがやけに張っていて、おまけに肩幅も広いような……。よく聞けば声もハスキーで……。ということは。

「ささ。遠慮しないでグイッとやって。グイッと」

「は、はい」

　思わず圧倒されて、ナースさんのお酌しやくを受けてしまった。

　喉も渇かわいていたので、ビールの注がれたグラスを飲み干してしまう。一気だった。なんだかんだでアルコールはいけるクチなのだ。

　ひさしぶりの一杯に、アイーシャは『ほぅっ』と深く息を吐き出した。

「あらあら。ちょっといい気分になってきました」

「そうでしょそうでしょ。もう一杯どうぞ。これは店じゃなくてアタシのおごり」

「そんな悪いですよ。おっとっと、あふれちゃいます」

「いいのいいの。なんだかお姉さんには親切にしなくちゃいけない気がするわ。田舎いなかのお姉ちゃんを思い出しちゃう」

　なみなみと限界まで注がれたビールをこぼしてはいけない。

　あわてて二杯目を呑のむ。口を付ける程度ではなく、一気にグラスを空あける。このときにはもう、アイーシャのなかでスイッチが入っていた。

「三杯目はそっと差し出すのが日本のマナーなんですよね……」

　たおやかな手つきで、音もなくグラスをカウンターに置く。

　結局、ここではビール中瓶二本と青リンゴサワー一杯を飲み干した。退店時、呑みながら仲よくなった狼おおかみコスプレのおじさんから、赤いずきんを頂ちよう戴だいする。

　赤ずきん＋メイド服というハイブリッドな格好になったアイーシャ夫人。

　ほろ酔い気分で歌舞伎町をうろついていると、すでにいい感じで酔っ払っていたおじさん三人組とすれちがう。

　カラオケに誘われたので、とりあえず同行。

　アイーシャは数少ない日本歌謡のレパートリーから『スキヤキソング』と『川の流れのように』を熱唱する間に、梅酒ソーダ割りを二杯いただいた。

　途中、カラオケ店内の廊下で三〇代女子のふたり組と出会い、意気投合。

　近くの海鮮居酒屋に場所を移して、緊急女子会をスタートさせた。

　刺身盛り合わせとエビアボカドのサラダ、えびせんをつまみながら、日本酒・八はつ海かい山さんの徳とつく利りを二本、ひとりで空けてしまう……。

　出会う人全てを魅み了りようしてやまない〝魔ま性しようの女〟アイーシャ夫人。

　そんな彼女がうっかり繁華街に繰り出せば、行く先々で「いっしょに呑もう」と初対面の人々から誘われて、『朝まではしご酒』がはじまるのはもはや必然であった。

　この夜もアイーシャは順調に酒しゆ杯はいを重ねていった。

　女子会のあとは三十余人が集まる某ぼう建築会社の飲み会に飛び入りで参戦。

　二次会会場の寿司屋で焼しよう酎ちゆうお湯割りをいただいているさなかに――時計の針はまもなく零時零分を指そうとしていたの

だが。

　程よく酔ったアイーシャは、そのことにまったく気づいていなかった。

「もうすぐ零時か……」

　腕時計を見て、アンドレア・リベラはつぶやいた。

「まだここで時間をつぶしていくつもりなのか、サルバトーレ・ドニ？」

「今のところはねー」

　東京都江こう東とう区、新しん木き場ば。

　深夜、たくさんの倉庫が立ちならぶ海辺を男ふたりで歩いている。

　片割れであるサルバトーレ・ドニはにやっと笑って、夜空を見あげた。雲がすくないので冬の星座がよく見える。

　月も明るい。闇やみ討うちには不向きな夜だった。

　ああいう襲撃は暗いほどやりやすい。しかし、自分たちカンピオーネにふさわしい戦い方ではないから、どうでもいい要素ではあった。神をも打ち倒す権能の数々を振るう以上、どうしたって派手派手しくなる。

「とりあえず、僕の方から誰かを襲いにいく予定はまだないし」

「意外だな。おまえのことだから、嬉き々きとして仕掛けていくのかと思ったぞ」

「一対一なら、もちろんそうしたけど。今回、先は長いからねえ。さっき考えたゲームプランどおりに事を進めていくつもりなんだ」

「なに？」

　フッとほくそ笑むドニに対して、リベラが眉まゆをひそめた。

「バカげたことを言うな。おまえに計画を立てる構想力があるはずないだろう」

「おいおい。僕をなんだと思ってるんだ」

「じゃあ、試しにプランとやらを説明してみろ」

「いいとも。とりあえず最初はちょろちょろと省エネでやるのさ。誰かにからまれてもパッパとやりすごして。で、いい感じに煮詰まってきたらドッカンドッカン。最後は一気にまくり上げていく。ばしばしバシンとね」

「語るに落ちたな。そんなものを計画とは言わん」

「うるさいな。まあ、とにかく」

　確信を込めて、ドニはうそぶいた。

「僕よりもまじめな連中がいちばん面倒そうなところを狙ねらって、動き出してると思うよ。僕のことを彼らが思い出すのは……もうすこし先じゃないかな？」

「そこは同感だ。そして、おまえは」

　なんだかんだでサルバトーレ・ドニとつきあいの長い〝親友〟は、カンピオーネ七人のなかにおける『剣の王』の立ち位置をよくわかっていた。

　ドニ以上の確信を込めて、ぼそりと言う。

「魔王内戦で最も熾し烈れつとなるであろう終盤の挑戦者決定戦をあますところなく愉たのしみ、その余勢を駆って、最強の軍神に挑みかかるわけか」

　それこそがサルバトーレ・ドニの願望。

　みごと言い当てられて、剣のカンピオーネはにんまりと微笑した。

「こんなことをしてたら、誰かが襲いに来るかな？」

　芝生の上に、護ご堂どうは『大』の字になって寝ころんでいた。

　目の前には満天の星。空のくすんだ東京といえども季節は冬、それなりに大気は澄んでいる。そこそこ星を数えることはできる。

　くつろぐ護堂の右隣には、エリカが腰をおろしている。

「どうかしら？　最初の獲え物ものとして護堂を狙ねらう理由って、あまりないと思うわよ」

「わたしも同感です。バトルロイヤルでまず脱落させるべきは、やはり最強か最弱のいずれかでしょう」

　左隣にすわるのは、もちろんリリアナ・クラニチャールだ。

「あくまで私見ですが、草くさ薙なぎ護堂はそのどちらでもないと思います」

「わたしも同感ね。最強と見なすべきはもちろん最古参のカンピオーネであるヴォバン侯こう爵しやくと羅ら濠ごう教主。このおふたりでしょうし」

「最弱と見なすべきは、やはり例のご婦人だと思われます」

「あなたもその辺をわかっているから、あんな指示を出したんでしょう？」

「まあな。ただ、あの人はたしかに最弱だけど」

　エリカがいたずらっぽく見つめてきたので、護堂は苦笑いした。

「いちばん厄やつ介かいでハチャメチャな人でもある。べつに攻略しやすいとはみんなも思ってないだろうけどな。むしろ余裕があるうちに片づけておきたいって気持ちがあるから……真っ先に狙われる。そんな気がするよ」

　むくりと護堂は上体を起こした。

　尚なお、三人がいる芝生、公園の一部などではない。

　神じん宮ぐう球場――。

　明めい治じ神宮の敷地内にある野球場であった。二塁ベースのやや後方に、三人で腰かけている。プロ野球のみならず六大学リーグでも使われる。ある意味、東京の野球好きにとっては聖地だとも言える。

「こんな形で神宮に来るとは、夢にも思わなかったぞ」

　以前は野球選手だった草薙護堂。

　観客ではなく、プレイヤーとして来たいとめざした場所だったのだが。

　今夜、護堂は七魔王のひとりとして神宮に陣取っていた。

　魔王内戦における当座の陣地。どのカンピオーネが襲ってきても、周囲に被害を振りまくことなく戦えるだけの広さを持つ空き地。かつ、東京周辺のどこへでも移動しやすい拠きよ点てん。ここはそれらの条件を併あわせ持つ好立地なのだ。

「でも護堂。わたし的には人工芝というところでマイナス三〇〇点よ」

　エリカが優雅かつ尊大に決めつけた。

「こうして寝ころんだり、すわっていたりしても、今ひとつ気持ちよくないし」

「わがままなエリカの同類に思われるのは心外ですが、実はわたしも同意見です。やはり芝生というのは天然に限ります」

「いいじゃないか人工芝、手入れが楽だし」

　リリアナまで同意したので、護堂は身もふたもない反論をした。

「それに大体、おまえたちの地元のミラノだって、なんとかいうスタジアムで人工芝を使ってるんだろ？　たしか天然と人工のミックスだとか」

「だからよ。郷きよう愁しゆうとあこがれも込めて、天然自然の産物がいいと言いたいの」

「そのとおりです。よそ者から『じゃがいも畑』などと罵ば倒とうされる芝なんて、わたしたちだって御免です。美しくない」

「美しさより、実用本位でいいと思うんだけどなあ」

　労働者階級らしく、護堂はぼやいた。

「手入れする人たちの身になれよ。芝生のメンテって本当に大変らしいぞ。しょっちゅう水を撒まいたり養よう生じようさせたり」

　エリカとリリアナはイタリア北部の大都市、ミラノの出身だ。

　この街にはスタディオ・ジュゼッペ・メアッツァがある。通称サン・シーロ。神宮球場と同じく、多すぎる試合数のせいで常に芝生が酷こく使しされているスタジアムだ。人工品の導入は合理精神というものだろう。

「とにかく、あと三分で零時か……」

　草薙護堂の右に金髪のエリカ、左に銀髪のリリアナがひかえる。

　魔王カンピオーネの左右を、紅あかと青の双騎士が守護する図であった。かつてヴォバン侯爵と対決したとき、この未来を幻げん視しした媛ひめ巫女みこは不在である。

　だが、ふたりの騎士がいるかぎり、死角はない——。

　正せい史し編へん纂さん委員会のバックアップもある。護堂は第四の人物へ声をかけた。

「でも馨かおるさん。頼んでおいてなんですけど、ここを使わせてもらえるとは——」

「予想外でしたか？」

　くすりと微笑む中性的な美少年、沙さ耶やの宮みや馨という。

　白を基調としたパンツルックが典てん雅がな美び貌ぼうによく似合う。が、戸籍上はあくまで『♀』、そのうえ媛巫女でもあるオ女。

　しかし、護堂のなかでは、あくまで男友達のひとりであった。

「見くびらないでくださいよ。護堂さんの頼みとあらば、この程度の無茶を押しとおすくらいの強権、委員会にはちゃんとあるんですから」

「ありそうだとは思ってましたけど」

　護堂はしみじみと言った。馨は歳とし上うえなので自然と敬語になっている。

「こんなところの使用許可まで、下りるものなんですねえ……」

「カンピオーネが東京に全員集合した今なら、たいていの無茶は通せると思いますよ。試しにいろいろお命じください。ぼくも実は国会議事堂や首相官邸の明けわたし要請とかでも応じてもらえるか、興味があるんですよねえ」

「さすがに、それはちょっと——ん？」

　護堂は耳をすました。声を聞いた気がしたのだ。

「どうしたの、護堂？」

「待てエリカ。この気配はもしかすると……」

　怪け訝げんそうな金髪少女を、リリアナがたしなめている。おそらく魔女の霊感にもひっかかるものがあったのだろう。

　護堂は感覚を研ぎすますべく、両目を閉じ——ようとした。

　が、その寸前で。

「緊急速報です。草薙さんの読みが大当たりでしたよ」

「甘あま粕かすさん⁉」

　いつのまにか甘粕冬とう馬まが近くまでやってきていた。

　護堂は驚いた。ここは二塁ベースのやや後方。だが、甘粕は音も気配もなく投手のマウンドあたりにいたのだ。さすが忍びの末まつ裔えいというところか。

　実は俊足の持ち主だという甘粕、渋しぶい顔であった。

　護堂たちはさっと芝生から立ちあがり、エージェントを出迎える。

「最初に動き出すのはおそらく侯爵か教主のどちらか。で、動きを追いやすいのは侯爵さまの方だから——って草薙さんの読み、ばっちり正解でした」

「狙われたのは、やっぱりアイーシャさん？」

「そこまでは不明ですが、新しん宿じゅく界かい隈わいがちと厄やつ介かいなことになりそうです」

　夜の東京都内で、最もにぎやかであろう一角。

　魔王内戦のオープン戦がそんなところではじまろうとしている。あの辺にはどれだけの一般人が集まっているだろう？

　甘粕が渋い顔をしているのも当然だった。

　すぐに護堂は目配せした。両隣でふたりの騎士たちがうなずく。

　いよいよカンピオーネ七人が相あい打うつ死闘の幕開け。次に一息つけるのは何時間、あるいは何日後になるか——。

「馨さん。あとのこと、もろもろお願いできるかしら？」

「ああ。わたしたちや草薙護堂の方で気を回す余裕は——たぶんないだろうからな」

「もちろんだよ。御武運をお祈りいたしますよ、護堂さん」

　後方の責任者は力強く請うけ合ってくれた。

　せっかく用意してもらった神宮の拠点だが、今は打って出るべきだろう。甘粕に先導されて、護堂たちは外へ向かう——

　というところで、護堂の心に訴えかけるものがあった。

（……さん、……堂さん、護堂さん！　私の念、とどいていますか!?）

「やっぱり万ま里り谷やか！」

護堂はハッとした。さっきも遠くから聞こえた気がしたのだ。

幽かくり世よに旅立った媛巫女。草薙護堂とカンピオーネたちの戦いをこの世ならざる領域から見守ってくれているはずの仲間が——メッセージを送ってきてくれた！

（護堂さん、お気をつけください。警戒すべきは侯爵だけではありません。ほかにも危険の兆きざしが——）

「なんだって？」

3

「ふんふんふん♪　ふんふふんふ～ん♪」

鼻歌など口ずさみながら、アイーシャは歌か舞ぶ伎き町ちようを歩いていた。

上機嫌なうえに千ち鳥どり足あしである。右手に持つおみやげの包みは、由ゆい緒しよ正しい酔っぱらいのアイテム。寿司を箱に詰め、紐ひもでしばる〝例のアレ〟だった。紐をつまんで持ちかえる。直前までいたお寿司屋で詰めてもらった。

こんな状態ながら、いまだメイド服を着用中である。

その上にひっかけているのは、最初の飲み屋でもらった赤ずきん。

しかし、どこかの酒場や風俗店のコスプレしたスタッフ、奇抜な格好で飲みあるく変人なども見かける街なので、アイーシャばかりが目立つことはない。ここは新宿歌舞伎町、夜や王おうや嬢じよう王おうもひしめくだけあって、懐ふところの広い街なのだ。

猥わい雑ざつ、混こん沌とん、活気、精気、喧けん噪そう、欲、愛憎——。

清浄ならざる不健全な活力が街の空気にねっとり溶けこんでい

る。

　これはこれでアイーシャの肌になじむ。心地よい。

　もともと植民地時代のインドで孤児として路上生活し、退廃の都たる一九世紀ロンドンで女中として下働きもしていた。

　おっとりたおやかな容姿とは裏腹に（これでも）海うみ千せん山やま千せんなのだ。

　酸すいも甘いも身をもって（たっぷり）経験してきたのだ。

　若いどころか幼い少女とさえ見られるような顔つきでも、波は瀾らんの生涯がアイーシャの心身に刻みつけた年輪は、珠しゆ玉ぎょくの輝きを放ちつづけているのだ！

「……なぜかしら？　どこかの誰かがわたくしの陰口を言ってるような……」

　ほろ酔いゆえの被害妄もう想そうが首をもたげたりもしたが。

　アイーシャの皮ひ膚ふ感覚はなんとなく悟っていた。街の空気に――ぴりぴりした鋭さがひっそりと混ざりはじめている。

　剣けん呑のん。危険。不吉。凶きょう兆ちょう。悪意。闘志。殺気……。

　急速に酔いが醒さめていった。

　もともとカンピオーネの肉体は毒素に対しても非常識な耐性を持つ。すこし集中力が高まれば、この程度の酒は一瞬にして消え去る。

　だから、人通りのすくない裏路地へ入ったのは――わざとだった。

　肌がひりついている。このまま雑ざつ踏とうのなかを進みたくない。何かがまずい。

「ふんふふん、ふふんふふん……」

　若じやつ干かん、鼻歌のトーンは落ちたものの。

　千鳥足よろしく器用にステップを踏みながら、せまい裏道を進む。

　まだ酔ったふりをつづけるべきだった。裏口があれば建物に入ってしまうのもいい。雑居ビルの谷間をすり抜けて、べつの広い通りに出るのもいいだろう。逃げるが勝ちだ……。

「あら？」

　アイーシャは目を大きく見開いた。

　裏道ではサラリーマン風の男性がうずくまっていた。こちらに黒いスーツの背中を向けている。飲み過ぎだろうか。

　何か胡う乱ろんなものを感じながらも、声をかける。

「あのう……気持ちが悪いんですか？」

　歩みよって、スーツの背もさすってあげる。

　親切心ゆえのお節せつ介かいだった。男性は吐き気でもするのか、両手で口や鼻を押さえながら、つらそうに答えてくれた。

「だ、大丈夫、たいしたことはないんです。ただ――顔がむずむずするだけで……」

「むずむず？」

「はい。鼻が……のびていくみたいな――すごく変……です」

　だんだん男性の声がくぐもってきた。

　聞き取りにくくなる。そして、アイーシャが身を乗り出した瞬間。うずくまっていた男性はゆっくりと振りかえった。

「うぐ……ぅぅぅぅぅウウウウウるるるるるるっ！」

「ええっ!?」

　アイーシャは驚きよう愕がくした。

　サラリーマン風だった日本人男性、その顔が狼おおかみのそれになっていた。

　一瞬前まではまちがいなく人間だったはずなのに。スーツの袖そで口ぐちから出ている手首から先も毛むくじゃらで、その顔も、牙きばと爪つめもまちがいなく狼のパーツである。

「きゃああっ!?　まさか狼男さん!?」

「ぅぅぅるぅぅぅうううっ！　ガァァァアアアアアアッ！」

　うずくまり、アイーシャに背中をさすられていた男性。

　彼は野獣の咆ほう哮こうを放ちながら、バネ仕掛けのように勢いよく立ちあがり、二足歩行する狼男として——つかみかかってきた！

（逃げなきゃ！）

　アイーシャはとっさに跳びすさり、彼の両手に空くうを摑つかませた。

　特に武芸・体術の心得もないが、当然だろう。死の淵ふちに追い込まれたときのカンピオーネは極限の集中力を発現させて、野獣同然の俊しゅん敏びんさを見せる。

「えいっ！」

　もったいないが、おみやげの包みも狼男の顔に押しつける。

　これが幸運にも決まった。ちょうど大口を開けて、アイーシャにかぶりつこうとしていた狼男——その喉のどの奥を折り箱の角が抉えぐったのだ。

　狼男がひるんだ隙すきに、たたっとアイーシャは走る。

　こう見えて足は抜群に速い。もともと歩いていた表通りにすぐもどってきた。

「え——っ!?」

　そして、愕がく然ぜんとした。

　ほんの数分前まで、猥雑すぎるほどの繁華街だった。

　男・女・性別不詳・酔った者・呑んでない者・下げ戸こ・商売

人・仕事帰りの勤め人・遊び人などが雑多に集まり、自由すぎる街の空気を作っていたというのに。

　今は狼人間ばかりがそこにいた。

　背広やコート、冬用の衣服、果ては仮装用のセーラー服やブレザーなどを身につけた——毛むくじゃらの狼男／女たち。

　ある者は直立歩行し、ある者は四つん這ばいになっている。

　だが、狼どもはみんな凶暴な目つきでアイーシャひとりをにらみ、ぐるぐるとうなり、獰どう猛もうに牙まで見せて、今にも飛びかかろうとしていた。

「ひねくれ狼リユコスの権けん能のう……」

　誰の仕し業わざか、もうアイーシャにはわかっていた。

　が、ここで真っ先にすべきはひとつしかない。急いで皆へ呼びかける。

「みなさぁぁぁん！　落ちついてくださーい！」

　三、四十人はいよう狼人間たち、途端にびくっと動きを止めた。

「いい子ですから、わたくしの言うとおりにしてくださいねえっ。まずは深呼吸して、わたくしとお友達になりましょう！」

　ふぃぃぃぃぃぃぃ。人じん狼ろうたちはそろって深呼吸してくれた。

　アイーシャを見つめる獰猛な瞳ひとみの数々はもう、情愛できらきら輝いていた。

　もはや狼というより忠犬の群れである。襲撃寸前だったところから一転、逆に人狼たちは数十人がかりでアイーシャをとりかこんでくれた。

　彼らの視線と鋭い牙は外に向いている。女主人を守るつもりなのだ。

　そして、老ろう侯こう爵しやくの低い声をアイーシャは聞いた。

「ヴォバンの下僕をこうもあっさり奪いとるか。予想はしていたが、さすが全てを魅み了りようする魔女——神をも殺あやめる魔女の力はすさまじいな」

「やっぱりお兄さま……」

　くつくつと笑いながら、ゆっくり歩を進めてくる。

　デヤンスタール・ヴォバン。狼の軍勢を統すべる権能の持ち主。

　そう。アイーシャは知っている。彼は魔ま狼ろうの群れを召喚し、自みずからの肉体を狼に変えるだけではなく——

　その気になれば、眼前の人間をも狼・人狼に変へん貌ぼうさせてしまう！

「ず、ずっと前におっしゃっていたじゃありませんか。狼の刻印は意味あるもの。そこらのつまらぬ輩やからにくれてやる義理はない、と……!?」

「そういえば、そうだったな」

「なのに、縁もゆかりもない人々をこんな目に遭あわせて！」

「ふふふふ」

　アイーシャの糾きゅう弾だんを受けても、老王は悠ゆう々ゆうとほくそ笑む。

　お兄さまが自分以外を魔狼化させることは稀まれだ。ヴォバン侯爵に絶対の忠誠を捧ささげた配下への褒ほう賞しようとして、あるいは裏切りや叛はん逆ぎやくへの罰として、変身させる。

　狼の刻印は一時的ではなく、半永久的に続くらしい。

　ゆえに、ヴォバン侯爵はつまらぬ輩にその栄誉を授けない……。

「よいではないか、魔女よ」

　しかし今、彼はひねくれたユーモアの才を発はつ露ろさせていた。

「われわれ神殺しが全員集まるほどの大戦だぞ。芸を出し惜しん

で、どうする？　持てる全てを駆使して、この戦いを盛りあげたいところではないか」

「そんな!?　景気づけの花火じゃないんですから！」

「はははは。上手うまいことを言う。だが、まあ、たしかに」

　ヴォバン侯爵の——エメラルド色の双そう眸ぼうが輝きを帯びた。

　その邪じや眼がんが冷たく眺めたのは、アイーシャを守ろうとまわりに集まった人狼たち。呪力と神しん威いが振りまかれる。

「つまらぬ輩が必要以上に出しゃばるのは、御免こうむりたいところだな。そろそろまとめて退場してもらうとしよう。こういう街もきらいではないのだがね。どちらかと言えば、静かな場所の方が私の好みだ」

「——!?」

　ふたたびアイーシャは愕然とした。

　周囲をとりかこんでくれていた数十名の人狼——その全員が白い像と化した。邪眼の権能によって、塩の結晶に変化させられたのだ。

「お、お兄さま。どうしてもわたくしを討つおつもりなのですか？」

「いかにも」

「ううっ。もうすこし悩んでから、答えてくださいな」

「悩むも何も、君という存在をいつ排除すべきかが長年の懸けん案あんだったからな。私としてはその好機をいよいよ得られて、晴れやかな気分だ」

「お、お兄さまったら、あいかわらず冷たいことばかりをおっしゃいますのね……」

　さらりと宣告されてもアイーシャは食い下がった。

「でもでも！　わたくしたち、もうずっと長い間、兄妹きようだい同然のおつきあいをしてきたじゃありませんか!?」

「……と、君が主張するたび、私は何度もこう言ったはずだな」

　今までの上機嫌さをヴォバンは一時だけ棚上げした。ぴくりと眉まゆをひそめて、遺い憾かんの意を表明したのである。

「魔女アイーシャという厄やつ介かいきわまりない存在を葬り去るには、格別の覚悟と——意志が不可欠になるはずだ。今はそれを溜ためこむために見逃してやるが……いずれ爆発の時は必ず来るだろうとも」

「言われてみると、たしかに昔はよく聞きましたけど。もう半世紀以上もおっしゃってなかったから、お兄さまはお忘れになったのだとばかり——」

「そんな道理があるものか。単に面倒だから言わなくなっただけだ」

「ひえええっ」

　衝撃の告白を受けて、アイーシャは狼ろう狽ばいした。

　なんという悲劇。なんという行きちがい。義兄妹にもひとしいふたりのために、運命はなんと残酷な試練を課すのだろう！

（いけないわアイーシャ、こんなことでくじけたら駄目！）

　涙ぐみながら、それでも自分に言い聞かせる。

　この悲しい行きちがい、もつれてしまった愛憎の糸、いつかは修復できるはず。しかし、お兄さまが現在進行形で放つ殺気をやりすごすのは——

　愛でも説得でも無理そうだ。

「そうだわ！」

　ハッと気づいて、塩と化した人狼のひとりへ駆けよる。

　ぶかぶかのパーカにゆったりしたジーンズというラフな格好だ。

体格のいい若者が狼男と化したらしい。数十名の人狼のなかでもひときわ大おお柄がらで、屈強そうだった。仁王立ちのまま、逞たくましい彫像になっている。

アイーシャは彼の背中に抱きついて、さらに首っ玉にしがみつく。

「おねがい、わたくしといっしょに逃げて！」

瀕ひん死しの負傷者さえも瞬時に癒いやす。それが治ち癒ゆの権能。

アイーシャがその神力をめいっぱい注ぎこんだ結果、塩の像はふたたび毛むくじゃらの人狼へともどり、力強さと俊敏さを一気に回復させて——

雑居ビルの壁めがけて、ジャンプした。

「ぐる——おおぉぉぉぉぉおおんんんっ！」

「おみごとです！　思いっ切りやっちゃってください！」

アイーシャは彼の背中におおいかぶさっている。おんぶの格好だ。

だというのに、屈強なる人狼は四メートル以上も跳びあがった。助走もなしでだ。

あげく、そのままビルの壁を蹴って、二度目のジャンプ。それで悠々と雑居ビルの屋上まで一瞬で跳びあがってしまう。途方もない脚力だった。

人狼はビルからビルへと、アイーシャを背負ったまま次々と飛びうつっていく。

そのアクションに目を瞠みはったのは、もちろんヴォバン侯爵だ。

「ほほう」

「もうちょっとの間、がんばってくださいね！」

　移動手段になってくれた人狼へ、アイーシャは必死に声援を送る。

　予感があった。彼はいずれ塩の像にもどるはずだと。

　治癒の権能によって邪眼の呪じゅ縛ばくを解いてみたが――おそらく長くは保もたない。あくまで一時的な無効化だと、手応えから感じていた。

　だが、今はとにかく逃げるのが先決。

　人狼の背中でアイーシャはため息をついた……。

「ふん。私の呪縛を破ったか」

　デヤンスタール・ヴォバンは肩をすくめた。

「きっとできるのだろうとは思っていたが、やはりな」

　さすが魔ま性しようの女王。自分と羅濠の両名をも警戒させる神殺し。

　かつて――あの魔女と初めて揉めたときのことをよく覚えている。羅濠教主ともども、ロンドンにて手玉に取られてしまった。

　あそこで二名ものカンピオーネを同時に無力化させた力――。

　妖精の通つう廊ろう。どこかの時代、どこかの異世界へとつながる妖あやしき洞どう穴けつ。あれを権能として手に入れた女王アイーシャこそが最も警戒すべき敵なのだ。

「ここから狩りの本番というところだな」

　勝負のはじまりを前にして、ヴォバンはつぶやく。

　こちらが最古参のカンピオーネならば、あちらもそれにおとらぬ戦歴の持ち主。見た目と性格にだまされると、しっぺ返しを喰らう。

　ヴォバンは配下の狼どもを呼ぶべく、手を一振りさせた。

4

「ううううっ。お兄さまったら今回、ものすごい気合いだわ……」

　アイーシャは嘆なげいた。

　ひた走る人じん狼ろうの背中に身をあずけて、今も逃走中である。

　ビルの屋上から屋上へと難なく跳びうつるどころか、垂直な壁さえ駆けのぼるほどに人狼の脚力・ダッシュ力はすさまじい。

　おかげで、あっというまに歌か舞ぶ伎き町ちよう界かい隈わいを通過できた。

　新しん宿じゆくの駅前もさっと駆け抜けていった。数十匹、あるいは百匹以上の魔ま狼ろうが追っ手として放たれたようだが、まだどうにか追いつかれていない。スタートダッシュで最初にそこそこ引き離せたおかげだろう。

　今は地上に降りて、アスファルトの路上を全力疾走中だ。

　だが、力走する狼男の背中から。

　アイーシャは変わりはてた街をまざまざと見ることになった。

　行く先々で人間が——塩の像と化していた。ひとりの例外もなく白い人型の像となって、天下の往おう来らいを埋め尽くしていたのだ。

「そんな……」

　疾走する人狼の背で、アイーシャは呆ぼう然ぜんとしていた。

　今は新宿区役所前を通過し、靖やす国くに通りを渡ったところだが。

　道中、無事な人間をまったく見かけなかった。そこかしこで冬の

外出着ごと塩化した人々が停止しているだけだった。

　無表情で道を歩く者。笑っている者。

　飲みすぎて参っている者。連れとはしゃいでいる者。立ち話をしている者たち等々。一切の例外もなく平等に。

　それは新宿駅前の最もにぎやかなエリアでも同じだった。

　大銀行、大型書店、家電量販店、アニメショップなど数々の大型店舗や小店、会社のオフィスなどがひしめいている。

　新宿といえども深夜なので、あまり人出は多くないのが幸いだったが……。

「お兄さまの目で視られたせいだわ……！」

　この程度、ヴォバン侯こう爵しやくにとっては児じ戯ぎにも等しい。

　むしろ手加減したのだろう。都市ひとつの住民をまるまる塩化させるほど、邪じや眼がんのひとにらみはすさまじいのだから。

　この権けん能のう、賢人議会は《ソドムの瞳ひとみ》と命名した。

　ソドム。住民が退廃のかぎりを尽くし、神の怒りに触れた都。神罰によって都は滅び、民のほとんどが死に絶えた。旧約聖書のエピソードである。

　これを再現できるがゆえに、冒ぼう瀆とくの都の名を冠されたのだ。

「お兄さまのお力って、どうしてか『みんなまとめて』系が多いのよね……」

　アイーシャはぼやいた。

　単純に『狼おおかみに変身』だけでなく、『狼の群れ』を呼びよせる。

　配下の者たちまで『狼の軍団』に変へん貌ぼうさせてしまう。も

しかしたら、路上暮らしの孤児から欧おう州しゅう最大の魔王へと登りつめた男の生き様が何か影響しているのかもしれない。

……さて。

うぉん！　うぉん！　うぉん！　うぉん！　うぉん！

「い、いけない。もっと急ぐことってできますか？」

自分を運んでくれている人狼へ、アイーシャは声をかけた。

後方から追いかけてくる魔狼の吠ほえ声、だんだんと近づきつつある。距離を詰められているのだ。それでもここまで逃げてきてくれたのだから、アイーシャを背負う人狼の体力たるや相当なレベルである。

しかも、さっき逃げてと頼んだとき、特に行き先は指示しなかった。

こんな指示ながら、人狼の彼は上手うまいことやってくれた。数時間前にアイーシャが使った幸運の権能――あれが効いたのかもしれない。

ただし。

唐突すぎる幸運は、その反動として唐突な不幸をも授ける。

そこまでがセットとなった権能なのだ。そして今回も、アイーシャの前に思いもかけなかったトラブルが広がっていた。

「あらあら？」

蔓つるが――何かの植物とおぼしき蔓が大量発生していたのである。

人ひと気けのない深夜の道路、そして建ちならぶビルや一軒家の壁一面にびっしりと緑色の蔓が生おいしげっている。そういう情景がどこまでも、アイーシャの視力がおよぶかぎりではあるが、どこまでも続いていた……。

いまや運搬役の人狼氏は、その蔓を踏みつぶしながら疾走中であった。

あからさまにあやしい。しかし。

「なんだかお兄さまのご趣味とはすこしちがうような……」

直後、さらなる不運がやってきた。人狼——アイーシャをおんぶしていた協力者がいきなりつんのめり、転倒してしまったのである。

その拍ひよう子しに、背中の荷物まで投げ出されてしまう。

「きゃあああああああっ⁉」

アスファルトの路上にたたきつけられ——はしなかった。

地面をびっしりと埋め尽くした蔓がクッションの役目を果たしてくれた。しかも、カンピオーネの肉体は常じよう軌きを逸いつするほど頑丈なのだ。

「びっくりしちゃいました。足でも引っかけたんですか？」

アイーシャはけろっと立ちあがり、人狼に声をかけて。

「あ……」

と、言葉に詰まった。

直前まで力強く爆走していた屈強の狼男、白い彫像にもどっていた。

治癒の権能によって、一時だけ塩化を解除したわけだが——魔法の解ける時間がついに来てしまったのだ。

「今までありがとうございました……」

合がつ掌しようし、お礼を言う。ここからは自力で走らなくてはいけない。

アイーシャはまわりを見まわした。

新宿の騒がしい駅前から、一駅分ほどは走ってきたはずだ。

この辺もビルが多いのは変わらない。しかし、客の出入りが激しそうな施設はほとんどなさそうだ。夜の喧けん噪そうもなく、ひっ

そりしている。

　会社のオフィスや小規模な店などが多い地域なのだろう。

　駅名でいえば、新宿三丁目か新宿御ぎよ苑えんあたり――。

　アイーシャは東京の地理を思いえがこうとした。しばしば方向音おん痴ちと思われる彼女だが、実は逆だった。

　滞在先の地図を集めて、暗記するまで読みこむ。それが趣味なのである。

　土地勘かんという旅人・冒険者にとって得がたい特技を身につけるためだ。そして、アイーシャはこの道の達人だった。ただ、まあ、ちょっとした勘ちがいや不運な巡り合わせの結果、道に迷う機会が多いことも否定はできないが。

　そういうトラブルとは今度こそ無縁でいたいと思った――次の瞬間。

「きゃあああああああああっ!?」

　地面を覆おおいつくした蔓。その一本がいきなり足首にからみつき、アイーシャのかぼそい体を空中へと吊りあげたのである。

　まるで、水中から一本釣りされた魚さながらだった。

「わ、わたくしを狙ねらっているのかしら、やっぱり!?」

　釣り糸代わりの蔓はある場所へとぐんぐん引きもどされていく。当然、獲え物ものであるアイーシャの体も『びゅうんっ』と宙を飛ぶ。すさまじい速さだ。

　どこへ引きこまれているのか？　空中に浮いたことで、すぐにわかった。

「新宿――御苑!?」

　蔓の出所は数百メートル先にある都市公園であった。

　だだっ広い芝生に日本庭園、洒落しやれた並木道などを擁ようしている。ごみごみした都心のオアシスというべき人気スポット――

であったはずだが。

　しかし今、アイーシャが見つめる先には〝密林〟があった。

　プラタナスや桜、梅、杉といった定番の樹木たち。

　どれも高さ五、六〇メートルに達するほどの大成長を遂とげて、公園の敷地からあふれ出ようとしている。そう。東京ドームが一〇個以上も入るという新宿御苑に、収まりきらなくなっているのだ。

　世界遺産となった屋や久く島しまの原生林にも見劣りしないどころか、いずれはあの森を超えるほどに育ってしまいそうだ。

　ここは亜熱帯気候でも、高温多湿のジャングルでもないというのに！

　誰の仕し業わざか、もうはっきりとしていた。

「お――お姉さま、いらしているんですね!?　羅ら濠ごうお姉さまっ。これじゃあ、ちょっと乱暴すぎると思います！」

　叫びもむなしく、魔の森と化した新宿御苑へアイーシャは引きこまれていった。

5

「お～姉～さぁぁぁまぁぁぁぁぁ！」

　下界でアイーシャ夫人が何か叫んでいる。

　東京に創り出した〝魔の森〟のなかへ、ちょうど引きこんだところだった。

（あの魔女はあいかわらず、騒々しい）

　仙せん女にょにもひとしい威厳をもって、かすかに冷笑する。

　あの場所、弟子の陸りく鷹よう化かは『新しん宿じゅく御ぎょ苑

えん』と呼んでいた。あそこの樹木をありえない速度と規模で成長させたのは、もちろん羅ら翠すい蓮れんの権けん能のうだ。

『百ひやく草そう芳ほう菲ひ、千せん花か繚りよう乱らん』——。

　自みずから、そう命名した。

　草木や花々を生み出し、あるいは育てる力だった。『大だい力りき金こん剛ごう神しん功こう』『竜りゆう吟ぎん虎こ嘯しよう大だい法ほう』にならぶ空前絶後の絶ぜつ技ぎである。

（ひさしぶりに使いましたが……今回もなかなか良い出来です）

　上空から〝魔の森〟を見おろして、羅翠蓮は満足した。

　道どう姑こ の方ほう術じゆつで視覚を深夜の新宿上空に送りこみ、地上の様子を眺めていたのである。雲上に立つ神仙さながらに。

　魔王集結の会合直後から、実はそうしていた。

　ほかの神殺したちが動き出せば、必ず何かの兆きざしが現れると。

　案の定、新宿なる街の一いち隅ぐうで魔女アイーシャと、狼おおかみ王おうヴォバン侯こう爵しやくが抗争の口火を切ったので、す

かさず羅翠蓮も介入したのだ。

　新宿御苑――。

　権能を使う前、ここはひどくつまらない公園だった。

　石だらけの都市の隙すき間まに、申し訳程度の空き地と木々を詰めこんだだけ。

　うわべだけの自然。うわべだけの癒いやし。愚ぐ民みんどもはそれでごまかされよう。しかし、羅翠蓮の聖せい眼がんを前にしては、なんともうすっぺらい……。

　というわけで、衝動的に権能を振るった。

「……水は木を生み、木は土に克かつ。五ご行ぎようの理ことわりよ、かくあれかし」

　それは祝福の言こと霊だまだった。

　草よ、育て。人間ごときの背がおよばぬほどの高さにまで。

　木よ、育て。天を衝つくほどに高く、太く、その枝と葉で空をおおいかくすほどに。

　花よ、育て。ささやかな美と可か憐れんさで人間ごときに媚こびることはない。花よ舞え。狂え。咲き乱れよ。



「羅ら濠ごうの森をしろしめす理はただひとつ——適者生存。その語句のみを魂たましいに刻み、命の全てを燃やし尽くすのです。そして」

　東京のうすよごれた街並みと、超常の森へと急成長を遂げた新宿御苑。

　それらを見おろしながら、羅翠蓮は命令を下したのである。

「魔女アイーシャめを捕らえ、命の裁さばきにかけなさい」

　かくして——

〝魔の森〟新宿御苑はその敷地の外へと、うねうね無数の蔓つるをのばしはじめた。

　獲え物ものとされた女がいるとおぼしき方位・北へ向けて。結果、蔓の網にひっかかったアイーシャ夫人をそのまま釣りあげた……。

　新宿御苑はいまや一箇の生命体、魔物でもあるのだ。

　魔の森。生きた森。超自然の力を手に入れた森。狩るべき獲物を自ら捕らえ、引きずりこんでしまう悪魔の森——。

（それにしても）

　天上の神々よろしく、下げ界かいを見わたす羅翠

蓮。

　新宿周辺の惨状、千せん里り眼がんによって誰よりも正確に把握していた。

（さすがは我が因いん縁ねんの旧敵……。魔ま狼ろう王おうの手て際ぎわはみごとの一語に尽きます）

　心からの賛さん嘆たんがこみあげてくる。

　今、アイーシャ夫人が駆け抜けていった一帯――新宿駅なる『陸おか蒸じよう気きの乗り場』周辺や吐き気がするほど猥わい雑ざつな繁華街、新宿御苑近くの比較的落ち着いた街区など。

　それらの往おう来らいには、邪じや眼がんによる犠牲者が散さん見けんできる。

　御苑から這はい出てきた蔓の下にも、実は『白い人間像』がすくなからず眠っている。

　しかし、実はそれだけではない。

　そういった区画の建物内部にいた者まで、ことごとく邪眼の呪じゆ詛そを受けていた。羅翠蓮の千里眼は早くもそれを見抜いていた。

（前に仄そく聞ぶんしたとおりです。ぶあつい城壁でさえぎられたとしても、魔狼王の邪眼はたやすく内側まで浸透してみせる――）

　先ほど、新宿ではひとにらみをしただけだ。

　それだけで彼の視線は数里先にもおよび、何百・何千もの犠牲者を生み出した。本気で邪眼を解きはなてば、東京中の民たみを塩に変えることもたやすいだろう。

（ふふふふ）

　思わず、口元がほころんでしまう。

　アイーシャ夫人という最も厄やつ介かいであろう存在。彼女の抹まつ殺さつを今のところ優先しているが、その先に待つ五魔王との決戦こそ、やはり羅翠蓮には何よりの——

（いけませんね。まずはあの魔女の始末です）

　逸はやる心を抑おさえ、当座の目標に集中しなおす。

　羅翠蓮はあらためて、新宿御苑のなかに目を向けた。こちらに引きずりこまれたアイーシャ夫人を探す。

　妖あやしき密林にそびえる木々は高さ五、六〇メートルにもおよぶ。

　そうした大樹が競うように枝を四方八方にのばし、樹海を形成している。その奥深くに引きずりこまれた人間の居場所など、鳥の目をもってしても発見できるはずはないのだが——万能なる羅翠

蓮は、その聖眼で不可能をたやすく可能にする。

　人の気配を追って、彼女の『目』は森の中央付近にやってきた。

「あ、あれえええええええっ！」

　アイーシャ夫人はとある池のほとりにいた。

　そこにはもともと蓮はすが群生していたようだ。しかし、羅翠蓮の権能『百草芳菲、千花繚乱』によって——

　蓮の葉たちは、馬や牛でもその上に乗れそうなほど巨大化していた。

　おまけに、ハエトリソウに似た形状、開いた二枚貝のような形に変化している。葉っぱの端と端がぱくりと貝よろしく口を閉ざして、生き物を呑みこめる形である。

　これが新宿御苑の池のひとつで群生しているのだ。

　水面はびっしり、蓮の葉ならぬ巨大ハエトリソウで埋め尽くされていた。

　人間でもぱくりと呑のみこめてしまうサイズ。また、巨大ハエトリソウの茎からは数十本もの蔓が生えていて——

　触しよく手しゆよろしく、うねうねと器用に動く。

　そして、巨大ハエトリソウのひとつがこの蔓を何本かのばして、

アイーシャ夫人をがっちりとつかまえていた！

「お、おやめになってください！　わ、わたくしなんかを食べてもきっと美味おいしくないですよおおっ！」

　ハエトリソウとは、湿地帯などに自生する食虫植物である。

　しかも羅翠蓮の権能によって、巨大なヒグマでも一、二分で消化できるほどの食欲と能力をあたえられている。

　適者生存。最初に羅翠蓮が唱えたキーワード。

　己おのれが生きるために、他の命を喰らい、栄養として取りこむ。

　その理ことわりを追求すべく、新宿御苑にはびこる草木や花々は今、自らの力で栄養分を取りこむべく超進化を遂げているのであった。

　今回も当然、つかまえたアイーシャを口に当たる部分へ引きよせようとする！

「一週間とは言いませんっ。三〇分だけ待っていただけたら、わたくしよりも美味しいものを必ず持ってきますから！　勘かん弁べんしてくださ～い！　き、究極とか至高っぽいメニューを食べてみた

くはないですか

！」

　必死にアイーシャ夫人が叫ぶ。

　その甲か斐いあって、巨大ハエトリソウ群の操る蔓＝触手は――動きをゆるめた。

　魔女の王が誇る『魅み了りようの権能』はこんな食人植物の魂にも訴えかけるほど、強い支配力を持っているのである。

　だが、それも羅翠蓮は折りこみ済みだ。

　ヴォバン王の魔狼をも魅了したことで、予想はついていた。

（たしかに恐るべき力。……が、やはり草そう木もくの類たぐいには効きが悪い）

　巨大ハエトリソウは口の部分にアイーシャをすこしずつ引きよせている。

　葛かつ藤とうのため速度は半分以下になったものの、魅了の効果

にどうにかあらがいつづけているのだ。しかも、まだまだ援軍がいる。

　池のほとりに生える桜に梅、楓かえでといった日本国を代表する木々——。

　数百本はあるだろう。彼らも覚醒していた。木々の幹は横や縦たてに大きく裂けて、獲物を呑みこむための『口』となっていた。次々とその枝を魔の触手としてのばし、魔女アイーシャをつかまえにかかる！

　新宿御苑にさらなる死の植物たちが誕生したのだ。

　魔の森の眷けん属ぞくたちへ、羅翠蓮は指示と呪力を注ぎこもうとした。

「師、出いずるに律りつを以もつてす。おまえたちも我が声を受け、よく戦いなさい。東方の凶、太たい歳さいの威をここに示すのです」

　遥はるかな高みより、新宿御苑に向けてささやいた。

　この言霊がとどけば、あちらの殺人植物らは飢えた野獣のごとく荒れ狂い、一九世紀以来の旧敵にとどめを刺す——はずだった。が、その寸前で。

　黄金の光が地上から一直線に飛んできた。

　それは刃やいばとなって、羅翠蓮がつむいだ無

形の言霊をみごと切り裂いてみせた！

「輝ける剣の化け身しん……」

　魔教教主の口元に笑みが浮かぶ。

　今の一撃、義姉あねである羅翠蓮もよく承知している。

「軍神ウルスラグナの剣を……ふたたび義姉に向けますか、護ご堂どう！」

　不ふ遜そんなる斬ざん撃げきに、むしろ義弟おとうとの成長を見み出いだして。

　羅翠蓮は一切の邪念なしにくすくすと笑い、深くうなずいた。

「運がいいのか悪いのか、微妙だな……」

　ぼそりと護堂はつぶやいた。

　拠きよ点てんとした神じん宮ぐう球場から、目と鼻の先の新宿で最初の騒ぎが起きた。これは幸運。だが、事をかまえる相手となったのは——羅濠教主。

　義姉が放とうとした言霊を、とっさに切って捨てた。

いきなり東洋最強のカンピオーネとの対決。これはとびきりの不幸だろうか。

いや。護堂は思いなおした。

「誰が相手でもいいとか悪いとかは全然ないな。姐ねえさんだろうとアイーシャさんだろうと、とんでもなく面倒な相手しかいないし」

苦笑いして、魔の森と化した新宿御苑を見すえる。

今、護堂は首都高四号の新宿線――高架線上の高速道路にいた。

この道路は新宿御苑の南側と沿うようにして、敷設されている。新宿一帯でのトラブル発生を受けて、早々に通行停止となった。

そこに堂々と陣取れるのは、正せい史し編へん纂さん委員会のバックアップがあればこそだ。

いまや車の往おう来らいは全てなくなり、草くさ薙なぎ護堂の独どく壇だん場じようとなっている。

「東京のどまんなかで好き放題やりやがって……」

新宿御苑の木々は、本来の敷地からはみ出すほどに繁はん茂もしてしまった。

どの樹木も六〇メートル前後にまで成長している。首都高の高架線上にいる護堂より、木々のてっぺんの方が遥かに高い。

深すぎる森。外からでは奥の様子など一切うかがい知れない、はずなのだが。

（護堂さん）

幽かくり世よから、頼もしい味方がささやきかけてくれる。

（アイーシャ夫人の位置をたしかめることができました。それと――羅濠教主だけでなく、ヴォバン侯爵も森のなかにはいらっしゃいません）

祐ゆ理りだった。この世ならざる領域から、まさしく『神の視

点』で下界を見わたして、確認できたことを精神感かん応のうで伝えてくれる。

　偵てい察さつ役・助言役としては究極の存在だろう。

（新宿駅のまわりは侯の権能で、ひどいことになっています。でも……侯爵はこの近くにもういらっしゃらないようです）

「アイーシャさんを深追いする気はないってことか……」

　祐理からの報しらせに、護堂はうなずいた。朗報だった。

　侯爵の思おも惑わくはあとで吟ぎん味みするとして、今は――義姉との対決に専念できる。

「……鷹化から聞いてはいたけど、腐ふ界かいの森を創っちまう権能か。姐さんの力は本当にとんでもないな。でも、俺は知っているぞ」

　言葉をつむぐ。神を切り裂き、神しん威いを除去するために。

「木もく火か土ど金ごん水すい。中国でいう陰いん陽よう五ご行ぎようの理ことわりでは――木は『水より生まれ、土に根を張り、育つもの』。木もく行ぎようの星である木星を、姐さんたちの先祖は太たい歳さい・歳さい星せいと呼んだ。そいつを神様として崇あがめるときの名前が太たい歳さい神しん」

　ウルスラグナ第十の化身『戦士』。その武器たる剣の言霊だった。

「その太歳神を殺して、姐さんは木を育て、草や花を生み出し、さらなる力をあたえる権能の主あるじになった！　それがわかった以上――」

　護堂のそばに、剣の象徴たる光球が三〇個ほど顕あらわれる。

　いつもどおりの武器。ただし、いつもとちがうのは量。神やカンピオーネとの戦いでは、この数十倍以上の光球を造り出す。

　だが今回、この約三〇個をひとつに凝ぎよう縮しゆくさせた。

「俺はこの森を斬ることができる！」

　護堂の頭上に――まばゆい光の集合体が顕れ、燦さん然ぜんたる輝きを放つ！

（!?　護堂さん、教主があの森にまた言霊を注ぎこもうとしておられます！）

「それ、俺にも見せてもらえるか!?　さっきみたいに！」

（はい！）

　万ま里り谷や祐理との間には、強い霊的結合が構築されているそうだ。

　幽世で別れる前、軍神ラーマチャンドラの知識を授かったとき、ついでに祐理が作ってくれたそうだ。そのおかげで――

　こうして幽世にいる祐理と交信できる。

　霊視力者である彼女が視みたものを直じかにイメージとして教えてもらえる！

「それか！」

　冬の夜空から、魔の森・新宿御苑へ――光が降ってくる。

　キラキラまたたく光の粒子の集まり。護堂の感覚では、学校の教室と同程度の大きさ・体積だった。これこそ義姉がつむいだ言霊だった。

『太たい歳さい星せい君くんの命めいに疾とくしたがえ、急きゅう急きゅう如によ律りつ令りよう！』

　命の躍動をうながす、羅翠**蓮**による食人の言霊。

　対して、護堂は三〇個分をひとつに圧縮させた光――剣の言霊へ

命じる。

「いけ！」

　剣の言霊はレーザーのごとく一直線に天へ駆けあがった。

　羅翠蓮のつむいだ言霊をみごと斬り裂き、きれいに雲うん散さん霧む消しようさせてみせる。そして、護堂は静かに告げた。

「……姐さん。どうせ観みてるか、聞いてるんだろ？」

　千せん里り眼がんの義姉のこと、首都高にいる義弟を必ず注視している。

　確信にまかせたつぶやきで、護堂は訴えた。

「ここで俺と全面対決するってつもりなら、つきあってもいい。ただ、この辺にはヴォバンのじいさんもうろついている。アイーシャさんだって健在だろう。俺との戦いで弱ったところをそいつらに狙ねらわれたら……ちょっと面倒になるんじゃないか？」

　一対一の対決ではない。バトルロイヤルなのだ。

　護堂としてもヴォバン侯爵とは因縁がある。ここで義姉と決戦して、勝敗がどうあれ激しく消しよう耗もうしたら——なかなか厄介な未来を想像してしまう。

　だからこその牽けん制せい。はたして羅翠蓮は

義弟との消耗戦を望むか否いなか？

　緊張と共に、返答を待つこと数十秒。

（護堂さん！　羅濠教主の『目』が——御苑の上空から消えました！）

「俺の頼みを聞いてくれたわけか……」

　これが初戦の幕引きだった。

　老カンピオーネふたりとちがい、アイーシャ夫人を抹まつ殺さつするつもりはない。むしろ、逆に彼女を守るべきかもと、護堂は考えはじめていた……。

　一方、新宿御苑の奥地にいる当の貴婦人。

「よ、よくわかりませんけど、チャンスです！」

　自分を呑みこむ直前で巨大ハエトリソウは動きをストップさせた。触手まがいの蔓たちも力を抜いてしまった。

　アイーシャ夫人は必死に蔓の拘束をふりほどこうと、奮ふん戦せんしはじめる。

　とにかく、魔の森から一刻も早く抜け出さなくては——。

6

　ふぅ。

　魔教教主との初戦を終えて、護ご堂どうは一息ついた。

　首都高四号新しん宿じゆく線せんの路上にひとりきりだ。エリカとリリアナには、実はすでに〝魔の森〟新宿御ぎょ苑えんへ潜入してもらっている。

アイーシャ夫人の救出が可能かどうか、偵てい察さつしてもらうためだった。

「森のなかはどんな感じか、わかるか万ま里り谷や？」

（アイーシャ夫人は当座の危機をどうにか切り抜けられたようです。ただ、エリカさんとリリアナさんはあまり順調とは……）

「だろうなあ」

通り道など皆かい無むの深き森、人じん跡せき未み踏とうの魔境である。

そこかしこに食虫植物どころか、食獣・食人植物が繁はん茂もしているらしい。

今は深夜だが、たとえ昼間であっても陽光すら届かないほどに、森の木々は異様に鬱うつ蒼そうとしている。危険きわまりない場所だった。

（リリアナさんの飛ひ翔しよう術じゆつで飛び込める森なら、よかったのですが——）

「姐ねえさんが造った結けつ界かいみたいなものだから、それもできないんだよな？　まあ、二重遭難になりそうなら、すぐに出てこいとは言ってあるから……」

大丈夫だと、思いたい。

そのあたりの判断をあやまるコンビではないはずだった。

騎士たちを信じることにして、護堂は話を変えた。

「それより万里谷。俺の方はもういいから、早く休んでくれよ。幽かくり世よからこっちに干かん渉しようするのって、だいぶきついんだろ？」

（は、はい。実はそろそろ限界が……近いようです）

すこし前から、祐ゆ理りは精神感かん応のうの霊力で懸けん命めいにサポートしてくれていた。

　当代最高の霊視力者がささやく、神の視点からのアドバイス。こんな恩恵がいつまでも続くのなら、とてつもなく有利になる。しかし、世界を越えての霊的接触は、精神と霊力をかなり疲ひ弊へいさせるのだという。

　あまり無理はさせられない。護堂は言った。

「本当に助かった。ありがとう。無理にならない程度でまた頼む」

（もちろんです。あ、でも護堂さん、最後にひとつだけ、お節せつ介かいをさせてください。また先ほどのように——交信させていただいても……？）

　護堂は両目を閉ざして、祐理のことを強く念じてみた。

　万里谷祐理。媛ひめ巫女みこ。誰よりも生き真ま面じ目めで、心やさしい大和やまと撫なでし子この少女——。すると、目を閉じているのに、視みえてくるものがあった。

　それは全てが灰色に塗りつぶされた世界と、そこにたたずむ祐理の姿だった。

　ラーマとの対決のなかで別れたときと同じで、巫女みこ装しよう束ぞくのままだ。

「おひさしぶりです、護堂さん」

「さっきもこうして会ったばかりじゃないか」

「でも、もう何日も別れ別れになっていましたから。その間に言えなかった分もお伝えしたくて……」

　照れくさそうに祐理が言う。はにかむところが可愛らしい。



　思わず抱きしめたくなった護堂だが、もちろん自制した。とんでもないことだ。

「？　どうかしましたか？」

「な、なんでもない。それより最後のお節介って……？」

　念ねん波ぱを受け取る形ではなく、面と向かって言葉を交わす。

　護堂が精神集中して、祐理の魂たましいとの結びつきを強くしようと念じたおかげだという。

　これは魔王カンピオーネの呪力と集中力、そして万里谷祐理の卓越した力があって、初めて可能な芸当らしい。

　おそらく、半年前の草くさ薙なぎ護堂にはできなかっただろう。

　カンピオーネとしての能力が成長した今だからこそ、実現できたのだ。

　べつに力の増大などうれしくもないが、その結果として祐理とひさびさの対面ができたことは素直によろこびたい。

　そして、そんな護堂の前で、祐理はおずおずと訴える。

「あ……あの、ですね。先ほど、大急ぎで太たい歳さい神しんにまつわる知識をお伝えしたじゃありませんか。護堂さんに……」

　神じん宮ぐう球場で、祐理からの念を受け取った直後。

　ヴォバン侯こう爵しやくだけでなく、羅ら濠ごう教主まで警戒すべし。そう祐理は警告した。抜きん出た霊視力で、義姉あねの動き出す予兆を察知してくれたのだ。

　さらに新宿御苑を変へん貌ぼうさせた権けん能のう、いかなる神に由ゆ来らいするものかを霊視——。

　あとはいかにして太歳神の知識を授けるかとなったとき、祐理から言われた。おたがいの精神の結びつきを——強化してみましょうと。

　だから、すこし前もこうして彼女と向き合って……。

　護堂はたじろぎつつ、祐理にうなずきかけた。

「さ、さっきのあれはすごく助かった。あれのおかげで姐さんに脅おどしをかけられたんだ。本当にありがとうなっ」

「で、でもですね。時間も短くて、あわただしかったじゃありませんか」

「まあ、それは……」

「もしかしたら、十分に知識をお伝えできなかったかもしれません。それがすごく不安なんです。剣の言こと霊だまとして使うとき、何か不都合が出たらと」

「あ、いや。そこは大丈夫だ」

　切々と訴える祐理に、護堂はすぐに答えた。

「知識が足りないときは単純に『戦士』の化け身しんになれないだけで」

「…………」

「だけで……」

「…………」

　経験から得た知識を語っていると、そんな護堂をたおやかな媛巫女はまっすぐ、何かを伝えたげに見つめてくる。

　祐理の瞳ひとみがひどくさびしそうに見えてしまった。

　その瞬間、全てを了解した護堂はすぐさま彼女を抱きよせた。

「たしかにすこし不安かもな」

「わ、私もそう思います」

「万里谷。最後のお節介ってやつをお願いしてもいいか？」

「はい！」

　もう何も言わせない。祐理の口をふさいでしまう。

じっくりと、唇くちびるの形をたしかめるようにキスを交わして、舌も差し入れる。

すこし強引だったが、清せい楚そであるはずの大和撫子は熱っぽく唇と舌を動かして、迎え入れてくれた。それだけでなく、祐理の方から護堂の唇を吸い、求めてくれる。いつも行為をはじめた直後は淑しとやかなはずの彼女が珍しく。

すぐ理由に気づき、護堂はキスの合間にささやいた。

「向こうでずっとひとりにさせたままで、ごめんな」

「いいんです。必要なことですから……」

うっとりと護堂の耳に口づけながら、祐理もささやき返してくる。

それから、すこし言いにくそうにこうも言う。

「と、ところでですね。私、できるだけ護堂さんを見守りたいと思って、幽世から地上の様子をよく観みるようにしているんです。特に危険の予兆を感じたときは」

「今回もそれに助けられたよ」

「それで、その、観るべきではない場面をのぞいてしまうこともちょっと……。たとえば恵え那なさんと護堂さんが――」

「…………」

そうか。神の視点から下界を観る以上、そういう機会もあるわけか。

護堂は納得した。数時間前、羽はね田だ空港での恵那との一幕。あれを目撃したらしい祐理は耳まで真っ赤になっていた。

「も、もちろん、すぐに目をそらして、観ないようにしたのですけど！　私がおそばにいないときに護堂さんったら――なんていう思いもすこし……あっ」

ふたたび、強引に媛巫女の唇を奪う。

　そのうえであらためて、護堂はろくでもないことを言う。

「あとで誰かから文句を言われてもかまわない。みんながいないとき、またこうしよう」

「はい……。私もないしょにいたします……」

　奥ゆかしい大和撫子には不似合いなセリフを言わせてしまった。

　しかし、自分のような男にそこまで応こたえてくれる彼女がとにかく愛いとおしい。

　護堂は祐理への想おもいを抑おさえきれなくなり、媛巫女の華きゃ奢しやな体をぎゅっと必要以上に強く抱きしめてしまった。

7

「ここにおられましたか、狼おおかみ王おう」

「ふっ。君の方から出向いてくるとはな」

「意外でしたか？」

「いや……。起こりうる事態のひとつとして想定済みではあった。こうも早く現実になるとは思っていなかったがな」

　地上二五〇メートル。高層ビル五二階の展望台だった。

　六ろつ本ぽん木ぎの某ぼう所しよである。すでに深夜三時を過ぎて、入場者などいるはずもない。だが、ふたりの神殺しにとっては何の障害にもならない。

　何なん人ぴとにも掣せい肘ちゆうされえない特権を、力と王おう威いによって獲得した両雄なのだ。

「あなたにしてはずいぶんと詰めが甘い……。あの魔女を追いつめるのであれば、まだまだ打てる手はあったでしょうに」

「その言葉、そっくりお返ししよう」

　冷笑とも苦笑ともつかない表情で、老魔王は反論する。

「君にしては少々手ぬるい攻めではないか。あんな遊技場を造っておきながら、途中で狩りを中断するとは」

「理由を語る必要はありますまい」

「まあ、な。あの魔女を甘く見て、われらも何度煮え湯を飲まされたことか」

「ふふふふ。無論、しとめられるのであれば、そうしたいところではありましたが……今はまだ、アイーシャ夫人を弱らせるだけでも十分でしょう」

「たしかに。あの女の底力……計り知れないものがある」

「われらのごとき武人の智恵も、闘志も、経験も、かの魔女はいつでも軽々と飛び越え、最も恐るべき神殺しとして世界を手玉にとってきました」

「あの者への干かん渉しようは当然つづけていく、が——しとめるのは今でなくともいい」

「狼王もやはり同じお考えでしたか」

　共に最古参の魔王として戦場でまみえ、談笑する。

　かつてない一幕だった。神殺しが幾人になろうと、互いこそを最大の雄ゆう敵てきと見なしてきた二王なのである。

「さて教主どの。君とは吹雪ふぶきのロンドンで立ち合って以来の縁だが、はっきりとした勝敗をいまだつけられていなかったな」

「そのとおりです。……今ここで、武を競うとしましょうか？」

「ああ。それも悪くない」

　自他共に認めるひねくれ者は、にやっと笑ってみせた。

「だが、最上でもない。せっかく百年越しで実現できそうな対決だ。もうすこしもったいぶってみるのもいいだろうさ」

「たとえば、最後のひとりを決める最終戦、などで……」

　互いを同格と認めた強者の顔で、ふたりは同時にほくそ笑んだ。

「簡潔に言おう。私の方は、同盟を申し出る準備ができている」

「こちらもです。わたくしとあなたが最後の二名となり、どちらが『最後の王』と戦うかを決める最終戦の前までは――」

　内戦開始から、すでに数時間が経過している。

　無駄に壮大となった内うち輪わ揉もめをより自分たち好みにすべく、最古参の魔王ふたりはよからぬ相談をはじめるのであった。

第４章　深まる混沌

1

　世界には数々の名山、高峰が存在する。

　そのなかにあって、斉せい天てん大たい聖せいをはじめとする名高き英雄たちが一時の滞在地とした山頂は――決して抜きん出た高所ではない。

　現に、この山のまわりには似たような高さの山々がいくつもならんでいる。

　ちょうど山頂にいるので、兄弟さながらにならぶ連峰という景観を存分に見わたせるのである。これはこれで趣おもむきがあるとも言えるのだが。

　斉天大聖・孫そん悟ご空くうはつぶやいた。

「ふむん」

　季節は晩ばん冬とう、どの山にも真っ白な雪が降りつもっている。

　とはいえ、山頂付近にはなかなか常緑樹が多い。針しん葉ようのくすんだ緑と、寒さで縮こまった樹皮の茶色が雪の白さをそこそこ隠してしまっている。

「我としては、もうちっと『何なん人ぴとも分け入ることのできぬ深しん山ざん幽ゆう谷こく！』みたいな土地でも、不都合はないのじゃがのう」

荒ぶる戦いくさ神がみながら、仙せん道どうをも学んだ行ぎょう者じやとして宣言する。

若かりし頃は猿たちの王として花か果か山ざんで遊び、のちに霊れい台だい方ほう寸すん山ざんに二十年もこもって、修行三ざん昧まいの歳月を送った。それが神しん猴こう・孫悟空の前半生なのだ。

「里に近いせいか、妙に人間くさいしのう。人払いの結けつ界かいでも張るか、いっそあの山あたりに引っ越すか」

「あの山とは？　この辺はどこも山ばかりだぞ？」

隣にいた山やま吹ぶき色の巻き毛を持つ英雄――ペルセウスが首をかしげた。

斉天大聖は南南西を指さした。

「ほれ。なかなか威厳のあるたたずまいで、いい感じじゃぞ」

十数里ほど先に、日本国で最も峻しゅん険けんなる霊れい峰ほう・富士山がそびえている。

雪化粧をまとい、堂々たる美々しさだ。今いる山々よりも遥はるかな高みにあり、その頂いただきを大聖たちは見あげる形になっていた。

……ここは人界で言うところの奥おく多た摩ま山中。

東京なる都の西端、国くに境ざかいに位置するところらしい。

尚なお、すこし前に朝日が昇ってきたばかり。富士山はその光を浴びて、黄金と橙だいだいを混ぜたような輝きに満たされていた。

だが、ペルセウスはかぶりを振る。

「さすが斉天どの、比類なき山ごもりの達人らしい見解だ。ただ、すこし同意しづらい意見でもある。なにしろ私をミトラス神よ太陽の化け身しんよと崇あがめた民たみは、多くが街に住み、都に神殿を築いていた」

美び貌ぼうかつ、洒しゃ脱だつな雰囲気の色男はしれっと言う。

「そうである以上、やはり都の近くがしっくりくる。今いるあたりがちょうどいい案配だと思えるぞ、私には」

「なにやら含みのある言いぐさじゃのう」

「田舎いなか者ものへの皮肉と受け取るのなら、それは邪じや推すいだ。君のなかでくすぶる都みやこ人びとへの劣等感が勘かんちがいさせているだけだろう」

「などとのたまう時点で、語るに落ちるというやつじゃわい」

　英雄らしからぬ雑ぞう言ごんの応酬。が、そこに第三の英雄が交ざる兆ちよう候こうはない。斉天大聖とペルセウス、ちらりとそちらを見る。

　神しん猿えんハヌマーンは無言で剣と向き合っていた。

　白き雪上に豪壮なる大刀を突き刺して、それをじっと凝ぎよう視ししているのだ。

　救きゆう世せいの神しん刀とう。休眠した英雄ラーマチャンドラの分身というべき刀である。白銀の刀身は清せい冽れつなほどに神こう々ごうしく輝いている。

　だが、その栄はえある神刀の刃やいばに——黒い染しみが広がっていた。

　長大な刀身のなかばあたりから鍔つば元もとまでを、どす黒く濁にごらせている……。

「のう、猿仲間の同どう朋ぼうどの」

　黒い染みを見つめるハヌマーンへ、斉天大聖が声をかけた。

「もしかして影殿……弟君は何かおっしゃっておるのか？」

「先だって剣のなかに引きこもられてから、ずいぶんとおとなしくされているが」

　ペルセウスもやや皮肉っぽく言う。太陽の化身たる英雄にしてみれば、神刀に巣くう黒い染みなどという陰気な存在は、やや鬱うつ陶とうしいのかもしれない。

　一方、ラーマ王子の忠実なる副将は重々しく答えた。

「見けん……」

「ほほう」

「神殺しどもの同士討ちをまずは見守れと？」

「然しかり。ラクシュマナ王子は仰おおせだ。まずは見よ。そして備えよ。必ずや襲撃の好機はわれらのもとに転がりこんでくる、と」

　同じ猿つながりの斉天大聖より、白き猿神ハヌマーンは大おお柄がらだった。

　人間でいえば身長一八〇センチはあろう背せ丈たけ。その巨きよ軀くに革の鎧よろいをまとい、戦闘態勢をしっかりととのえている。

　そんなまとめ役へ、山吹色の髪の美男子は肩をすくめてみせた。

「了解だ、白しろ猿ざるどの。つまり、われらは英雄にあるまじき卑劣さで巣穴にひきこもり、神殺しどもが内うち輪わ揉もめで弱る瞬間を待ち受けるわけだ」

「腐ふ肉にくを喰いあさる鼠ねずみか山犬よろしく、地道かつ根暗にのう」

　くつくつと斉天大聖も笑う。やはり皮肉っぽい。

　が、反対はしない。ハヌマーンが所持する神具『鏃やじりの円盤』、その恩恵で二英雄は現うつし世よにとどまれているのである。その義理ゆえだった。

　対して、ハヌマーンは威厳をもって無言。

　また救世の神刀に広がる黒い染みは――英雄の雄お々おしさを嘲あざ笑わらうかのように刃の上でうねうねとうごめき、蠕ぜん動どうするのであった……。

2

「ふぅ。いいお湯です……」

　ちゃぽん。

　大浴場にて湯につかりながら、アイーシャはほっこりつぶやいた。

「昨日の夜はさんざんでしたけど、身も心も生きかえります……」

　ここの湯は地中一四〇〇メートルから汲くみあげた天然温泉らしい。

　アイーシャの肌と同じく、湯の方も褐かつ色しよくである。そのなかにのびやかな裸身を沈めて、ぐっと手足をのばしたりする。

「ここでばっちり体力を回復させて、またがんばらなくっちゃ」

　癒いやしの権けん能のうを持つ彼女にも、ひとつ制約がある。

　実は、アイーシャ自身の肉体を癒やすことはできないのである。

　そこで訪れたのが、この大浴場だった。檜ひのき造づくりの大きな湯船はプールさながらで、木の芳香をぷんぷんただよわせている。

　ここは東京お台だい場ば、お江戸温泉パークランド。

　外国人向けのＴＯＫＹＯガイドブックでも紹介される人気の観光地だ。

　アイーシャ以外にも外国人観光客とおぼしき来場者が多い。さすが都内でも最大規模を誇る入浴施設だった。

　……昨夜、苦心して〝魔の森〟を自力で脱出したあと。

　夜中で電車も動いていなかったが、アイーシャは通りがかったバイクの人物にヒッチハイクをお願いして、新しん橋ばしまで送ってもらえた。その後は終電を逃したジャパニーズ・サラリーマン向け

のカプセルホテルに一泊したのである。

　朝になるのを待って、バイト先の店長へ電話した。

　一身上の都合と説明して、しばらく休暇をもらうことができた。

　その後は近くにあるという築つき地じ魚うお河が岸しを訪ねて、午前中から牛丼とホルモン煮のセットでがっつり栄養補給。

　昼過ぎにお台場へ移動して、温泉を満喫しはじめたのだ。

「そうだわ。例のサービスも試してみなくっちゃ！」

　大浴場で体を清めたあとは、更衣室へ。

　しかし、メイド服と赤ずきん姿にもどるのはまだ早い。ピンクの浴衣ゆかたに着替えて、足湯スペースへと赴おもむく。

　童心に返って、褐色の素足で湯をばしゃばしゃと蹴ってみる。

　アイーシャはしみじみと感動を嚙みしめた。ひそかに持ちこんだＴＯＫＹＯガイドブック、ようやく役に立ったと。

「考えてみたら、東京に来てからはお屋敷にずっと閉じこもっていたり、メイドのおつとめをしてばっかりで、全然休めていなかったものね」

　もちろん、くつろぐだけではない。

　これはあくまで小休止。考えるべきことはいろいろあるのだ。

「わたくしたち神殺し同士で争う毎日なんて、もうたくさんだわ。これから本当にどうしましょうか……？」

　思し案あんしながら、今度は予約しておいたタイ式マッサージへ。

　疲れた体を揉もみほぐしてもらったあと、アイーシャはあらためて浴衣を脱いで、露ろ天てん風呂と超音波風呂、岩盤浴を楽しんだ。

　すっかりあたたまった体と心で、ついに温泉パークを出る。

　散歩ついでにぶらぶら歩いて海の方へ。東京湾を望む埠ふ頭とうの公園に着く頃には、もう方針も固まっていた。

「お兄さまやお姉さまは停戦の申し出に応じる気なんて全然なさそうだし。やっぱり、もっとお若い人たちと話し合いましょう！」

　拳こぶしをにぎりしめて、自分に言い聞かせる。

「世代が近いほど話も通じやすくなるはずだもの。お兄さま・お姉さまと無理して交渉するより、まずわたくしと歳としの近い方々を仲間にすべきよね。ええ。若い者は若い者同士で輪を作る方が自然な成り行きだわ！」

　ずいぶん陽ひが傾いていた。晩冬の早い夕暮れが迫りつつある。

　今いる埠頭の公園からは、東京湾に浮かぶ人工島——中央防波堤の埋め立て地が見てとれる。ほんの数百メートルしか離れていないのだ。

　ここから見る夕陽と夜景はきっと壮観だろう。

　しかし、アイーシャはべつの問題に気づき、ハッとした。

「今夜の晩ご飯は浅あさ草くさでスキヤキでもいただくとして、宿はどうしましょうか!?」

　メイド喫茶のバイト代は日払いで受け取っていた。

　おサイフをなくしたアイーシャへの、店長の厚意である。

　だが勤務日数はすくなかったので、軍資金は潤じゅん沢たくとは言えない。宿代はなるべく節約したいところだった。

　仲良くなった人の家にホームステイするか、安宿でも探すか。

　今も昔も時を駆けるバックパッカー生活は変わらない。アイーシャはいつものノリで算段をはじめた。

　尚——海のすぐそばなので、冬の潮風が冷たい。

　埠頭の公園の近くには、物流関係の倉庫やビルがおびただしいほどにある。

　早く温泉や駅のある方へもどろう。さっさと歩き出そうとした瞬間、アイーシャはいきなり呼び止められた。

「たぶんそうだろうとは想像していたが……予想どおりだ。ずいぶんと優雅に観光しているようだな、アイーシャ夫人」

「えっ!?」

「あなたはいつもそうだ。緊張感を長く持続させないし、できない。だが、だからこそいつでも自然体で行動できる……。よくも悪くもコインの裏表だな」

　振りかえると、そこに黒いジャケットの貴公子がいた。

　通称アレク。アレクサンドル・ガスコイン。

　黒王子の異名を持つ若きカンピオーネである。いつもは仏ぶつ頂ちよう面づらの多い彼だが、今は思し索さくにふける哲学青年という顔つきだった。

　解けない難問に直面した数学者よろしく、不可解そうにしている。

「あと、すこし意見を言わせてもらおう。おそらく一九世紀の生まれであろうあなたと俺たち十代・二十代のカンピオーネは……決して近い世代だとは思えないのだが。それとも、そう見なすべき特別な理由が――何かあるのか？」

「ふえっ!?」

　きわめて冷静に質問されて、アイーシャは狼ろう狽ばいした。

「わ、わたくしのひとりごとを聞いてらしたのですか!?」

「ああ。ここに到着したとき、ちょうどぶつぶつ言っていたのを聞くとはなしに」

　アイーシャの居場所を知って、駆けつけてきたのだろう。

　黒王子アレクは稲妻にも等しい快足の所有者。しかも、その気になれば神しん速そくを使うときに一切の音や気配すらも絶てるという。

　だが、その異能で知りえた重要機密をこうもあっさり口にして——

（あ、会うのは何年かぶりだけど、全然成長していないわっ!?）

　こういう青年なのである。

　今さらながらアイーシャは痛つう感かんした。顔だけなら抜群の二枚目。しかし女性のあつかいに難あり——というより、まるで全然ダメ。

　信じがたい無神経さで、女の聖域にずかずか土足で入りこんでくる。

　まあ、相手がヴォバンお兄さまやドニ青年なら、そもそも何も期待しないので気にもならないだろうが。

　しかし、アレク青年はこの顔で、あだなが王子なのである。

　万感の想おもいを込めて、アイーシャは叫んだ。

「ア、アレクさんってば男性として、本当に残念な方ですね！」

「……？　なぜそんな答えに？」

　まったく理解していない面おも持もちで、首をかしげてから。

　黒王子アレクはきりっと顔をひきしめた。

「まあ、いい。あらためて言おう。俺は野蛮な年寄りどもとはちがうから、あなたを葬り去るつもりなど特にないが——。それでも魔王内戦を戦う以上、アイーシャ夫人という存在は先に排除しておくべきだと思う」

「ええっ!?」

「抵抗などせず、すぐに降伏してもらえるとありがたい」

「わ、わたくしをどこかに監禁したり、拷ごう問もんするおつもりなのですか!?」

　囚とらわれの身となる己おのれを想像して、アイーシャは恐怖したのだが。

　アレクはあっさりと否定する。

「残念ながら、牢ろう獄ごくに閉じこめてもいつのまにか壁から抜け出していそうな女性だ。それ以上の措そ置ちが必要だろうな」

「そ、それ以上!?」

「妖精の通つう廊ろう……昔、俺もひどい目に遭あわされた〝あれ〟を開けてもらって、人類誕生より前の超古代に旅立ってもらうのもいい。それとも時代は越えないまま、南極大陸のぶあつい氷壁に押しこんで、冷凍睡眠コールドスリープしてもらうとか……」

　ひどいとアイーシャが文句を言おうとしたとき。

　口を開く前に、代わりに黒王子へ声をかける者が現れた。

「おまえもずいぶんとアイーシャさんを警戒するんだな、ガスコイン？」

　ついこの間、古代ガリアで数カ月間もいっしょに過ごした少年。

　草くさ薙なぎ護ご堂どう。ここ東京をホームとする若きカンピオーネは鋭くアレクをにらみながら、ゆっくりと近づいてくる。

　アイーシャは『びくっ』と身がまえてしまった。

　出会う神殺しがみんな自分を狙ねらってくるので、さすがに不安になったのだ。

　しかし、日本の少年は——

「俺としては、むしろアイーシャさんの意見に賛成なんだけど」

「ふん。話し合いとやらで英雄ラーマと対決する者を決めるつもりか？　賭けてもいいが絶対に話はまとまらないぞ」

「それには俺も同感だけどさ。でも、ほかにいい手があるだろ？」

　アイーシャたちのすぐそばまで来て、草薙少年はきっぱり言う。

「どうせならアイーシャさんにあの通廊を開けてもらって、ラーマと戦う代表以外のカンピオーネをまとめて——どこかの時代に送りこむんだ。そうすれば、残った代表が心置きなく戦える。ラーマは

盟めい約やくの大だい法ほうを使えなくなるからな」

「!?」

　アイーシャは身を乗り出した。たしかにそれなら上手うまくいきそうだ。

　しかし、アレクは苦虫をかみつぶしたような顔になり、物ものの憂うげにため息をついた。

「浅はかだな、草薙護堂」

「どうしてだよ？」

「おまえはふたつ、大事な要素を見落としている」

「ふたつもだって？」

「ああ。ひとつ目はそのうち気づくだろうから措おくとして……今は最大の要点にかぎって話をしよう。いいか？　カンピオーネ六人を別次元へ移動させる舵かじ取とりは——アイーシャ夫人に任まかせるんだぞ？　つつがなく成功すると思うか？」

　ふたつのポイントとやらの片方だけをアレクは口にしたのだが。

　聞いた瞬間、草薙護堂は「あー……」と納得してしまった。それを見て、聡そう明めいなる黒王子は遺い憾かんそうに続ける。

「夫人がどういう人間かは承知しているな？　おまけに、日頃から幸運と不幸のマイレージをたっぷり貯ためこんでいる女性だ。俺は——ここぞとばかりにとんでもないやらかしをされそうで怖い。とても信用する気にはなれん」

「…………」

「カンピオーネの時間移動を試すつもりなら、むしろアイーシャ夫人ひとりだけを旅立たせるべきだ。何かやらかすとしても、事態を混乱させるばかりの不確定要素を排除できることに変わりはないからな」

「言われてみると、その手もありって気がしてくるな……」

「く、草薙さん!?」

　愕がく然ぜんとするアイーシャの声に、草薙護堂は軽く苦笑いした。

　そのうえで大きく一歩を踏み出して、アレクの前に立ちはだかる。アイーシャを背後にかばい、黒王子の視線をシャットアウトするために。

「でも、たられぱで話を進める気はない。ガスコイン、この人を連れていくつもりだったら、先に俺を倒してから行けよ」

3

「今度はアレク王子が草くさ薙なぎ護ご堂どうの前に立ちはだかる、か……」

「気が強いうえに真ま面じ目めな方だから、早い段階で積極攻勢に出てくるとは思っていたけど。こういう予想の的中って、うれしくないものね」

　たびかさなる大敵との激突。

　感じ入るリリアナの隣で、エリカが肩をすくめている。

　カンピオーネ七名が集つどった一夜は明けて、二月最終週の金曜日。まだ陽ひが沈むまでは数時間あるという午後、お台だい場ばが新たな戦場となりつつあった。

「でも、アレク王子も護堂も理性的な方だし、いきなり戦闘にはならないかしら？」

　エリカは言った。

　海辺に建つ八階建てのビル屋上、その端っこから地上を監視している。

　数百メートル先の公園でカンピオーネ三名が懇こん談だん中だ。

視力強化の魔術を使っているので、三人の表情まで見てとれる。

　男ふたりは憮ぶ然ぜん、アイーシャ夫人はおろおろ。殺気立った雰囲気ではないのだが。

「エリカ。自分でも信じていない可能性を口にするのはよせ」

　今度はリリアナが言う。

「あのおふたり、息は合っても気はまるで合わない。そう言ったのはあなただぞ」

「なつかしい話ね、それ」

「この組み合わせになった時点で、開戦までのカウントダウンをすべきだ」

「新しん宿じゆくの後始末だけでもたいへんなのに、今日はお台場が惨劇の現場になるのかしら？」

「いっそ都民の一斉疎そ開かいを手配できないものか、提案したくなるな……」

　この辺は物流の倉庫ばかりなので、関係者以外の人間はすくない。

　しかし、すこし歩けば臨海副都心のにぎやかな地域である。商業・レジャーの施設がこれでもかと密集している。平日であっても、バカにならない人出だった。

　幸い、護堂たち三魔王の近くに人影はない。

　海に面した公園で、午後遅くの潮風を浴びながら立ち話をしている——。

「昨日の新宿で幸運だったのは、ヴォバン侯こう爵しやくにも羅ら濠ごう教主にも虐ぎやく殺さつをするつもりはなかったという点だな」

「人じん狼ろうや塩の像になった犠牲者を回収する甘あま粕かすさんたちは大変でしょうけどね」

「今日中に作業が終わるといいんだが」

　とはいえ、深夜だったおかげで犠牲者の数自体も抑おさえられた。

　最古参の神殺し三名が出くわした場所としては、むしろ新宿一帯の被害はきわめて軽微とよろこぶべきだろう。ただし。

「でも、新宿御ぎよ苑えんの森はもとどおりになるのかしら？」

　エリカは首をかしげた。

　羅濠教主の権けん能のうで〝魔の森〟に変へん貌ぼうした新宿御苑。

　エリカとリリアナは昨夜、その内部へ侵入した。

　道なき森では食人植物があちこちでうごめき、毒の瘴しよう気きや眩げん惑わくの香りなどが騎士たちの前進をさまたげる。地中からは時折、人の悲鳴にも似た叫びがひびいてきた。あの魔境でアイーシャ夫人を発見するのは、おそらく不可能だっただろう。

　が、捜索をあきらめる前に、森の外から草薙護堂が『剣』を振るった。

　木もく行ぎようの神しん精せい・太たい歳さい神しんを切り裂く言こと霊だまを――。

「護堂が『剣』を使ったら、食人植物やマンドラゴラみたいな魔法植物は呪力を失って、活動を止めたけど……過か剰じように育った木や草花はそのままだったわね」

「剣の言霊でも、植物の生長そのものを消すことはできなかったわけだな」

　リリアナもつぶやく。

「これはあくまで魔女の勘かんだが。公園だった頃の植生にもどるとしても、半年以上かかる気がするぞ。あるいは、永遠に準〝魔の森〟状態が続くのか……。いずれにせよ、あの公園はしばらく完全閉へい鎖さにすべきだろう」

「わたしたちも脱出するのに、すこし手間取ったものね」

「そんな森から、アイーシャ夫人はおひとりで脱出を果たすのだから——」

「本当にとんでもないわね、あの人たち……。ねえリリィ」

　ふたりの視線は地上に向けられ、そこでは黒王子アレクと草薙護堂が挑発的な言葉をぶつけ合っている。

　そこから目を離さないまま、エリカは思し案あん顔がおで言った。

「実は前々から思っていたのだけど。カンピオーネの権能が最大でどれくらいの威力を持つかは——正直な話、どれもたぶん不明よね？」

「なに？」

「身近なところで言うと護堂なんか、最強の火力である『白はく馬ば』がどれくらいの破壊をもたらせるのか、全然把握してないわよ」

「そういえば、『最大威力がどこまで出るかは怖いから試さない』と……」

「宣言していたでしょう？　そうなのよリリィ。カンピオーネの権能はよく言えば柔軟、飾らずに言えば適当すぎて、限界がどこにあるか——全て詳細不明なの。でも、いろいろ想像できるくらいの材料ならあるわ」

　カンピオーネとなった直後、神王メルカルトと対決した草薙護堂。

　そのとき何も考えずに『白馬』を使い、シチリア島の古都パレルモの港一帯をどろどろに融ゆう解かいさせるほどの火力を解きはなった。

　人口の多い都市部、そのどまんなかでの蛮ばん行こうである。

　さすがに〝火がついたら止まらない男〟も懲こりたらしく、以後は『白馬』の威力をしぼることに、常に意識的になった。直後のサ

ルバトーレ・ドニ戦では湖上のフェリー一隻のみを標的にしてみせたほどだ。

　しかし——逆に、威力を完全開放したことはいまだないのだ。

「陸りく鷹よう化かは前に言ったそうね。師し父ふは日本全土を腐ふ界かいに変えられるかもと。アイーシャ夫人は冬の権能で大だい飢き饉きんを起こすこともできるし、なにより歴史の破壊という最大の災さい厄やくをこの世にもたらせる怪物よ。護堂だって、実は『白馬』の焔ほのおで関東平野を焼け野原にするくらいできても——不思議じゃない。あれ、いわば太陽のかけらだもの」

「言われてみるとサルバトーレ卿きようも——」

　南なん欧おうの盟主〝剣の王〟。暗い面おも持もちでリリアナはその名を出した。

「剣で一刀両断するだけが取とり柄えのはずなのに、本当にそれだけなのか……疑わしい事件がいくつかあるな」

「あの方に関しては、アンドレア卿が情報隠いん蔽ぺいするのも大きいのでしょうけどね……」

　剣王の執しつ事じはとびきりの堅かた物ぶつである。

　イタリアおよび南欧魔術界の名誉のため、主あるじの不ふ祥しよう事じはすみやかに隠蔽し、外部に広まらないよう心を砕く日々なのだ。

「とにかく。こんな方々が全員集合しているのだから、東京都民の危険は筆ひつ舌ぜつに尽くしがたいレベルであるはずよ。今も目の前で進行中ですし」

「草薙護堂の指示どおり、まずはお台場から引きはなすか……」

「ええ」

　地上では、いよいよ草薙護堂がアクションを起こしていた。

　アイーシャ夫人を背にかばい、アレク王子の闘志を正面から受けとめる。一触即発を通り越して、もう導火線に火が着いている。

　騎士ふたりは目配せを交わし、うなずき合った。

　適当なタイミングでリリアナが三魔王のなかに飛び込み、得意の飛ひ翔しよう術じゆつで主の少年とアイーシャ夫人を連れ去る予定なのだ。なるべく人のいない場所へ——。

　そして、騎士たちが動き出そうとしたとき。

　ふたりは背後に気配を感じた。

　天から降ってきた羽毛さながらに音もなく、ふわっと何者かが着地したのだ。魔術で五官と感覚を強化してなければ、気づけなかっただろう。

　これだけの身軽さを会え得とくした達人といえば——

「ついにあなたの登場というわけね、陸鷹化。わたしたちを妨ぼう害がいするつもり？」

　振り向きもせずにエリカは言った。

4

「エリカ姐ねえさんは察しがよくて助かるな。余計な話をしなくて済む」

　生意気そうな少年の声が返ってきた。

　紅あかと青、ふたりの騎士がそちらに目を向ける。弱じやつ冠かん一四歳ながら天才的技ぎ倆りようを誇る香ホン港コン陸りく家けの御おん曹ぞう司し——陸りく鷹よう化かがにやっと笑っていた。

　今日は珍しく、藍あい色の功夫クンフー着を身につけている。



「悪いけど、師し父ふに命令されてるんだ。アイーシャ夫人はなるべく弱らせろ。心身共に追いつめて、できるかぎり楽をさせるなって」

「そのために、護堂の配下にも介入させるなというのね？」

「ご名答だ」

「ふん。教主らしくもない、姑こ息そくな指示だな」

　リリアナが挑発的に言う。だが、魔教教主の直じき弟子でしはなごやかだった。

「いつかも言ったろ。師父はケンカといくさの区別をしっかりつける人だって。鉄拳振るってのタイマン勝負だけじゃアイーシャ夫人はしとめられないと……認めているのさ。孫そん呉ごに司し馬ば法ほう、六りく韜とう三さん略りやく——兵へい法ほうのかぎりを尽くさないと殺やれない相手だって」

「わかる気がするわ」

　エリカがうなずいた。

「夫人はたしかにカンピオーネのなかでも、特に規格外の御方だから」

「人間としちゃあ、まあまあ結構いい人ではあるんだけどな。ま、そんなわけだから、今日の僕はひさびさに姐さんたちの仇かたき役やくだ」

　と言って、陸鷹化は武術の構えを——取らなかった。

　だらり。両腕を自じ堕だ落らくにだらりと下げて、ただ突っ立っているだけ。しかし、彼の目配りとたたずまいには、明らかな殺気と闘志が見てとれる。

「師父の厳命付きなんで、手心も加えない」

　とまで言うくせに、あいかわらず両腕は『だらり』だ。

　このまま戦うつもりなのだろう。さすが武ぶ林りんの麒き麟りん

児じ、立ち合いの最初から非凡な動きを見せてくれる。

　とことん相手をするしか、やりすごす法はなさそうだ。

　エリカは雌めす獅じ子しの微笑を雄お々おしく浮かべて、前に一歩踏み出す。

　その右手に忽こつ然ぜんと顕あらわれるのは細身の長剣。クオレ・ディ・レオーネの名を持つ剣だ。

「感謝しなさい。あなたのダンスパートナーに立候補してあげるわ」

「ひとりじゃ足りないよ。姐さんたち、ふたりまとめて面倒見てやるよ。リリアナ姐さんもつきあってほしいな」

「残念だが――わたしには行くところがある！」

　さっとリリアナは全力で駆け出した。

　ここは金髪のライバル兼盟めい友ゆうに託たくして、主あるじのもとへ急ぐため。しかし、その瞬間、武林の麒麟児はついに一撃を繰り出してきた！

「哈ハ！」

「まかせたわよ、リリィ！」

　きいん！　甲かん高だかい金属音がひびく。

　陸鷹化がだらりと下げていた腕――その右腕が鞭むちのようにしなり、走り出したリリアナめがけて何かを投げつけた。それをエリカが獅子の魔ま剣けんで打ち払う……。

　一瞬の攻防ゆえの、金属音。

　クオレ・ディ・レオーネは硬い何かをはじいたのだ。

　陸鷹化の武器をたしかめもせず、リリアナは駆けていく。剣の妖精とも言われるだけあって、すばらしく足が速い。身軽だ。

　ほとんど一瞬にして屋上の端まで走り、躊ちゅう躇ちょせず跳ぶ。

　ビルの屋上から、草薙護堂たちのいる地上へ。数百メートルの距離を一気に飛び越えにかかった！

　その一方で、エリカと陸鷹化の攻防は続く。

　ひゅんひゅんひゅんひゅんひゅんひゅん！

　陸鷹化が振りまわす武器は長さ一一〇センチほど。鞭に似ていた。空くうを切るたび、風切り音がする。九つの細い金属棒を鉄のリングでつなぎ合わせて、『関節のある鉄の鞭』にしているのだ。そして——

　鞭の先端に当たる棒は刃やいばとして研ぎすまされ、『槍やりの穂先』さながらであった。

　ひゅん！　ひゅん！

　こんな代しろ物もので、エリカの横っ面つらや体を斬きり裂こうとしている。

　繰りかえし弧を描く鞭もどきの先端、どうにか続けざまにかわすことができた。

「その武器、香港で見て以来だわ！　たしか九く節せつ鞭べんというのよね!?」

「一応、うちの一家のとっておきだ！」

　ひゅんひゅんひゅんひゅん！

　振りまわされる九節鞭。この武器を構成する九つの金属棒、それぞれ一五センチ程度。折りたためば、掌てのひらの内側に収まらないこともない。それを陸鷹化は奇術師顔負けの器用さで手の内に忍ばせて、奇襲を仕掛けてきた。

　掌しようの武術を得意とする陸鷹化が武器を使うなど、初めてだった。

「手心を加えないって、そういう意味!?」

「一応な。でも、べつに手を使わないってわけじゃないぜ」

陸鷹化がいきなり右手のスナップを利きかせた。九つの金属棒は一瞬にして折りたたまれ、少年の手のなかに隠れてしまう。そのうえで陸鷹化は踏みこんで——剣を持つエリカの腹めがけて、両手の掌を同時に撃ちこんできた！

右手にはもう、九節鞭はない。ポケットか袖そで口ぐちにでも隠したのだ！

「!?」

ぎりぎりでエリカはバックステップして、双もろ手ての掌しよう打だをなんとか避けた。

あんな双打を食らったら、全ての内臓が破裂しかねない。

今までの攻防で、九節鞭の動きに慣れつつあった。ならばと陸鷹化は手品まがいの器用さで武器を隠して、師父直じき伝でんの掌しよう法ほう——飛ひ鳳ほう十じゆう二に神しん掌しようを仕掛けてきた。奇計を以もつて、敵てき手しゆの意表を突く。まさに殺し技だ。

「羅ら濠ごう教主の武芸は、王者の技だと思っていたのだけど」

自分を落ち着かせる意味もふくめて、エリカはことさら優雅に言う。

「虚を突くような目くらましもきちんと教えておられるのね」

「実戦用の裏技ってやつだよ。表と裏、陰と陽、それぞれの道に精通しなければ天下の名人とは言えず。兵は王道にして詭き道どうなり。それが師父の持論なんでね。……あの人、見み栄えっ張ぱりだから人前では絶対に言わないけど」

「唯ゆい一いつの直弟子には、しっかりと薫くん陶とうされているわけ？」

「ああ。詭道や邪道も使いどころをまちがえなければ、役に立つ」

希求すべきはあくまで王道と承知しながら、現実ともしっかり向き合う。

師弟の実戦派らしい正直さには感心するが——

　エリカは深呼吸した。九節鞭。そのトリッキーな用法より武器自体に注意した方がよいのではと、警戒心が首をもたげてくる。

　九節鞭を構成するパーツ、全て艶つやのある漆しつ黒こくだった。

　黒こく曜よう石せきのごとき艶と輝きを放つ鋼鉄。呪術の気配をただよわせている。

　事実、槍の穂先に似た先端部分のすぐ下には『百ひやく邪じや斬ざん断だん』『万ばん精せい駆く逐ちく』の八字が筆文字もかくやというほど細く、彫刻されていた。

　これは道教方術タオ——中国魔術の経きよう文もんである。

「そういえば、香港陸家のとっておきとか言っていたわよね」

「ま、効き目のほどはすぐにわかるよ。姐さん自身が痛い目に遭あうからさ」

「あら？　今日は護堂に気を遣つかわなくてもいいの？　わたしやリリィに何かあったら、あの人が承知しないわよ？」

「だろうけど仕方ない。叔父おじ上うえも怖いけど、師父はもっと怖いんだ」

　なんとも小こ狡ずるいことを、麒麟児は諦てい念ねんまじりに言う。

　だが、それは才さい子しにありがちな油断や慢心とは無縁という意味でもあった。だから陸鷹化は恐ろしい。目的達成のためなら、躊躇なく狡猾な手管マリーシアを使ってくる。

「なら、わたしも遠慮なく行くわ——」

　思いかえせば数年前、香港で出会って以来の縁だ。

　己おのれを超えるかもしれない天才児・陸鷹化とひさしぶりの対決。一瞬たりとも気を抜けない決闘のはじまりだった。

　エリカは愛剣クオレ・ディ・レオーネの刀身を撫なでて、呪力を高めていった。

　一方、リリアナは屋上から軽やかに飛び降りて——

　その後の着地も華麗に決めた。

　数十メートルの高みからアスファルトの路上に降り立つときも『たっ』と地を蹴り、勢いを殺さず二度目の跳躍につなげたのである。

　妖精の身軽さでめざすは、主君・草薙護堂のもと。

　主とアイーシャ夫人を連れて、飛ひ翔しよう術じゆつを使う。人ひと気けのないところに連れていく。

　そのうえで魔王同士、全力の戦いをしてもらう——。そういうつもりだった。だが、リリアナはほんのしばらく走っただけで、急停止せざるを得なくなった。

　行く手にとんでもない人物が待っていたからだ。

「やあ。エリカではなく君が来たか。ひさしぶりと言うべきかな？」

　おだやかに声をかけてくる。一応、旧知の間あいだ柄がらだった。

　以前、草薙護堂らとイギリスへ遠征したとき、コーンウォールで一度だけ顔を合わせたことがあるのだ。

「すまんが、この先で我が主アレクサンドル・ガスコインと君の主君どのが会談中だ。邪魔者を通さないことが私の役目なのでね。もし前進を続けるつもりなら——私を倒してから行くといい」

　むしろ温厚な紳士の顔で、サー・アイスマンは通達してきた。

　四〇歳前後。気品あるスーツの上に灰色のコートを着て、身み繕づくろいに隙すきはない。黒王子に仕つかえる伝説の騎士だった。

「月並みな警告で申し訳ないが、許してくれ。エリカや君の先輩でもあるパオロあたりとちがって、気取った言いまわしに自信がないんだ」

聖騎士パオロ・ブランデッリが唯一、好敵手と認める男。

その名も《アイスマン》の偉大さ、リリアナもよく聞き知っている。

イタリアのミラノで育った魔術師の師し弟ていにとって、『氷のごとく冷静沈着な男』はライバルともども高名すぎる存在なのだ。

陸鷹化以上の大敵と出くわして、リリアナは激しく戦せん慄りつしていた。

たしか去年の一一月、護堂は黒王子アレクと対決した。

浮うき島しまと神しん祖そグィネヴィアを巡る事件。あの戦いを経へて、日英のカンピオーネはたがいの能力をおおよそ理解し合ったと言える。

あれから三カ月。ふたりは東京の地でふたたび対たい峙じしている。

「ふん。こんなに早く、また貴様とやり合う日が来るとはな」

「…………」

不機嫌そうなアレクと、無言の護ご堂どう。

ふたりの間には四、五メートルほどの距離がある。

だが、アレクは得意の神しん速そくで近づいてもこないし、遠ざかろうともしない。あの強気な男が再戦に臆おくしている——わけがない。ならば。

「早いってほどじゃないぞ、ガスコイン」

護堂は右手をぱっと開いた。その手のひらに武器が顕れる。

神刀・天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ。日本刀に酷こく似じした形だが、実はちがう。『蕨わらび手て刀とう』なる古代刀の再現であるらしい。刃の色は漆黒であった。

「俺の方はなんだかんだいそがしすぎて、あんたとのいざこざを忘

れかけていたからな。おかげで余計な芸を覚える羽目にもなった」

「…………」

　今度はアレクが無言になった。

　その間に、護堂は天あまの叢むら雲くもの剣つるぎの切っ先を——地面に突き刺した。

　日本最高峰の神刀はずぶずぶと土のなかに沈んでいき、やがて、刀身どころか柄つかまで完全に地中へ消えていく……。

　護堂は武器を捨てた、わけではない。

　すぐに地中から、強い呪力の波動が湧き出てくる。

　それはお台だい場ばの埋め立て地——そのほぼ全域に広まるほど強い波だった。

「……鋼はがねの軍神と大だい地ち母ぼ神しんの霊力を無理矢理に融合させる剣か。うわさどおり、ずいぶん物ぶつ騒そうな武器を手に入れたようだな」

「できれば使いたくないから、あんたも自重してくれよ」

「いざとなったら躊躇なく振りまわすくせに、俺に責任を押しつけるな」

　うそぶくアレクの全身から、火花がばちばちと放たれ出す。

　神速をオンにする前兆だった。しかし、ベイエリアの地下では天あまの叢むら雲くもの剣つるぎが秘法《黒の剣つるぎ》の発動準備に入っている。護堂は地中に念を送った。

「なに？」

　アレクが眉まゆをひそめた。

　神速で動き出す寸前、黒王子の足が大地に貼りついたからだろう。

　天あまの叢むら雲くもの剣つるぎの仕し業わざだった。《黒の剣》はまだ準備中だが、痩やせた青年ひとりを地面につなぎ止める

程度の重力は操れる。

「それも新しい特技のひとつか」

「まだまだこんなものじゃないって、あんたも知ってるんじゃないか？」

　ふてぶてしく微笑するアレクへ、護堂は牽けん制せいする。

　前回の対決から約三カ月。

　その間に、草くさ薙なぎ護堂は大きく変わった。女神キルケーとアテナのおかげで第三の権能《黒の剣》を得たうえに、さらに——

　耳の早いアレクはそれを知るからこそ、慎重なのだろう。

　用心深く護堂の力を見さだめて、戦況全てを一瞬にして〝逆転の一撃〟でひっくりかえすために。それこそが黒王子アレクのスタイルなのである。

　手の内を知る同士だからこそ、新たな武器が駆け引きの鍵かぎになる——。

　……尚、護堂の背中に隠れる貴婦人はといえば。

「ま、まあ。考えてみたら、これってうわさに聞く『わたくしを巡って、ふたりの殿との方がたが争っちゃう』悲劇的状況なのかしら……？」

　戦いとはまたべつの雑念ゆえに、心配げな顔をしているのだが。

　ともあれ、アレクは地に沈んでいった天あまの叢むら雲くもの劍つるぎ——その威力を警戒して、まだ積極的に仕掛けてこない。むしろ前回のように神速のトリックプレイをたたみかけられる方が、護堂としては厄やっ介かいだった。ありがたい。

　あとはハッタリが利きいているうちに、仲間が来てくれれば……。

「言っておくが、待ち人なら来ないぞ」

　あっさりとアレクが言った。

「俺の方にも連れがいてな。そちらがもてなしているはずだ。羅濠教主の部下たちもうろうろしていたようだから——まあ、貴様の仲間がすぐ到着することもないだろう」

「…………」

「このパーティー、出席者はカンピオーネのみとしよう。俺にとっては二対一と不利な状況になるが、べつにかまわん」

「……俺としては、会場自体を変えたい気持ちがあるんだけどな」

　ペースをにぎれたかと思った瞬間、やり返された。

　負け惜しみを言う護堂へ、黒王子アレクはにやりと笑いかけてくる。

「会場への不満とは贅ぜい沢たくなやつだ。まわりの人間を巻きこむのがイヤなら、そうならないように戦えばいいだけだろう？」

「もちろん、そうするさ」

　自分が牽制される番になって、護堂は舌打ちした。

　草薙護堂が最も苦手とするところを、やはり英国のカンピオーネは熟知している。そして、アレクの全身から細かな火花がバチバチと放たれはじめた。

　ふたたび神速を使うつもりなのだ。

　地中の天あまの叢むら雲くもの劒つるぎと黒の剱で、どこまで妨害できるか——。

「く、草薙さんっ。こうなったら、わたくしも協力しますので、いっしょにここから逃げ出しましょう！　なんと言っても二対一ですし！」

　事ここに至って、アイーシャが申し出てくれた。

　護堂はうなずいた。良きにつけ悪あしきにつけ予想外のことをしでかしそうな相棒だが、やはり彼女もカンピオーネ。うれしい味方ではあった——のだが。

かつん。かつん。かつん。かつん。

十数時間ぶりに、護堂たちは特徴的な足音をふたたび聞いた。

あの男が来たという証あかしだった。そういえば、陽ひがだいぶ傾いている。沈む夕陽が世界を血の色に染める――黄昏たそがれの時間がはじまっていた。

夜の暗くら闇やみほどではないが、曖あい昧まいな夕暮れはあの男に似つかわしい。

「特定の誰かと手を組む……というつもりはないのだがね」

黒き仮面から、気取ったテノールがこぼれてくる。

夕陽によって燃える焔ほのおの色となった街に、漆黒の衣ころもをまとう怪人が出現していた。

単なるコスチュームプレイの奇行とちがうのは、彼が衣装ごと〝別世界の空気〟をもこの場に持ちこんだからにほかならない。

「今この場においては、それも悪くないように思えるな。君たちはどうやら二対一の状況でことをはじめるつもりのようだが」

一歩、また一歩とブーツの足音高く、こちらへ近づいてくる。

そういえば、この公園にはずっと人が来ないままだ。偶然か、それとも何者かが仕組んだゆえの必然なのか。

ここには今、カンピオーネのみが集つどっている。そして。

「ジョン・プルートー・スミスが黒王子殿の側につくとなれば――二対二だ。なかなか盛りあがる勝負となりそうじゃないか？」

と、北米の神殺しが言い出したので、護堂は驚いた。

「ガスコインの方につく、だって？」

「私も彼と同意見だからだよ。魔王内戦において、アイーシャ夫人という予測不能の要素は早めに排除すべし」

ジョン・プルートー・スミスはあっさりと告げる。

　無論、黒衣黒面のカンピオーネが味方であると考えていたわけではない。だが、護堂はすくなからぬ衝撃を受けてしまった。

　なんとなく感じていた。この男と自分、不思議とうまが合うようだと。

　義姉あねと対決する可能性にくらべれば、魔王内戦でスミスと本格的に衝突する確率はだいぶ低そうだと——根拠もなく感じていたのである。しかし。

　それは思いちがいだったようだ。

　そして、もうひとり意外そうな人物がいた。

「俺と共闘するつもりなのか、貴様が？」

「そのとおりだとも、ガスコインくん。べつにおかしくはないだろう？　状況をもろもろ考慮していったら、君と同じ結論になっただけなのだから」

「ふん」

　アレクは胡う散さんくさげにスミスを見すえた。

「およそ額がく面めんどおりには受け取れない言葉だが、いいだろう。この場だけでも二対二にできるのは悪くない。しばらくの間、頼むぞ」

「はははは。これでなかなか信用に足ると思うのだがね」

　スミスの方は軽く受け流して、笑った。

「すくなくとも、君の発言と同じ程度には」

「世よ迷まい言ごとはよせ。仮装癖へきだけならまだしも、貴様のような行き当たりばったりの秘密主義者といっしょにされてたまるか」

　過去に何か行きちがいがあったのか。

　臆おく面めんもなく笑うスミスへ、とびきりのしかめ面つらでアレクは文句を言ってから——全身から火花をバチバチと放出させ

た。神速の発動だ。

「きゃああああっ⁉」

　わずかコンマ数秒後、悲鳴だけ残して、アイーシャ夫人の姿が消えた。

　アレクの方も消えていた。電でん光こう石せつ火かの速さでどこかへ駆け去ったのだろう。〝妖あやしき洞どう穴けつの女王〟と呼ばれた女性を拉ら致ちして。

　そして、彼女をかばうべきだった草薙護堂は——舌打ちしていた。

「物騒なものを日本に持ちこみやがって……」

「なに。税関を通らない入国方法さえ知っていれば、どうとでもできるものさ」

　スミスが鋼はがね色の魔ま銃じゆうを抜いて、護堂に銃口を突きつけていた。

　おかげで今回、黒の剱による吸引で、アレクの快足を呪じゆ縛ばくすることはかなわなかった。

「さあ、残り物同士で勝負をはじめるとしよ——」

「鋭く近寄り難がたき者よ、契約を破りし罪科に鉄てつ槌ついを下せ！」

　とっさに護堂は切り札を呼んだ。

　銃口を向けてきたスミスの足下で——アスファルトが漆黒の闇色に染まる。そこから全長十数メートルの巨獣が躍おどり出て、その鼻はな面づらで黒衣の怪人を天へと運ぶ！

　魁かい偉いなる破壊者の顕けん現げんだった。

「おお⁉」

「悪いが、アイーシャさんのところに行かなきゃいけないんでな！」

強烈な先制打でペースを一気につかむ。

そのつもりだった。しかし、敵もさるもの。直後、ジョン・プルートー・スミスは個性的すぎる姿を——一瞬で変化させていた。

『ふふふふ。こちらもあやまっておこうか。覚えておいてくれ、草薙護堂。こういう輩やからの相手は、私が最も得意とするところだと！』

スミスの大だい音おん声じようがひびきわたる。

地中より躍り出てきた『猪いのしし』が天へ突き上げた相手、もはや人間ではない。ウルスラグナ第五の化け身しんと同じほど巨大で、しかも翼を持つ怪物——漆黒の魔ま鳥ちようであった。

『冥めい王おうの名の下もとに命ず』

翼長は一〇メートルを超していた。

雄々しき猛もう禽きんである。巨大な嘴くちばしより言こと霊だまが吐き出される。

『天を落とす黒き翼を捧ささげよ。空よ、我がためだけに胸きよう襟きんを開け』

魔神テスカトリポカの化身・黒き魔鳥。

ジョン・プルートー・スミスの変身体のひとつでもあった。

草薙護堂が十の化身を使いこなすように、仮面のカンピオーネも特異な変身体に次々と変化していくのだという。

ある意味、好こう一いつ対ついの神殺し同士がついに激突を果たしたのである。

直後、お台場の大地がぐらぐらと揺れはじめた。

震度四にも相当する激しさ。もちろん自然現象などではない。冥王の名を持つ神殺しが魔鳥に変じるとき、大地がその代償を支払う取り決めなのだ。

5

　神しん速そくを発動させて、アイーシャ夫人に急接近する。

　あとは彼女の肩をがっちり片手でつかんで、そのまま駆け去る。要はひったくり強盗の要領で、アレクサンドル・ガスコインは拉ら致ちを敢かん行こうした。

『きゃあぁぁぁぁぁぁっ』

　アイーシャ夫人は悲鳴をあげていた。

　神速の使用中は音を聞き取りにくくなるため、やけにくぐもって聞こえる。

　が、かまわず疾走。標準体型の女性ひとりをつかんだままでも、神速の権けん能のうは我が身と荷物をおそろしく身軽にしてくれる。

　あっというまに二、三キロ走り抜け、きれいな並木道へやってきたとき。

（地震か？）

　ぐらりぐらりと、脈打つように大地が揺れはじめた。

　ということは――アレクはちらりと空を見た。案の定、漆しつ黒こくの巨鳥が何処いずこかへ飛んでいくところだった。ジョン・プルートー・スミスの変身体である。

　あの姿へ変わるための代償は『地震によって大地を傷つける』なのだ。

　日米の同族たちがいる方角を見れば、巨大な猪いのししまでが顕けん現げんしている。ロスから来た魔王はあれに対抗するため変身したらしい。まあ。

（やつの言う『共闘』がどこまで維持されるかは、怪あやしいものだがな）

　尚、神速を発動したアレクの目には、まわりで動くもの全てがスローモーションのように感じられる。

　魔鳥の飛ひ翔しようも、激しく揺れる大地も、慌あわてふためく群衆も。

　そう。お台だい場ばに集まった人々は突然の怪獣出現と地震発生に狼ろう狽ばいし、一斉に——かつ無む秩ちつ序じょに逃げだそうとしていた。

　このとき、アレクは夫人をつかんだまま駅前に来ていた。

　広すぎるほどの駐車場、バカバカしいほど大きな商業ビル、日本製アニメの有名ロボットを原寸大で再現した模型などが集まったエリアである。

　平日の夕方にもかかわらず、千人単位の群衆が集まってきていた。

　逃げ場を求めて、広い場所へと避難してきたのだろう。

　無論、アレクの神速をもってすれば、女性ひとりを荷物にしたままでも人々の間をすり抜けていくのは児じ戯ぎにも等しい。しかし。

　アイーシャ夫人がいきなり抵抗をはじめた。

『は、放してくださいアレクさん！』

　じたばた暴れる——のではなく、代わりに呪力を高めたのである。

　疾走するアレクの手から、夫人の体が即座に離れていく。

　そう。神速で動く者から逃れたいときは体力よりも呪力に頼るべきなのだ。呪法や神力にあらがうときの要領で。

　アレクは即座に足を止め、神速をオフにした。

　全てスローモーションで動いていた周囲も全て、通常の速さにもどる。

「あ痛いたたたたたたた……」

　当のアイーシャは、アスファルトの上へ投げ出されていた。

　高速移動するアレクから逃れた結果、自動車から飛び降りるのと同じことになり、路上に打ちつけられて、そのままゴロゴロ転がる羽目になったのである。

　それでも『痛いたた』で済むあたり、カンピオーネの頑丈さはデタラメだ。

「まあ、神速はあくまで『移動時間を短縮する力』。物理的なスピードを上げるわけではないから、飛び降りてもたかが知れている」

　夫人のもとへ歩みよりながら、アレクはつぶやいた。

「うわべはどうでも、さすが歴戦の古ふる強つわ者ものだな。なんだかんだで経験豊富だ。神速という能力の面倒さをよくわかっている」

「そ、そういう発言はよくないと思います、アレクさん！」

「……なぜだ？　あなたが歩んできたであろう戦歴キャリアに敬意を払っているだけだぞ？」

「それがいけないんですっ。アレクさんはわたくしを虐いじめて愉たのしいんですか⁉」

「特に虐めているというつもりはないんだが……。俺はただ、あなたを強制排除するという目的のために為すべきことを為しているのであって——」

「もうっ！　アレクさんのわからず屋！　あなたは乙女の敵です！」

　地面はまだぐらぐらと揺れている。震度三程度だろう。

　スミスの変身が起こした地震なので、もうすぐ沈静化するはずだった。

　そんななか、怒るアイーシャ夫人を相手に魔王にあるまじき威厳

に欠ける会話をしていたのだが。アレクはぞくりとした。

　全長一八メートルのロボット模型が鎮ちん座ざする広場——。

　ここに避難してきた群衆たち、数千人。

　周囲にひしめく彼らまでがなぜか縁もゆかりもないはずのアレクサンドル・ガスコインをにらみ、憎悪のまなざしを向けてくるのだ！

（あの美しい女性の——敵）

（あんなにかよわい人を強制排除する、だと？）

（乙女の敵。乙女の敵。乙女の敵。乙女の敵……）

（許せない！　あの御方を虐める男、絶対に絶対に許せない！）

　そうか！　気づいた瞬間、アレクはふたたび神速をオンにした。

　群衆の間をすり抜けるように疾走し、巨大商業ビルの壁を駆けあがって、その屋上まで一瞬にして移動を果たした。

　そして、ふたたび神速をオフにした直後。

「あの外人はどこだ!?」

「つかまえて土下座させろ！　謝罪だ！」

「そんなのじゃ生ぬるいわっ。警察に突き出す——ううん！　殺したっていいはず！」

「拷ごう問もんにかけろ！　生まれてきたことを後悔させろ！」

「殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！　殺せ！」

「あの男は乙女の敵。つまり人類の半分を敵に回した男。見つけ次第、この世から排除してしまえ！」

　人々の叫びは怒号となって、天にこだましている。

　ここにいる者の大半は日本人だ。平和な国でのんびりと、危機感とは無縁の生活を送ってきた人間ばかりのはず。

　にもかかわらず、この狂騒と殺意のほとばしり。

　すでに地震は終わっている。だが、人々はそんなことを気にもとめない――。

「アイーシャ夫人の魔ま性しよう、なんてすさまじさだ」

　群衆の怒りを見おろしながら、アレクは痛つう感かんした。

　魔王アイーシャの――魅み了りようの権能はここまであっさり、人々の気持ちを書きかえることができるのだ！　しかもほぼ一瞬で！

「さっき夫人が俺に示していた『遺い憾かんの意』。彼女はあんな調子だから、わかりづらかったが……かなり本気だったようだな」

　己おのれの行動の何を夫人は不快に感じたのか、そこはいまだ不明だが。

　アイーシャ夫人が本気の不快感を外に示しただけで、群衆はその意に同調し、妖あやしき貴婦人の信しん奉ぽう者しやとして行動を起こす……。

　アレクは『視力強化』の魔術を使った。より細密に地上を観察するためだ。

　直後、さらなる驚きよう愕がくに襲われた。

「あそこにいたぞ！」

「つかまえろ、急げ！」

　群衆の何人かがビルの屋上を指さしていた。

　ここに逃れていたアレクを視認し、発見したのである。ビルは二一階建て。高さは六、七十メートルはあるはずなのに、望遠鏡もなしに目視できたらしい。

「視力五・〇のベドウィンでも居合わせたのか……」

　もちろん、ちがう。アレクはすぐに悟った。

　自分を指さした連中、日本のあちこちの街にいそうな人々だっ

た。度の強そうなメガネをかけた者までいた。

　おそらく魅了の権能が――彼らを強化したのだ。

　ためしにカンピオーネの権能ではなく、『魔力検知』の術を使ってみた。

　眼下に群がる全ての人間たち、一千人以上はいよう群衆の全員から湧きあがる魔力の波動を感じとって、アレクはうなずいた。

「おまけに武装までととのえるか」

　群衆の何人かが街路樹の枝をへし折り、即席の棍こん棒ぼうにしていた。

　しかも、慣れた手つきで素振りする。武芸やスポーツとは縁のなさそうな小太りのサラリーマンが鋭いスイングで棍棒を『ぶん！』と振っている。達人というほどではないが、戦士として十分に訓練された動きだ。

　道ばたの石ころを拾い、投げる真ま似ねをする者もいた。

　もちろん石つぶてにして、アレクへ投げつけるためだろう。

「世界中どこにでもいる平凡な群衆をほんの数秒で魅了し、女王アイーシャのためなら死や殺さつ戮りくをもいとわない狂信者軍団に変える……。おそらくは視力をはじめとする身体能力、戦闘技術まで強化する――」

　恐るべし魅了の権能。もしかしたら、これが本来の用法なのかもしれない。

　アイーシャ夫人は生せい来らいの温和さゆえに、集団洗脳すら可能な力を『友達の輪を広げる』ためにしか使っていないだけで……。

　群衆たちは我先にとビルへ突入しはじめていた。

　屋上まで駆けのぼり、アレクを襲うためだろう。どうやらアイーシャ夫人は特に指示など出さず、怒れる群衆を野放しにしているようだ。

　この騒動に乗じて、アレクを抹まつ殺さつしに策を仕掛けてくるつもりか？

「まあ、それはまずないな。あのご婦人の性格を考えれば」

　つぶやいて、またも神速をオンにする。

　夫人の行方ゆくえを追うため、ひらりと屋上より飛び降りる。

　同時にアレクは念を送りはじめた。不測の事態が起きたときのために、前もって助手を配置しておいたのだ。

（これは――）

　魔鳥と化しても、ジョン・プルートー・スミスの意識は変わらない。

　夕ゆう闇やみに染まるお台場上空を飛ひ翔しようしながらも、ロスから来た神殺しとして考えを巡らす。今は草くさ薙なぎ護ご堂どうと対決中なのだ。

（思った以上に厄やつ介かいな魔ま獣じゆうだな、あの猪は）

　本来なら、翼も持たぬ地の獣けものなど、敵ではないはずなのだ。

　今のスミスは飛翔自在の大魔鳥。いくら巨大で獰どう猛もうだろうと、敵は地べたに貼りつく以外の選択肢を持たない猪。気の向くままに空から襲いかかり、鋭い鉤かぎ爪づめや嘴くちばしで切り刻んでやればいい。だというのに。

　ウルスラグナの化け身しんたる猛獣は何度も咆ほう哮こうを繰りかえす。

　そのたびに魁かい偉いなほど逞たくましい巨大猪の全身から、超音波が発射される。空から襲撃のチャンスをうかがっている魔鳥めがけて、必殺の砲弾として。

　オオオオオオオォォォォォォンンンンンッ！

オオオオオオオオォォォォォォォンンンンンッ！

オオオオオオオオオォォォォォォォォンンンンンンンッ！

狙いが正確なうえに連射可能。対空砲火としての威力は申し分ない。しかも、黒き大猪はお台場の埋め立て地を爆走し、建ちならぶ海運や物流の倉庫を薙なぎ倒しながらでも、超音波攻撃を易やす々やすと続けるのである。

空中を逃げまわりつつ、スミスは思う。

（弾たま切ぎれやスタミナ切れは期待できそうにないな）

直撃を喰らえば、この変身体でも全身の骨が砕け、墜おちるほかない。

スミス＝魔鳥は海風に乗るツバメのように上昇気流に乗り、風まかせに右へ左へとゆらゆら動き、ときに翼をたたんで自由落下するなどのアクロバティックな空中機動を重ねて、どうにか地上からの超音波砲撃をかわしていった。

（ならば）

クェェェェェエエエエエエエエエエエッ！

「煙吐く鏡、テスカトリポカの徴しるしよ！」

地上すれすれの低空、『猪』のすぐ頭上を横切りながら——魔鳥の嘴より言こと霊だまと——毒の煙を解き放つ。

魔性の毒どく霧ぎりだった。

地球最大の哺乳類シロナガスクジラでさえ、一瞬にして溶解させる。

しかし、これも『猪』は超音波で吹きとばし、まったくの無傷だった。

（このまま地上対空中の対決を続けても、攻略はむずかしい、か……）

見込みのない攻撃を繰りかえす愚ぐと、スミスは無縁である。

魔鳥の変身体で黄昏たそがれ時どきの空を切り裂くように飛びながら、格好の素材を見つけた。人間の姿であれば、仮面のなかで微笑したはずだ。

（ちょうどいい。あれを使うか）

あとでアニー・チャールトンが皮肉でも言ってきそうだな。

そんな予想をしつつ、スミス＝魔鳥はお台場の名所めがけて加速した。臨海副都心と江こう東とう区の若わか洲す――埋め立て地同士をつなぐ東京湾上の架かけ橋。

全長二・六キロ。幅二四メートル。東京ゲートブリッジというらしい。

このベイエリアの夜景スポットとしても有名なのだとか。

（まあ、アニー以外の誰かも文句を言うかもしれないが）

べつにいいだろう。世界の破滅にも発展しかねない大事件を解決するため、供く物もつに捧ささげるのだ。必要な犠牲。大事の前の小事。神々相手のゲームを戦うプレイヤーのひとりとして、スミスはごく淡々と賽さいを投げた。

「贄にえの美味なる肉、美味なる部位を喰らい……今こそ我は神となる！」

それは変身のための言霊だった。

黒い雲――雷雲があっというまに夕闇の空を覆おおいかくして、一筋の稲妻を放つ。これに撃たれた下げ界かいの大橋は、ほんの一瞬でまるごと焰ほのおにつつまれてしまう。

橋としては破格の全長二キロ越え。立派な巨大建造物だ。

スミス＝魔鳥は燃えあがるゲートブリッジへと、まっすぐ突っこんでいった。

「あいつ、躊ちゆう躇ちよなくやりやがった……」

　とんでもない光景を前にして、護堂はため息をついた。

　太平洋へとつながる東京湾の出入り口。

　そこに架かる東京ゲートブリッジが燃えている。全長二・六キロもの橋全体が豪快に炎上し、紅ぐ蓮れんの焔につつまれている。

　その劫ごう火かのなかより、立ち上がるものがいた。

　漆黒の巨人である。肌は闇色で、全身が逞しい。そして、服代わりにまとう長い布は紅あか・黄・黒の三色でにぎやかすぎるほどにいろどられている。

　ただ右足だけは、黒こく曜よう石せきで造られていた。

　何本もの槍やりを入れた木筒を背負い、七面鳥の羽根で頭を飾る。

　まさしく異相の巨人。変身体『大いなる魔術師』。

　ジョン・プルートー・スミスが最強の姿として誇る巨人は——意外なほどの身軽さで炎上するゲートブリッジより飛び降りた。

　そのまま海の上で仁王立ちしてみせる。海中に沈まない。

　体長十数メートル、重量も四、五〇トンはあろう巨人が……！

　これもとてつもない魔力の余よ録ろくなのだろう。スミスを〝神秘の巨人〟へと変へん貌ぼうさせるための贄として、東京ゲートブリッジは捧げられたのだ。

「仕方ない。あいつをぶちのめせ！」

　オオオオオオオォォォォォォォオオオオオオンンンンッ！

　護堂の指示は『猪』へ向けたものだった。

　ゲートブリッジのある若洲方面へ爆走中の巨獣は、嬉き々きとした咆哮で応えた。

　もともと『駅前にあったデカいやつを好きにしていいから来い！』と、有名モビルスーツの原寸大模型をイメージしながら召喚した。

しかし、獰どう猛もうなるウルスラグナ第五の化身は即座に目標変更を受け入れた。

どうせ壊すのなら、活きのいい方を選ぶケダモノなのだ。

かくして、数分後。

中央防波堤の埋め立て地――地図上ではお台場の中心でありながら、だだっ広い空き地が続くばかりのエリアで、巨獣と巨人は遭遇したのである。

オオオオォォォォォォォォォォォォォォオオオオオオンンンッ！

出会いがしらに『猪』が超音波を放つ。

この不可視の砲弾を『大いなる魔術師』はさっと左手を振って、払いのけてしまう。あの手に防御の魔力を宿らせたのだろう。

逆に巨人の方が背中より抜いた槍を投げつければ、『猪』はさっと横にかわす。

穂先が地面にぶつかるなり、魔神テスカトリポカの槍は爆発を起こし、紅蓮の焰と衝撃波をまき散らすのだが、まったくの無意味だった。

おたがいの飛び道具が不発に終わったあとは、取っ組み合いの肉弾戦――。

ガァァァァァァン！

肉と肉、大質量と大質量のぶつかり合う轟ごう音おんが埋め立て地にとどろく。

猛獣たる『猪』は得意の体当たりを仕掛け、鼻はな面づらの牙きばを突き立てようとするも、『大いなる魔術師』は卓越したレスリング選手よろしく巧たくみにいなし、敵の猪い首くびを脇わきに抱かかえこんで、ギロチンチョークに持ちこもうとする。それを『猪』が振りはらう……。

互角の格闘戦。

　護堂はその模様を埠ふ頭とうから見守ることにした。

　現地へ行くには、少々距離がありすぎる。走ってもすぐには到着できない。それよりもここから呪力と指示を送りこむべきだった。己の分身ともいえる『猪』がスミスの変身体に力負けしないように。

　だから、ここを離れて、アイーシャ夫人を探しにいく余裕はなかった。

　黒王子アレクによって連れ去られた最重要人物を——。

「エリカとリリアナ、それに万ま里り谷やなら、なんとかしてくれる……といいんだけどな」

　護堂は焦あせりを堪こらえながら、仲間たちの名をつぶやいた。

6

　ビルの屋上で対決するエリカと陸りく鷹よう化か。

　ふたりは熾し烈れつな応酬を繰りかえし、一進一退の戦況であった。

「その武器、相当な御ご利り益やくがあるみたいね！」

「ああ！　たしか駆く邪じや浄じよう鬼きの雷らい法ほうとか言ったかな？　とにかく、そんな名前の法ほう力りきがしこたま仕込んであるみたいだぜ！」

　エリカが試しに、魔術で呼びよせた金属粉ひとつかみを宙に撒まき——

　陸鷹化のまわりを満たした粉ふん塵じんに、すかさず『白熱』をかける。金属の温度を急上昇させる魔術だ。カッと光って、溶鉱炉並みの高温一五〇〇度に達した無数の金属粉により、武ぶ林りんの麒き麟りん児じは周囲の空気ごと灼やけ死ぬ——。

　そのはずだったのだが。

　ひゅんひゅんひゅんひゅんひゅん！

　例の九く節せつ鞭べんが振りまわされると、白熱した金属粉塵はただの粉にもどってしまう！

　ただの粉っぽい空気など苦にもせず、陸鷹化はにやっと嗤わらう。

「一応、我が家秘蔵のお宝で、雷らい法ほう鞭べんとかいうらしい」

「つまり、わたしの魔術を封じられると言いたいのかしら？」

「ご名答だ！」

　今度は陸鷹化がわずかなスナップで九節鞭をうねらせた。

　ただし、エリカを打ちすえはしなかった。ぽいっと雷法鞭を投げつけてきたのである。力を抜いて、たいして勢いもつけず。

　友人にリンゴかオレンジでも投げわたすように。だから意表を突かれた。

　エリカは迅じん速そく無む比ひなる必殺の攻撃を予想していたのだ。

「!?」

　出航の紙テープ投げよろしく、九つの節に分かれた金属棒はエリカの肩と胸にあたり、『かしゃん』と音を立てて、落ちていく。

　これで傷つくはずがない。だが、エリカは驚きよう愕がくした。

「なんですって!?」

　体に当たった雷法鞭は、肉体から魔術を消滅させた。

　エリカはもともと鉄を操る錬金術と、強化系の術を得意としている。この分野ではリリアナも遠くおよばない。自身の肉体には『身体強化』をかけて、身体能力を飛躍的に向上させていた。ダメージを軽減させる『護身』もだ。

　しかし、それらの術が——エリカの体から消えた。

　獅し子しの愛剣クオレ・ディ・レオーネをいつもより重く感じて、その違和感がエリカを思わず愕がく然ぜんとさせたとき。

　すかさず陸鷹化が右手の手しゅ刀とうを、まっすぐエリカの喉のど笛ぶえへ突き込んできた！

「ははははは！　隙すきだらけってやつかい、姐ねえさん!?」

「とんでもない。わたしとこの子を——甘く見ないことね！」

　どうにか首を横に振り、ぎりぎり手刀をかわした。

　陸鷹化の小指がわずかにかすり、エリカの白い首筋に横一文字の裂傷が生まれる。たしか飛ひ鳳ほう十じゅう二に神しん掌しようでいう『鳳ほう爪そう掏とう心しん』の技、さすがの威力だった。

　が、それをしのいだエリカは命じた。魔剣クオレ・ディ・レオーネへ。

「獅子王の剣よ、真の姿を顕あらわし——怒りを燃やせ！」

　エリカ愛用の武器は、うわべこそ『細身の剣』である。

　しかし、それはかりそめの姿だ。エリカが自みずからの訓練のため、もともと長大な剛剣であった獅子王の魔剣を細く変形させたのだ。こんなかぼそい武器でも激烈かつ重厚な斬ざん撃げき・刺し突とつを放てるようになってこそ、真の剣士であると。

　今、その封印を解かれて、クオレ・ディ・レオーネは大剣にもどった。

　幅広の片手剣ブロードソード。獅子の銘めいにふさわしき風格と刃の厚さ・長さを持つサイズへと。



「なに!?」

　めったにないことに、陸鷹化が驚愕していた。

　筋力の落ちたエリカが武器を重くする。意外だったのだろう。しかも、虚を突かれた魔教教主の直じき弟子でしめがけて、獅子の魔剣が襲いかかる！

「わ——っ!?　なんだよ、それは!?」

「ふふふふ！　怒れる獅子の牙きば、受けてごらんなさい！」

　剛剣クオレ・ディ・レオーネが——エリカの右腕を引きずりながら、陸鷹化めがけて自らの切っ先を突き刺しにいく。これを少年武ぶ侠きようがかわしても、同じ突きを二度、三度、四度と放ちつづける。獅子が獲え物ものに噛みつくように。

　エリカが剣を操っているのではない。

　魔剣は自らの意志で動き、陸鷹化を殺あやめようとしている。

　そして、魔剣を『剣の形をした魔法生物ゴーレム』に変化させたのは、主あるじたるエリカがかけた錬れん鉄てつ術じゆつの効果だった。

　剣の形をした獅子は、今度は横よこ殴なぐりの斬撃で陸鷹化を襲う。

　直後、魔剣の刃やいばが当たる前に——麒麟児はばたっと地面に倒れこんだ。

「くそっ。さすが姐さん、雌め狐ぎつねだな！」

　斬きられたのではなく、斬られる前に自ら地に伏す。

　背中を地面につけ、仰向けの体勢のまま——陸鷹化は独楽こまのように一回転し、その勢いによる左足のまわし蹴り！　剣を持つエリカの右手が狙ねらわれていた！

「!?」

　とっさにエリカは地を蹴り、愛剣ごと真後ろに跳んだ。

自力で剣を繰り出していたら、こんな動きは絶対に不可能だっただろう。このジャンプのおかげで陸鷹化の倒れながらの蹴りは空振りし、エリカの手は砕けずに済んだ。

しかし、地べたからの攻撃は終わらない。

天を仰いで倒れたままの陸鷹化。背中を軸じくにして、さっき以上に独楽らしく、高速の連続回転をスタートさせた。しかも、回りながら倒れながらのまわし蹴りを二発目、三発目、四発目、五発目と際限なく繰り出してくる！

今度もエリカは、うしろへ跳ぶしかなかった。

追撃を受けてはたまらないので、たっぷり五メートル以上も後方に。

足のとどかないところまで逃げられたのを見て、ようやく陸鷹化は独楽の真似をやめて、ゆっくりと立ち上がる。

「狗く走そう拳けんをやらされたのはひさしぶりだな……」

稀き代たいの天才児はにやっと面白そうにつぶやいた。

女王・羅ら翠すい蓮れんに学んだ少年に似つかわしいのは、天をめざす飛ひ鳳ほう・昇しよう竜りゆうの技だろう。

にもかかわらず、地を這はう奇き矯きような武技をみごとなキレで使ってみせた。ブラジルの格闘技カポエイラにも似ている。

が、それとは異なる武術をエリカは思い出した。

「たしか酔っぱらいのふりをして、倒れて戦う拳術が中国にはあるのよね？」

「ああ酔すい拳けんな。未成年なんでそっちは師し父ふも教えてく

れなかったよ。姐さんみたいに武林の外の人には、〝犬いぬ拳けん〟と言った方が通じやすいかもな。ま、ちっと見み栄ばえは悪いけど、酔拳ともども役に立つもんさ」

　陸鷹化はうそぶいた。

　地面に自ら倒れるような動きは派手だが、隙も多い。互角の攻防のときに軽々しく使うものではない。これらはそう、起死回生の反撃に出るとき、捨て身で繰り出すものだ。たとえば素手で武器を相手に戦うときなどに。

　剣や刀の斬撃を地に伏すことでかわし、そこから蹴り技等で逆襲する。

　酔拳も犬拳もそれをコンセプトにしているのだろう。

　やはり、今日の陸鷹化はいつもとちがう。自らを『狗いぬ』と呼ぶ秘拳まで惜しげもなく繰り出してくる。ということは、もしかしたら——

「まあ、いずれにしてもかんたんに攻略できる相手じゃないわね……。護堂のフォローやアイーシャ夫人の保護はリリィを当てにしたいところだけど」

　しかし、胸騒ぎがする。もし予想が正しければ。

　エリカよりも友人兼ライバルの方が今は遥はるかに危険なはずだった。

　格上の相手であるサー・アイスマンを前にして。

　リリアナ・クラニチャールは圧倒的劣勢に追いこまれていた。

　愛用する魔剣イル・マエストロはすでに封印を解き、サーベル状の刃に長い柄つかを加えて、薙なぎ刀なたの形にもどしてある。

　その柄で、アイスマンが振りまわす〝鉄の棍こん棒ぼう〟を懸けん命めいに受けとめようとした。

　さらに『聖なる殲せん滅めつの特権』を持つ聖騎士として、その

恩おん寵ちようを全て我が身の守護にまわし、個人用の護身結けつ界かいまでまとっていた。

　だというのに。

「く……っ！」

　キューで撞つかれたビリヤードの球さながらに、ふっとばされる。

　リリアナの華きや奢しやな体は六、七メートルも宙を飛び、建物の壁に激しく背中を打ちつけることになってしまった。口から血も吐く。

　聖なる加か護ごがなければ、内臓破裂で即死していたかもしれない。

「おお。一撃で決められなかったのはずいぶんひさしぶりだ。よく鍛きたえているようだな、クラニチャールくん」

　一方、サー・アイスマンはうれしそうにリリアナを誉ほめそやす。

　目まで細めている。後輩騎士の台たい頭とうをよろこぶ人格者の顔だ。しかし、そんな彼が両手で持つ武具は凶悪そのもの。長さ一メートル半ほどの樫かしの棒に『四角柱型の鉄製の重し』を取りつけたという代しろ物ものなのだ。

　先端の重しだけで、成人男性の頭と同じくらいに大きい――。

　これは『槌矛メイス』と呼ばれる。中世の騎士もしばしば同じ武器を使った。ただし、もっと小型なものが多かったが。

　鉄製の全身鎧よろいで刀剣をはじくような騎士に、殴り勝つための道具である。

　刃では斬り裂けない板ばん金きんでも、鋼鉄の重しでぐしゃりと潰つぶすことはできる。なかの肉体までも押しつぶし、さらに内臓をも衝撃で痛めつけることができる。優雅さには欠けるが無骨で恐ろしい。そういう武器だった。

　しかも――

この重厚なる槌矛に、アイスマンは『聖なる殲滅の特権』を注ぎこんでいる！

「では、二度目ではいかがかな？」

倒れたリリアナにすたすた歩みよって、槌矛を両手でスイング。

アイスマンの二撃目は武術よりも、ゴルフにむしろ近かった。地に倒れた標的をすくい上げるような打ちよう擲ちやくである。

リリアナはまたしても、薙刀の柄と結界で我が身を守るのみだった。

聖なる加護をわずかでも弱めたら最後、

「ぐ――くぅっ！」

今度も豪快に、一〇メートル以上もふっとばされた。

しかし、二度目である。途中でとんぼを切って、くるりと着地を決めた。体術と妖精のごとき軽やかさで知られるリリアナ・クラニチャールの意地だった。

きっとアイスマンをにらみつける。

オランダ生まれの伝説的聖騎士は、慈じ愛あいの微笑でうなずいてくれた。

心からリリアナの奮ふん闘とうをうれしく思っているのだろう。どうせ三撃目も手加減するつもりは皆かい無むであるくせに。

「おかしいほど攻撃に特化しているという話は本当だったんだな……」

リリアナはつぶやく。

彼の好敵手とされるエリカの叔父おじパオロ・ブランデッリは楯たても使い、むしろ防御に重きを置く戦士なのだが、サー・アイスマンは真ま逆ぎやくだという。しかし、それを押しとおせるだけの攻撃力が『氷の男』には備わっているのだ。

「アイーシャ夫人の救難、エリカの方が行ってくれているといいん

だが」

　こっそりとリリアナはつぶやく。

　敗北以外の形でアイスマンとの対決を早く終わらせるのは――無理。そうと悟って、盟めい友ゆうの紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソへ期待をかけたのだが。

（――さん。――さんっ。リリアナさん！）

（万ま里り谷や祐ゆ理りか!?）

　耳元でささやき声を聞いて、リリアナはハッとした。

　幽かくり世よから草くさ薙なぎ護ご堂どうの陣営を守護してくれる仲間、万里谷祐理が念を送ってきたのだ。

（はい。エリカさんにも余裕はないので、期待されるべきではないと思います）

（本当か？　じゃあ、わたしがここでアイスマン卿きょうを倒す以外に活路は――）

（ないのかもしれませんね……）

　精神感かん応のうの霊力による、万里谷祐理との交信。

　リリアナは魔女。並みの魔術師よりも遥はるかに感覚が鋭い。

　カンピオーネの超感覚で祐理の念を受け取る草薙護堂と同じ真似、実はリリアナも可能なのだ。エリカにはおそらく無理だろう。

（なら、自力でどうにかするしかないな。手伝いを頼めるか!?）

（おまかせください！）



　精神感応者との打ち合わせが済んだ瞬間、アイスマンが仕掛けてきた。

　さっと軽やかに距離を詰めて、大型槌矛メイスをフルスイング。剣で言えば真っ向唐から竹たけ割わりとなる大上段からの一撃だった。

　喰らえば死ぬしかない。その刹せつ那なだった。

　リリアナは言霊を吐き出した。

「神かみ産霊むすび、高たか御み産霊むすび、生いく産霊むすび、足たる産霊むすび、玉たま積つめ産霊むすび、大おお宮みや乃の売ひめ、大おお御膳都みけつの神かみ、事こと代しろ主ぬしの神々に祈り奉たてまつる。巫かんなぎの鎮しずめに応こたえて御み霊たまを和し、静せい謐ひつを顕し給たまえ……！」

「むっ⁉」

　わずかだが——今日、氷の男が初めて驚きを見せた。

　さすがだった。わかるのだ。リリアナのつむいだ言霊が欧おう州しゆうのそれではなく、日本の媛ひめ巫女みこのものだと。

　リリアナのまとう聖なる加護の青き光から、さらに白い輝きが放たれる。

　これこそ『御霊鎮め』の光こう明みようであった。

　万里谷祐理が女神キルケーの襲来時などに使ってみせた秘儀。呪力の昂たかぶりを和合の心で鎮め、神獣クラスの神力をも沈静化させる——。

　新たな白き防御の光は、稲妻のごとく振りおろされた超重量級の打撃をふんわりと受け止め、その威力をきれいに中和した！

「聖なる殺さつ戮りくの一撃をも吸いこむのか、これは⁉」

「日本の媛巫女が持つ和魂にぎみたま——だそうです、アイスマン卿！」

幽世にいる万里谷祐理が精神感応の霊力で送りこんでくれた。

リリアナは強い霊視力を持つ魔女であり、実は日本の媛巫女と同じ系けい譜ふに連なる女術師である。だからこそ高いレベルで魂たましいを同調できるし、秘儀をあずかることもできる。

それは守りを完全にまかせられるという意味であり——

「彼かの者ら、主しゆのモーセに命じるがごとくミデアンを攻め撃ち、婦女および童わらしを……生け捕りたり！　邑まち々まちと村を火にて灼やけり！」

満まんを持じして、リリアナは聖騎士の言霊のひとつを唱えた。

聖なる殲滅者の特権をもって、アイスマンに『禁きん足そく』を命じたのだ。地面のアスファルトより茨いばらの蔓つるがやにわに一三本も生えてきて、氷の男の両手両足や胴へ幾いく重えにも巻きつき、自由な身動きを封じてしまう。

祐理に守りをまかせ、この言霊に全力を注ぎこめたからこその大金星であった。

あとは——

「アルテミスの翼よ！」

飛ひ翔しよう術じゆつの言霊を唱えて、リリアナは飛び立つ。

青き光につつまれて夕闇の空に駆け上がり、そのままの速度で飛んでいく。とりあえずどこかの高台に陣取り、アイーシャ夫人とアレク王子の行方ゆくえを追うつもりだった。

「草薙護堂の方はどうしているか、わかるか？」

答えはない。リリアナはハッと気づいた。

幽世から現うつし世よ、世界をまたいで御霊鎮めの霊力を送りこむ。その負担は大きく、万里谷祐理は力を使い果たしたのだろう。今のような〝ズル〟はもうできない。

気を引き締めて、リリアナは飛翔を続けた——。

　そして、飛び立った青き光を見送って。

「やられた。認めようクラニチャール、私の敗北だ」

　アイスマンはすこしだけ悔くやしそうに言った。

　我が身を拘束する一三本もの茨、全て消し去るには少々時間がかかる。

　この戒いましめ、アイスマンの魔術をも封じこんでいる。すこし呪力をためてからでないと、除去の術も上手うまくかからない。

　まあ、ここで一休みするのもいいだろう。

「カンピオーネ方の品のない喧けん嘩か——いや、軽率すぎる暴走に当てられて、われら身内の者まで熱くなることもない」

　今の局面は内戦の序盤ないし、まだ中盤のはじめというところ。

　死力を尽くすべき場面とは言えない。黒王子アレクをはじめとするカンピオーネたちの未来を思い、アイスマンは軽く肩をすくめるのであった。

7

「うううううっ。またやってしまったわ……」

　東京では珍しい海辺の砂浜——お台だい場ばビーチを、とぼとぼと歩く。

　アイーシャ夫人であった。肉体よりも精神的な疲労と後悔のせいで、しょんぼりしてしまっている。

「みなさんをあんなになるまで追いこんでしまうなんて。ああっ。全てはわたくしの力がいけないのね……。あと可か憐れんさとか美び貌ぼうとか、人間的魅力とかがきっといろいろ悪いように作用し

て、ああいう災難を呼びこんだのだわ……」

　魅み了りようの権けん能のうによって、駅前にいた人々を暴徒に変えてしまった。

　あそこまでいったら最後、熱狂と暴走はかんたんには鎮しずめられない。張本人のアイーシャが姿を消す方が、かえって早く沈静化する。

　かくして、アイーシャはこっそり駅前から逃げたのである。

　熱狂した群衆のど真ん中からの逃走、ふつうはむずかしいものだが。彼女が『ご、ごめんなさいっ』とお願いすれば、すぐに道を空あけてもらえた。結果として、千人以上の暴徒を隠れみのにした形であった。アレク青年もアイーシャの行方ゆくえを見失ったはずだ。

　あとは今夜のねぐらと、今後の潜伏先をどうするか——。

「あら？」

　いきなり頭上が翳かげった。

　大きな何かが上に——アイーシャのすぐ真上にやってきたらしい。

　夕暮れ時の太陽がそのシルエットを地面に映している。かなり大きい。体のサイズは一〇メートル以上ありそうだ。上半身は成熟した女性のボディライン。腰のくびれもしっかりとあり、メリハリの利きいたスタイルである。ただし、下半身は蛇のようで、足首から先は魚の尾びれのようで。背中から生えているのは翼……？

「まさか⁉」

　ハッと頭上を仰ぎ見る。そこには異い形ぎようの魔神が浮いていた。

　上半身は美女。下半身は蛇。そして背には鳥の翼——。しかし、アイーシャと目が合った瞬間、魔神は『ひゅん！』と飛び去ってしまった。

「女神メリュジーヌ。俺に倒されたあと、配下になってくれた」

「アレクさん!?」

「戦うだけじゃない。魔術に占い、人捜しに失うせ物の捜索まで、なんでも頼みを聞いてくれる万能のアシスタントなんだが……シャイすぎるのが玉に瑕きずだ。顔を見られると、すぐにどこかへ消えてしまう」

　振り切ったはずのアレクが唐突に現れた。

　万能の案内人と神しん速そくを使った結果だろう。いきなりすぎる再会。驚くアイーシャへ、黒王子は淡々と言う。

「夫人。逃げたあなたもすぐに見つけてくれたぞ」

「わ、わたくしの方には、アレクさんとお話しする用なんて何もありませんよ！」

「俺にはある。さっきの話のつづき、ゆっくりさせてもらいたい」

「ひえええええっ」

　その瞬間だった。

　青い光が夕焼け空より降ってきて、アイーシャの前に降り立ったのは。

　リリアナ・クラニチャール――古代ガリアで苦楽を共にした少女の登場だった。神殺しふたりが何か言う前に、銀髪の女騎士はさっと駆けよってきた。

「草くさ薙なぎ護ご堂どうのもとにお連れします。よろしいですか!?」

「は、はい！」

　そのやりとりだけを経へて、ふたたび空に駆けあがる。

　アイーシャをしっかり抱きかかえて、リリアナがふたたび飛翔の術を使ったのだ。

「よ、よくわたくしの居場所がわかりましたね!?」

「当てずっぽうみたいなものです。アレク王子の魔神が現れたの

で、一か八かでそこに飛んだだけですから」

「それでも助かりましたっ。ありがとうございます！」

「礼を言われるほどのことでは。アレク王子に追いかけてこられたら、どうせ振り払えませんし。今はとにかく、我が主あるじと合流いたしましょう」

「お、おねがいします！　でも、草薙さんはどちらに？」

「ご覧いただければ……すぐにわかると思います」

「あ、本当だわ」

　リリアナの飛翔術によって、お台場の空の高みへ昇った。

　すでに夕ゆう闇やみの時刻は終わりかけており、夜のとばりと星々の燦きらめきが天空の支配者になりつつある。お台場と東京各地のライトアップもはじまっている。あと一時間もすれば、見み応ごたえのある夜景が楽しめることだろう。

　そして、ここから四、五キロ先の埋め立て地だろうか。

　手つかずの広大な空き地で、草薙護堂の顕けん身しんたる『猪いのしし』と、ジョン・プルートー・スミスの変身体『大いなる魔術師』がとっくみあいの真っ最中だった。

　黒いイノシシが突っこめば、闘牛士よろしく魔術師がひらりと避ける。

　魔術師が背中の槍やりを投げれば、イノシシは超音波を口から吐いて粉砕する。

　丁ちよう々ちよう発はつ止しの攻防が一進一退で続いている。おそらく草薙護堂もあの近くのどこかにいるのだろう。また、アイーシャは気づいた。

　青き光につつまれて、自分とリリアナは飛行している。

　そのやや後方にぴったりついてくる気配があった。見れば、細かな火花の集まりが追尾してくるのだ。おそらく、稲妻に化け身しんしたアレク王子だろう。

　あの姿になることで、彼は飛行まで可能になるらしいのだ――。

　ふたたび全員集合するときが近づいている。

「今度は……わたくしもがんばらなくっちゃ。草薙さんひとりだけを戦わせるわけにはいかないもの！」

　ぎゅっとこぶしをにぎりしめて、アイーシャは決意した。

「なに!?」

　護堂は目を疑った。

　広大な埋め立て地で互角の攻防を続けてきた『猪』とスミスの巨人。しかし、奇き天て烈れつな格好の『大いなる魔術師』がいきなり――消えた。

　なぜといぶかしんだ瞬間、護堂のすぐそばに青き光が降下してきた。

　リリアナとアイーシャ夫人の到着だった。

　直後に燦めく火花のかたまりも天から降ってきて、アレクの姿になる。それから、わずか十数秒後。例の足音がひびきわたった。

　かつん。かつん。かつん。かつん。かつん。

　いちばん最後に黒衣の魔王がゆっくり登場する。カンピオーネ集結の気配を察して、顔を出す気になったのだろう。

「ふたたび役者は揃そろい踏みし、新たな幕が上がる。そういう場面になったようだな」

「ふん。出番欲しさにやってきたというわけか」

「く、草薙さんっ。わたくしもできるかぎりのことをやらせていただきます！」

　ジョン・プルートー・スミスの気取った言いぐさ。

　眉まゆをひそめた黒王子アレクの皮肉。

　おそらく空から回まわりするであろうアイーシャ夫人の熱意。

　神殺し四名の再集合。そのために奔ほん走そうしてくれた騎士への感謝を込めて、護堂はうなずきかけた。リリアナは力強い表情でうなずき返してきた。まだまだ正念場はこれから。きっと、そう伝えたいのだ。

　そして、おもむろにスミスがつぶやく。

「ふむ。アイーシャ夫人はかようにおっしゃっているが……。草薙護堂、実質的には二対一の戦いになりそうだぞ」

　仮面の下の素顔も、表情も見えない。

　しかし、スミスの口調はどこかからかうようでもあった。

「早めの降伏を勧すすめる方が君たちのためではあるな。どう思う？」

「安心してくれ。そいつは余計な気き遣づかいだ」

　護堂はきっぱりと言った。

　実は——すこし前から、空気がひりついてくるのを感じていた。

　そろそろ例の切り札が忍耐しきれなくなっている。出番を待ち受ける焦しよう燥そうが外界ににじみ出ているのだろう。

　そして、この直後。ついに宵よい闇やみで覆おおいつくされた夜空に雷鳴がとどろく！

「ほう」

　アレクが目を瞠みはった。

「貴様の仕し業わざか、ジョン・プルートー・スミス？」

「いいや。ヴォバン侯こう爵しやくの到着でもないようだし、君の手品でもなさそうだな？」

　異状を楽しむようにスミスは悠ゆう然ぜんとつぶやき、アレクも微笑すら浮かべている。

　やはり両名ともカンピオーネ。死闘と危険の兆きざしを前にしても尚、この反応。本当にどうしようもないロクデナシどもだった。

　まあ――残念ながら、草薙護堂もその同族であるようなのだが……。

　その事実を証明すべく、三人のカンピオーネがいよいよ呪力を最大限に昂たかぶらせ、持てる権能を解きはなとうとしたとき。

「善ぜん果かいまだ熟せざる間は善人さえも悪に遭あう。善果の熟する時に至れば善に遭う」

「「「!?」」」

　おもむろにアイーシャ夫人が言こと霊だまを唱え、男三人はそろって驚きよう愕がくした。

「彼、我に報むくい来きたらざるべしと想おもいて、悪を軽んずるなかれ。彼、我に報い来きたらざるべしと想いて、善を軽んずるなかれ。水の点滴よく水みず瓶がめを満たす。愚ぐ者しやは悪にて満たし、賢人は善にて満たす……」

　もちろん、どれだけ温厚な女性に見えても所しよ詮せんはカンピオーネ。

　強大きわまりない権能をいきなり行使しはじめても、まったく不思議ではない。しかし、今の言霊は――なんともまずそうに思える。

　実際、宵闇の夜空がいきなり赤黒く変色した。

　黒みがかった赤とでもいうべき微妙な色合いが、護堂たちの頭上に広がっている。夜のカーテンに大量の生き血でもぶちまけたかのように。

　赤黒い空に昇った月はやけに冴さえ冴ざえとして、病的なほど白かった。

　とどめは風だ。ねっとりと肌に貼りつくような、ほのかに熱い風。それは強い呪力をはらんでおり、アイーシャ夫人の足下から湧きあがってくる！

　あからさまに不吉、不幸、不ふ祥しようの匂においがする。

　スミス、アレク、護堂の男三人はすばやく目配せを交わし合った。皆、同じ危き惧ぐを抱いているようだ。男組を代表して、護堂は声をかけた。

「なあアイーシャさん。今のって一体、何をやったんだ？」

「はい。草薙さんに加勢したくとも、わたくしには戦いに役立つ力などほとんどありませんから……代わりに、精一杯の幸運をお授けくださいとお祈りしたんです」

　胸の前で両腕を組み、アイーシャ夫人はおごそかにつぶやいた。

　まさしく聖女のたたずまい。だが、彼女は神に仕つかえる修道女などではなく、神をも殺あやめた魔王のひとりである。ということは。

　護堂はすぐに訊きいた。

「……そいつはアレか？　幸運と不運をどっちも呼ぶって権能？」

「そのとおりです。『起こりうる最大限の吉と凶』をわたくしたちにもたらし給たまえとご祈き禱とうしましたから、きっとものすごいことが起こるはずですよ！」

「ちょっと待った！　吉はともかく、凶の方はまずいだろ、絶対！」

「大丈夫ですよ、草薙さん！」

　アイーシャ夫人の笑顔、とびきり明朗だった。

　ただし、例の——夫人の足下から吹く風はずいぶんと強さを増していた。じっとりとした熱風はなんとも不快でたまらない。

「一見ものすごい不幸に見えても、逆にそういうところでとてつもない幸運が見つかるものなんですっ。今は神殺しのお二方に追われている真っ最中ですし。それくらいのリスクを背負って『よかった探し』をしないと、きっと間に合いませんよ！」

　リスクを恐れず、ギャンブルに持ち金の全部を突っこむ。

物言いこそ柔らかではあるが、アイーシャ夫人の言いぐさはいかれた勝負師／ギャンブラーのそれにほかならない。

話を聞いて、アレクとリリアナが絶句していた。

仮面で顔を隠しているが、スミスも同じ表情かもしれない。

そして、この瞬間。夫人の足下から湧き出てくる熱風がついに『ゴォォォォォォォ！』とうなりを上げるほどの強さに達する！

「く——っ！」

きっとアレクは神速を使おうとしたのだろう。

貴公子の全身にいくつもの火花がばちばちと走る。

しかし、不吉なる熱風が黒王子に不運をもたらしたのか。唐突に火花は消えて、アレクの神速発動が中断してしまう。直後だった。

護堂たちの立つ足下が——黒い空洞、『穴』と化した！

「わあああっ!?」

足場を失い、みんな穴に落ちていく。

アイーシャ夫人をふくめた四人のカンピオーネとリリアナ、みんなまとめて。

護堂はすでに体験済みだった。これは『妖精の通つう廊ろう』。妖あやしき洞どう穴けつの女王アイーシャ、その権能が生み出す——時空を越えるためのワープホールである。

ただし、創造者当人にもコントロールできない……。

尚、護堂が穴に呑のまれた瞬間。

黒き大猪は『オオオオォォォォォンンンッ！』と悲痛な叫びを残して、消滅した。活力と呪力の供給源である主あるじが地上からいなくなったせいだ。

まあ、主人たちの方が悲惨な目に遭いそうではあるのだが。

「くそっ。またあの通廊か！」

闇の空洞に落下しながらも、アレクが吐き捨てていた。

「俺たちを過去の世界にでも運んでいるのか!?」

「いや……。そこまでの強制力を持つ通廊ではないな。おそらくはもっと身近な移動先になるはずだ」

同じく落下中のジョン・プルートー・スミス、こちらは淡々とつぶやいている。

それは事実であったらしく、かつて通廊をくぐったときとちがい、ほんの十数秒で護堂たちの移動は終わってしまった。

妖しき闇のトンネルを抜けると、そこは——

「つ、冷たい？　何だよ、ここは!?」

「雪山——？　草薙護堂も、夫人も、ご無事ですか？」

「ひゃ、ひゃいいぃぃぃ」

地面に積もった雪をつかみ、護堂は驚いていた。

リリアナは主とその同盟者を気き遣づかいつつ、きょろきょろと周囲を見まわしている。アイーシャ夫人は幸運と不運をめいっぱい使ったせいか、目を回していた。

ここは月下の雪山、しかも山頂近くであるらしい。

なだらかな丘の上だった。雪をかぶった常緑樹の林もある。しかも、旧知の神々までが晩冬の星明かりを浴びて、魔王たちの出現に驚いている……。

「なんてところに運ばれてきたんだよ、俺たちは」

思わず護堂はぼやいた。

救きゆう世せいの神しん刀とうが突き刺さる場所こそ、この雪山の頂いただきだろう。

刃渡り一メートルを超す剛剣のそばには白はく猿えん神しんハヌマーンと英雄ペルセウス、斉せい天てん大たい聖せい・孫そん悟ご空くうがいる。

　ハヌマーンだけ表情が硬く、ペルセウスと斉天大聖の二神は啞あ然ぜんとしていた。

　そして、なぜか救世の神刀は汚れていた。刀身のなかばから鍔つば元もとまでがどす黒く濁にごり、ひどく不吉な印象であった。

第５章　吉凶に賭けよ

1

「すごいな。日本の携帯キャリアは」

　ひねくれ者の天才児にしては、素直な賞賛だった。

「こんな山奥でもかろうじて電波を拾えるよ。たいしたもんだ」

「言っておくけど。現在位置を割り出すくらい、わたしの術でだってできるわよ？　ここが現代の日本列島でまちがいないのなら」

　スマートフォンをいじる陸りく鷹よう化かへ、エリカは言った。

　しかし、欧おう州しゆうの魔術師ほど『古き良き時代』への愛着を持たない少年はそっけなく肩をすくめて、ぼそりと答える。

「ダウジングだか妙な風ふう水すい占いみたいなのをやるんだろ？　地図と位置情報を見るだけの方が手っ取り早くていいよ」

「じゃあ、調査結果を教えてもらえるかしら？」

「奥おく多た摩まの雲くも取とり山やまってところのどこか。たぶん中腹あたりだ。ぎりぎり東京都内……いや。この山、埼玉の秩ちち父ぶとかにもまたがってるみたいだなあ」

「あら。恵え那なさんの実家に近いのね」

　一五分前まで、ふたりは死闘のさなかであった。

　お台だい場ばの臨海副都心、某ぼうビル屋上で技を尽くしての攻防に興きようじていた。

　状況が状況である。近くの埋め立て地に怪獣まがいの大おお猪いのししや巨人が現れても、動じたりはしなかった。市民の暴動めいた叫び声がどこからか聞こえてきても。

　しかし——。

　天がいきなり赤黒く染まったときは、さすがに休戦した。

　そして、カンピオーネたちの顕けん身しんたる『大いなる魔術師』と『猪』がたてつづけに消滅したときは、何が起きたのかとふたりで現地に赴おもむいて——

　不気味な黒い穴を発見したのである。

　エリカと陸鷹化は躊ちゆう躇ちよなく穴へ飛びこみ、冬の雪山に運ばれた。

　どこにタイムスリップしたのかと周囲をうかがっていたら、陸鷹化が気づいたのだ。愛用のスマホが電話会社の電波を拾っていることに。

「……風に乗って、人の声が聞こえてくるな。何人も集まってる。頂上の方か？　たぶん、イベントの続きはあっちで絶賛開催中なんだろうよ」

「こちらでも空はあんな感じだものね」

　ふたりの頭上、雲取山の上空は赤黒く染まっている。

　内ない功こう修行の賜たま物もので並外れて聴覚の鋭い陸鷹化に報告されて、エリカは天を仰いだ。どす黒い鮮血色の夜空がとにかく不吉だった。

「でも、アイーシャ夫人の通つう廊ろうって時間旅行とかに使うんだろ？　だってのに、今回は日本国内への移動なんだな」

「偵てい察さつしてみれば理由はすぐにわかるわ。そのつもりで来たのでしょう？」

　不可解そうな陸鷹化へ、エリカは告げた。

　リリアナや祐ゆ理りほどの感覚はないが、彼女も傑けつ出しゆつした魔術師である。

　この山に只ただならぬ神しん気きが満ちていることには、とっくに気づいていた。おそらく、またしてもアイーシャ夫人はジョーカーを引き当てたのだ。『妖精の通廊』を本来の用途と異なる形で使うことによって（どうやったかは不明だが）。

　陸鷹化はハハッと笑い、ぶっきらぼうに言う。

「了解だ、エリカ姐ねえさん。おたがい、やるべき仕事にもどるとしよう。姐さんは当然、あっちに行くんだろ？」

「ええ。勝負の続きはいずれまた、別の機会でいいかしら？」

「まあね。決着をつけられなくて残念だよ」

「そういうことにしておきましょうか。あなたの手心に免じて、護ご堂どうには上手うまく言っておいてあげるわ。変な弁解はしなくても大丈夫よ」

「……何のことかな？」

　どきっとした顔で、陸鷹化がわざとらしく目をそらす。

　珍しく一四歳らしい驚きぶりだった。一方のエリカは貴婦人の余裕で微笑する。

「教主のご命令があったから、見るからに物ぶつ騒そうな技ばかり使ったのでしょうけど。すこし裏技にかたよりすぎだったと思うわ」

「…………」

「かえって、本当の得意技を使いたくない気持ちが透けて見えていたわよ？」

　兵は王道にして詭き道どうなり。たしかに真実なのだろう。

　しかし、両者を同等に見なすことは——やはり羅ら翠すい

蓮れんにふさわしくない。所しょ詮せん、詭道は王道に如しかずと喝かつ破ぱしてこそ、武ぶ林りんの至し尊そんではないか。

　となれば、その弟子もまた。

　エリカの洞どう察さつを裏づけるように、飛ひ鳳ほうの掌しょう法ほうはたいして使われなかった。

「雌め狐ぎつねの相手はだからイヤなんだ。じゃ、僕はいくぜ」

　ちっと舌打ちして、陸鷹化が走り出した。

　やわらかな雪上に足跡どころか、わずかなくぼみも残さない。体重の軽いウサギでも不可能な芸当、さすが軽けい功こう卓たく越えつの神技であった。

「あと、くわしくは言えないけどな。師し父ふはとんでもない用意をしているから、ちょっと気をつけた方がいい。叔父おじ上うえによろしくな！」

　餞せん別べつよろしく少年の声が降ってきたときには、もう背中は見えなくなっていた。

　エリカの方は山頂めざして、走り出した。草くさ薙なぎ護堂と銀髪の盟めい友ゆうはどうなったのか、一刻も早くたしかめるために。

　考えてみれば、時空旅行に使える通廊なのである。

　タイムトラベルの要素抜きに、世界のどこかへ護堂たちを連れていく程度、朝飯前であるはずなのだ。ただ、アイーシャ夫人の意志ではそういう〝まっとうな用途〟のためにコントロールできないだけで……。

しかし今回、『起こりうる最大限の吉と凶』が降りかかった結果。

神秘なる通廊はカンピオーネ四人をどこかの雪山に運び、ハヌマーン、斉せい天てん大たい聖せい、ペルセウス、そして救きゅう世せいの神しん刀とうと邂かい逅こうさせた。内うち輪わ揉もめの真っ最中に強敵どもの巣に飛び込むという展開、どこに吉の要素があるんだと問いつめたいところではあったが。

「は、はははは！」

護堂たちの顔を見るなり、ペルセウスが哄こう笑しょうした。

なんとも痛快そうで、古代ローマの太陽神らしい明るさに満ちている。

「これは参った。白ザルどののご提案どおり、神殺しどもが内輪揉めで弱るのをひたすら待つもくろみであったのに。やんぬるかな。期せずして彼か奴やつらの方から、われらの根城に乗りこんできたぞ！」

「おおよ。これでは計画が台なしじゃ！」

斉天大聖も相づちを打つ。なぜかいたずらっぽい顔つきだ。

「のう、白馬の英雄どの。かくなるうえは上々の計略を泣く泣くお蔵入りにして、力のかぎり神殺しどもを迎え撃とうではないか！」

「奇遇だな、斉天どの。私もそれしかないと考える」

「くくくく」

「ふふふふ」

わざとらしい掛け合いのあと、二ふた柱はしらの剣けん神しんは含み笑いを交わした。

一方、風の白はく猿えん神しんハヌマーンは憂ゆう鬱うつそうにため息をつき、両手の拳こぶしをにぎりしめた。拳法かボクシングよろしく、ファイティングポーズを取る。

そして、山頂に突き刺さる救世の神刀は——

ずぶずぶ地中へと沈んでいった。一時避難ということか。

（戦う仲間を置いていくなんて、あいつ……ラーマらしくないな）

ちらりと護堂は思ったものだが。

そんな感想を無視して、事は動きはじめる。

「ならば剣の盟友方。神殺しどもの始末を頼む」

「承知した、白ザルどの。太陽ミトラスの名を持つペルセウスにおまかせあれ」

「孫そんさまの武ぶ功こうも存分に披ひ露ろうして進ぜようぞ」

短く相談をまとめた剣神三み柱はしら——。

まず、斉天大聖・孫そん悟ご空くうがアレクサンドル・ガスコインめがけて躍おどりかかり、得意の如によ意い金きん箍こ棒ぼうを『ぶん！』と振りおろす。

対して、電でん光こう石せっ火かのカンピオーネは仏ぶっ頂ちょう面づらで舌打ちした。

「ちっ。面倒なやつに来られたものだな」

火花を散らして神しん速そく発動、さらに電光と化して空へ駆けあがる。

燦きらめく光となって天あま翔かけるとき、黒王子アレクは神速使用にともなう体の負担から解放されるという。うらやましいことに、護堂にはない能力だった。

空へ逃れたアレクをにらみ、斉天大聖も叫ぶ。

「くくく、猪ちょ口こ才ざいな。飛びっぷりで孫さまと張り合える者など天にも地にもおらぬ。雲よ、我のもとへ来い！」

忽こつ然ぜんと飛んできた小さな黄金の雲へ、とんぼを切って飛び乗る。

神じん通つう無限なる猴こう王おう、出陣の時であった。

　それを見て、カンピオーネの側にも飛び立った者がいる。

　ジョン・プルートー・スミスが変身および巨大化をまたたく間に終えて、ふたたび魔ま鳥ちようの姿で赤黒い空へ躍おどり出たのである。

「予定外の舞台だが――こうも役者が揃そろったあとでは、降りるのもつまらない。私も主役のひとりとして、目立たせていただこう！」

「よくまわる舌だな、黒き者よ」

　饒じよう舌ぜつなる冥めい王おうのテノールが鳴りひびく天空へ、白き風が駆けあがった。

　かつては『風の王』を名乗り、千年以上も無言をつらぬいた神しん猿えんハヌマーン。ラーマ王子の寡か黙もくなる忠臣が白き旋せん風ぷうさながらに魔鳥を追う――。

「……我に精気あらしめよ」

　ぼそっと唱えるなり、ハヌマーンの体が巨大化した。

　魔鳥に負けないほどの大きさ、同じほどの速さで夜空を駆けていく！

「黒い神殺しよ。その汚れた翼――」

　魔鳥を追いかけつつ、白き巨猿はうそぶく。

「私がひきちぎってくれよう。そなたは少々おしゃべりがすぎる」

「はははは！　それは失敬。私の台詞せりふまわしを録音してでも聞きたいというファンの諸君、地元には結構いるのだがね！」

　尚なお、スミスの変身による地震、今回は起こらなかった。

　あの男、しばらくの間は同じ変身体を何度も使いまわせるようなのだ。

　ともあれ、こうしてカンピオーネと鋼はがねの英雄は二組ずつ空に去った。残る剣神は山やま吹ぶき色の髪の快男児のみ――。

「ふふふふ。今度こそ雪せつ辱じよくの好機というわけかな？」

　見覚えのある長ちよう弓きゆうに矢をつがえ、ペルセウスがほくそ笑んでいた。

　無論、鏃やじりを向けられる標的は草薙護堂。去年の夏、この快活な英雄を倒した日本人カンピオーネである。

「覚えているだろうが、我が太陽の輝きは東方の軍神を超える。その優位を以もつて、今度こそ君を撃破してやろう」

「やりづらいだけで勝てないわけじゃない。あんたこそ覚えてるだろ？」

　護堂のうしろには庇ひ護ご対象と頼もしい仲間がいる。

　目を回したままのアイーシャ夫人と、それに寄りそうリリアナだ。

　銀髪の女騎士にトラブルメーカーをまかせて、自分もペルセウスと戦うべきか？　しかし、今は魔王内戦の途中。神様たちの相手で消しよう耗もうしてしまうのも避けたい……。

（――賭けよ）

　護堂はハッとした。耳元でささやき声を聞いたのだ。

（――その魔女めの吉凶に賭けよ。妾わらわの視みたところ、そやつはまだ吉も凶も使い切ってはおらぬ。吉凶いずれへ転ぶにせよ、最後まで吐き出させてしまえ）

　祐ゆ理りではない。だが、幽かくり世よにはまだ知ち己きがいる。

　決して仲間だの味方だのとは言えない。宿敵と呼ぶべきであり、あとはぎりぎり戦友などという関係が成り立ちそうな――智ち慧えの女神。

　しかし、これはいくらなんでも博ばく打ちすぎる助言ではないか？

（仮にここで大事を取っても、いずれまた足下をすくわれるであろ

う。その魔女の底力と愚おろかさを甘く見るな）

「……なるほどな」

　身もふたもなさすぎる言いぐさだが、納得できる。ならば——やるか。

　護堂は笑った。獰どう猛もうな形に唇くちびるがゆがむのを自覚した。

「悪いな、ペルセウス」

「ほう？」

「相手をしてやりたい気持ちはあるけど、今は結構いそがしい。でも、俺の代役もかなりの猛者もさだから、十分楽しめると思うぞ」

　自分がアイーシャ夫人の相手をするなら、ペルセウスの相手がべつに要いる。

　そして、当てはあった。この雪山がどこかは知らないが——東京二三区内から、さほど遠くではないらしい。お台場の埋め立て地で闘志をたぎらせていた切り札、早くも護堂に追いついてきたのである。

　あいつは稲妻と突撃の申し子、とにかく行動が速いのだ。

「……風よ、王の布ふ告こくを疾とく運べ」

「むっ!?」

　警戒するペルセウスを前にして、護堂はついに言こと霊だまを唱えた。

　新たなる力——白き槍の権能を解きはなつために。

「王として命じる。俺の槍として戦うために来い、ランスロット・デュ・ラック！」

旧主ラーマ王子の陣営を離れて、神殺しのもとに馳はせ参じた白き騎士。

それが『槍やりの神』ランスロット・デュ・ラック。

かつての敗北をあがなうため、彼女は草くさ薙なぎ護ご堂どうの守護騎士として愛馬を駆り、槍を振るうことに決めたのである。

「……が、なかなか出番がないものだな」

空をただよう浮き雲に同化して、ずっと主あるじを見守ってきた。

魔王内戦の開始直後から、ずっと。空に雲がないときは吹きゆく風と同化して、東京なる都の遥はるか上空や大海原の上を巡っていた。

そうやって、いわば『守護霊』としてひかえていたわけだ。

「いいかげん、待ちくたびれてしまったぞ。早く余の名を唱えよ。軍神ランスロット、我が槍として来きたれと早く」

苛いら立だちまじりに地上へ干かん渉しようするときもあった。草薙護堂のそばへ雷を落として、己おのれの存在を思い出させようとしたのだ。

そうこうするうちに、神殺したちは妙な穴に落ちて、何処いずこかへ飛んでいった。

ランスロットは風と同化して、主の気配を追った。東京の都より西に進み、雪山まで追いかけてきた。そして今、赤黒く染まった夜空の一隅で。

解禁の言こと霊だまを聞いたのである。

——王として命じる。

——俺の槍として戦うために来い、ランスロット・デュ・ラック！

「ふふふふ。このときを待ちわびていたぞ！」

　ずっと霊体のままだったのは、力を温存するため。

　ついに軍神ランスロットは実体化を果たし、空中より山頂を見おろす。古代ローマの英雄と草薙護堂が対たい峙じする場所だ。

　彼女は天あま翔かける白馬にまたがり、長ちよう槍そうをたずさえていた。

　鎖くさり帷子かたびらの上に胸当て、籠こ手てなどの白い具ぐ足そくをまとい、兜かぶとをかぶる。かつての面めん頬ぽおで顔を隠すものではない。女王の美び貌ぼうを衆しゆう目もくにさらすため、顔の部分は大きく開いている。

　アマゾネスのいくさ神として、完璧なる軍装であった。

　そして、白き女戦士の五体に——力が満ちていく。

　主君によって唱えられた解放の言霊。守護騎士たるランスロットにかつての呪力と権けん能のうを甦よみがえらせる源みなもとであった。

「ようやくそれを授けてくれたか」

　いよいよ戦場へ赴おもむくとき。

　討つべきは、眼下の山頂で気を吐く英雄ペルセウス。

　そのために許された時間は、人間どもの言葉でいう『一〇分程度』。

　……今のランスロットは草薙護堂の守護騎士として、彼の権能のひとつとなった。だからなのだろう。ある制限が生まれた。

　かつてのように軍神として戦う場合、一〇分程度しか肉体を維持できない——。

　だが、それで何の問題もなかった。

「ならば往ゆくぞ！」

　ランスロット・デュ・ラックは突撃と狂きよう奔ほんの白騎士。

幾日幾夜もいくさを長びかせる趣味はない。敵というものはただ一瞬・一撃・一合を以もつて打ち砕くべきなのだ。

槍の騎士とその愛馬は山頂めがけて、まっすぐ急降下をはじめた。

それは――大地にクレーターを穿うがつ隕石落としメテオストライクの一撃であった。ランスロットとその愛馬は白き流星と化した。

「く……っ！　君だったか、アマゾンの女王よ！」

「今こそ推すい参さんつかまつる！　余の槍を受け、塵ちりと消えよ！」

天空より、電光の速度で急降下しての槍突撃ランスチヤージ。

これをどうにか受けとめたペルセウスの手て際ぎわ、絶賛に値あたいする神技だった。

もとから持っていた長ちよう弓きゆうと、とっさに呼んだ大ぶりな偃えん月げつ刀とう――ふたつの武具を交差させた十字架で、槍の穂先を止めたのである。ペルセウスの喉のど元もとがあと数センチで突き破られるという、ぎりぎり寸前で。

しかし、槍と長弓と刀が激突した一点より――

白い光と衝撃波が巻きおこり、ペルセウスはおろか山頂までまるごと呑のみこむほどの大爆発となった。

これもまた、ランスロットの突撃が生む破壊力である。

そして、護堂はその惨状を空より見おろしていた。青き光につつまれて、リリアナといっしょに飛んでいる。飛ひ翔しよう術じゆつを使ってもらったのだ。

山頂を中心として、半径二、三〇〇メートルほどが爆発に呑まれている。

ランスロットの隕石落としメテオストライクにしては、被害範囲

がすばらしく小さいともいえる。

　槍の軍神なりに気を遣つかった――いや。おそらく攻撃の殺傷力をペルセウスひとりに集中させた結果かもしれない。

　うなずく護堂へ、リリアナが声をかけてきた。

「どうかしましたか、草薙護堂？」

「ああ、いや。『猪いのしし』みたいなやつがまたひとり増えたなあと思ってさ」

「増えたというより、類が友を呼んだのかもしれませんね」

「る、類友？」

「もちろん、あなたが『類』です。草薙護堂」

「…………」

　堅かた物ぶつに見えて、リリアナはときどき口が悪い。

　それを再確認しつつ、護堂は思い出した。そういえば昔、沙さ耶やの宮みや薫かおるにも似たようなことを言われたような――。

　身近にいる女性陣は手厳しい人材ぞろいなのだ。

　まあ、もうひとりの同行者は自分にも他人にも甘い性格だが。

　権能を暴走させた疲労のせいか、ついに居眠りをはじめたアイーシャ夫人。リリアナは彼女もいっしょに、空へ運んでくれたのだ。

「夫人はだいぶお疲れのようですね。わたしやカンピオーネの方々をまとめて転移させたのだから、当然ではありますが」

「いや、それがさ。余力を結構残しているらしいぞ、アイーシャさん」

　気遣わしげなリリアナへ、護堂は言った。

「どこかに降りてもらえるか？　その辺をどうにかしたいんで、ちょっと相談がある」

「はい――あっ」

　うなずいてすぐに、リリアナがハッとした。

「下に……下の山道にエリカがいます。さっき飛ばした『魔女の目』で視みえました。わたしたちを追ってきたのでしょう」

「じゃあ、そっちに行ってくれ。これから――いそがしくなるぞ」

　ペルセウスを今の一撃でしとめられたかは、まだ不明だが。

　ランスロットはあと一〇分弱、本気で戦える。その間に仕込みを済ませるべきだった。

「なるほどね」

　ついに合流を果たしたエリカは、考え深げにつぶやいた。

「護堂の考えにわたしも賛成だわ。現状のままバトルロイヤルを続けるより、どこかで『がつん！』と賭けに出た方が――たしかに得るものは大きそうよ」

「どのみち、危険尽くしであることに変わりはないしな」

　リリアナも消極的賛成という顔つきだ。

　まじめな性格上、出たとこ勝負の丁ちよう半はん博ばく打ちに抵抗があるのだろう。

　――ここは奥おく多た摩まの西端、雲くも取とり山やまだという。

　雪まで積もった二月の山中、しかも夜。骨まで凍こごえそうな寒さだ。まっとうな人間がうろつくような環境ではない。

　だが、そんなことは気にもとめず、護堂と騎士たちは相談中だった。

　尚、すこし離れた大木の幹に、アイーシャ夫人をもたれかけさせている。この状況でもすやすや眠っているのは、さすがと言うべきか。

　また雲取山の上空では、ロスから来た巨鳥とハヌマーンが空中戦の真っ最中だ。

　斉せい天てん大たい聖せいとアレクも速すぎて見えないだけで、近くでやり合っているはず。混こん沌とんとした諸要素を一刀両断すべく、護堂は申し出た。

「そういうわけだから、頼む。あの権能を——もともと持っていたのはどんな神様なのか、俺に教えてくれ。たぶん必要になる」

「「…………」」

「どうした、ふたりとも？」

「いえ。たしかに今までの経けい緯いを考えれば」

「あの権能のことをいちばんに警戒すべきだとは、わたしも思うわ。でも」

　リリアナもエリカも、ややあきれた様子で護堂に訴えた。

「我に知識を捧ささげよ。それをわたしとリリィのふたりを相手に、何のためらいもなく堂々と命令するなんてね」

「あなたの成長の速さには、本当に脱帽です」

「…………」

　仕方ないじゃないか。さんざんあれこれ繰りかえしてきたんだから。

　慨がい嘆たん調の騎士たちに、強く抗弁したい護堂だったが。たしかに、あまり堂々とおねがいする事案でもない。無言を貫つらぬくことにした。

　そんなダメ男を前にして、くすりとエリカが微笑む。

「ま、いいわ。あなたの正直さに免じて、できるかぎり協力してあげる。ただ、あの権能がいかなる神に由ゆ来らいするかは——はっきりわかっていないから、今すぐ教授するわけにもいかないのだけど」

「そうなのか!?」

「ええ。こういうときに頼れる祐ゆ理りはアストラル界で休養中だというし」

　となれば、残る霊視術の使い手はひとりしかいない。

　護堂とエリカはそろって彼女を見た。リリアナ・クラニチャールはたちまち赤面して、しどろもどろにつぶやく。

「ざ——残念ながら、わたしにもはっきり視えてはいないので……」

「リリアナでも駄目だったのか……」

「は、はい」

「そうか……」

　計画の頓とん挫ざを悟って、護堂は肩を落とした。

　気まずさからか、リリアナが目をそらす。そして、そんな旧友兼ライバルを紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソと呼ばれる少女はじっと見つめて——おもむろにこんなことを言い出した。

「じゃあ仕方ないわね。わたしにまかせて頂ちよう戴だい、護堂」

「えっ？　大丈夫なのか!?」

「むずかしいでしょうけど、どうにかね。こっちに来てくれる？」

「ああ！」

　エリカが木立のなかに入っていく。

　誘われるまま護堂もそのあとを追う。リリアナは「あ……」と何かを言いかけて、ひきとめるように右手をのばしたが、結局それだけだった。

　雪を踏みしめながら先へ進み、とある木陰でエリカに追いついた。

　すると、いきなり抱きつかれた。

　女王のような風格の割に、決して大おお柄がらではないミラノ生まれの少女。衣服だけでなく、そのすばらしい肢し体たいまで冷え切っている。

　すこしでもあたためてやろうと、護堂はぎゅっと抱きかえした。

　気心の知れた相手との熱烈な抱ほう擁ようが心地いい。体だけでなく、心にもぬくもりがあふれてくる。たぶんエリカも同じだろう。

　それを裏付けるように、金髪の自称愛人はあでやかに微笑みかけてくる。

「いい、護堂？　問題の権能……あれはつまり『此方こなたから彼方かなたへとつながる通路』を造る能力になるわけよね？」

「ああ」

　ふたりの唇くちびるが自然と合わさる。キスのはじまりだった。

「でも、その通路をくぐる人々に混乱と困難までもたらしてしまう。だから、わたしたち魔術師は推測しているの。あれはもともとトリックスター――いたずら者の神が所有していた権能じゃないのかって」

「トリックスター？　何だ、それ？」

「そのイタズラで世界に混乱をもたらす神々。神界の鼻つまみ者たち。彼らは神しん出しゆつ鬼き没ぼつで、神界・人界・冥めい界かいの垣根を越えて大移動することも珍しくないわ。そこから転じて、旅人や行商人の守り神にもされる……」

「旅の神様か」

　言葉を交わしながら、ふたりは合間合間に口づけもはさむ。

　護堂はエリカの口を吸い、エリカも同じ行為で護堂に応こたえる。たがいの舌と唾だ液えき、情愛までしっとりと交わらせる。

　何度も繰りかえしてきた儀式だった。しかし。

　今回は――口づけを通して、伝えられるものがない。

　驚いて、護堂はまじまじとエリカを見つめた。金髪の悪魔はくすりと笑い、唇に人差し指を当てて、いたずらっぽく見つめ返してくる。

　なるほど。護堂は短く笑った。

　これだけで意図が呑のみこめるのは、つきあいの深さゆえか――。

「とにかくね、護堂。トリックスターに分類される神々は決して多数派ではないの。世界各地の神話体系それぞれのなかに、一ひと柱はしらか二ふた柱はしらいればいい方。たとえば、北ほく欧おう神話のロキは典型的なトリックスター、アスガルドきってのいたずら者よ」

「それ、俺でも聞いたことあるな」

「ギリシア神話のヘルメスもそう。彼は知識と商業と魔術の神でもあるから、その神性はより複雑になるのだけど。変わり種だと、アフリカ――ナイル川上流で信仰された不死王ニイカングの息子、ダック王子。彼は稀き代たいの英雄でいたずら好き、しかも往ゆく先々で殺さつ戮りくをほしいままにする血なまぐさい暴君でもあったのよ」

「そんなやつまでいるのかよ」

「その辺を思いつくかぎり押さえて、護堂に教えてあげる」

「すくないといっても、そこそこの数にはなりそうだな……。時間がかかるだろ」

「いいじゃない。儀式の間、ふたりでたっぷり愉たのしめるわけだし」

「べつに愉しむ時間ってわけじゃないぞ」

「あら？　わたしはいつだって護堂とのキスをめいっぱい愉しむつもりよ？　で、あなたにそういう気持ちがかけらもないというなら……草薙護堂は大うそつきよね」

「じゃあ……正直者でいいかもな」

「ふふっ。それでこそわたしの愛いとしい人よ。……んっ。もう。そんなやんちゃまでして、護堂こそイタズラが過ぎるんじゃないかしら」

　耳たぶを吸い、首筋に舌を這はわせていたら、甘やかに叱しかられた。

　しかし、狼ろう藉ぜきをはたらいた護堂の頭。それをエリカは両手で抱かかえこみ、愛情と共に胸元へ引きよせて、日本男児の黒髪にキスしてくる。

　なんとも甘い時間をふたりで共有し、接せつ吻ぷんその他を繰りかえす。

　しかし、ときどき共犯者同士の目配せを交わしつつ、ちらちら周囲をうかがっていたら——ついに来た。

「お、お待ちください」

　ちょうどエリカと唇を離したところで、取りすがられた。

　思いつめた表情のリリアナが木陰までやってきて、護堂の二の腕をつかんだのだ。

「エリカとばかり、そんなことをしないでください……。わたしひとりを除のけ者にされては、い、イヤです……」

「リリアナもエリカみたいにしてくれるのか？」

「は、はい——いえ。実はその、本当のところを白状しますと……」

「きっとリリィは視みえていたんじゃないかしら？　護堂が知るべき神の御み名なを」

　びくっ。銀髪の東とう欧おう系少女は華きや奢しやな肢体をこわばらせた。

　表情も気まずそうだ。その反応だけで、答えはもう明らかだった。

「どうして正直に言ってくれなかったんだよ？」

「あ……あのときの流れですと、エリカの前で知識をお教えすることになると思い、すぐに言い出せなかったんです。その——恥ずかしくて」

　リリアナは心の底から困った顔で、うつむいてしまった。

　予想外の告白である。エリカは「まあ」とつぶやき、護堂の方は「えっ？」と首をかしげてしまった。そこを今さら気にするのかと。

　そちら方面では、みんなで箍たがをゆるめてきたじゃないか。

　リリアナも同じことに思い至ったらしく、あわてて言いわけする。

「も、もちろん今までだってエリカの前でというのはありましたが、で、でも、万ま里り谷や祐理や清せい秋しゆう院いん恵え那ながいましたし！　ふたりよりも三人、四人いっしょの方が心も大きくなるという見方だってあるはず——」

　そこまで言って、リリアナは『ハッ』と口をつぐんだ。

　人数は多い方が云うん々ぬん。だいぶ倒とう錯さく的なことを口走っていたと自覚したようだ。そして、やはり幼なじみでライバルというだけあって、紅き悪魔デイアヴォロ・ロツソの存在はリリアナのなかで特別なのかもしれない。だから反射的に〝エリカとふたりで〟を避けたのか。

　ともかく、妖精のごとき少女を引きよせて、護堂は唇をふさいだ。

「あ……っ」

「変なことは気にしなくていい。いつもどおり、俺に力を貸してくれ」

「そうよ。わたしだって、リリィとふたりで護堂とこうするのは初めてで——どきどきしているんだから。硬くならないで」

「え、エリカ……」

　背後から金髪の幼なじみに抱きしめられて、リリアナが陶とう然

ぜんとささやく。

　その唇を正面から奪うのは、もちろん護堂だった。見ようによっては『エリカとふたりで内気な女騎士を籠ろう絡らくしにかかる』構図となるかもしれないが……。

　護堂は雑念を捨て、リリアナとのキスを深める。

　さっきエリカとしたように、舌と唾液まで交換するような口づけを繰りかえす。

「い、イタズラを好むトリックスターだけが——」

　キスの合間に、リリアナがささやきだした。

「世界に混乱をもたらすわけではありません。もっと切実な理由で、人や神の運命を狂わせるトラブルメーカーもいます……。あ、あと、エリカの挙げたトリックスターたちの神話には、いずれも『時間』という要素が欠けています……」

　あの権能の源となった神。

　リリアナが霊視していた神格の知識、言葉として耳から、教授魔術によるイメージとして口から流れこんでくる。

　さっきのエリカとの行為では、これがなかった。

　銀髪の幼なじみは真実を知っていると気づき、紅き悪魔デイアヴォオロ・ロツソは罠わなにかけたのだ。

　護堂とふたりきりで教授の儀式を愉しんでいると見せかけて、リリアナを挑発。真実を自ら告白しにくるよう仕向けた——。

　それにしても。

　今、エリカが抱きすくめるリリアナと口づけを繰りかえしている。

　その合間にときどき、エリカともキスを交わしたりもしている。なんとも倒錯的な状況であった。そして、愛人といっしょに銀髪の幼なじみを新たな地平に誘っているという行為が気に入ったのか、エリカはひどく活いき活きとして美しかった。

　そんな相棒を見て、実は護堂自身も昂たかぶるものを感じていた——。

3

　うっすらと話し声が聞こえる。

　まだアイーシャは目覚めきっていない。意識も体も覚醒へと向かっているのだが、まだ本格的に動き出す前なのだ。もうすこしだけ寝かせてムニャムニャと思いながら、すぐそばで交わされる会話を聞くとはなしに聞く。

　——まだのんきに寝ているな。いい気なもんだよ。

　——護ご堂どうを信じ切っておられるのよ。ふふっ。こちらの魂こん胆たんにも気づかないで。

　——利用価値がある間はともかく……軍神たちまで出てきたのなら、ただの足手まといでしかありません。進言いたします、我が王よ。

　——なんだ、リリアナ？

　——そろそろ切り時ではないかと。ご決断ください。

　——よかったら、わたしが始末しましょうか？

　——いや、エリカ。俺がやる。たいした手間でもないだろうしな。

　——お急ぎください、草くさ薙なぎ護堂。胸騒ぎがします。ほかのカンピオーネや軍神たちが……そろそろもどってくるのかもしれません……。

　——じゃあ、さっそく殺やるか。

「み、みなさんっ。そろいもそろって悪役みたいにひどいことをおっしゃって、どういうおつもりなんですか!?」

　叫びながら、アイーシャは『がばっ！』と跳ね起きた。

　冬の雪山である。木の幹にもたれかかり、今まで居眠りしていたのだ。

　すぐそばにはエリカ・ブランデッリがいる。リリアナ・クラニチャールがいる。古代ガリアでもいっしょに苦労した女の子たちだ。だというのに。

　女子ふたり、やけに冷たいまなざしをアイーシャに向けていた。

　そして神殺し仲間・草薙護堂も――いるのだが。

「草薙さん!?　そ、それは一体!?」

「ちっ。もうすこし寝てればいいものを」

　あろうことか、日本人の少年は大きな刀を持っていた。

　刀身は黒く、刃渡り一メートル前後。日本刀に酷こく似じした形状だが、明らかに神具だ。実はアイーシャも何度か見た覚えがある。

　草薙護堂や清せい秋しゆう院いん恵え那なは『天あまの叢むら雲くもの剣つるぎ』と呼んでいた……。

「その刀、お台だい場ばの土に埋めてきたはずじゃ!?」

「ここ、奥おく多た摩まだからさ。同じ東京都内なんだよ。お台場の方に『来い』って念じたら、とんでもない速さで飛んできてくれた」

「ど、どうして、そんな物ぶつ騒そうなものを!?」

「それはな、アイーシャさん」

　草薙護堂はにやりと笑った。その猫なで声、あたかも『おばあさんに化けて、赤ずきんちゃんを食べようとする狼おおかみ』のようで――

「あんたをこの世から消すためさ。もともと隙すきを見て、寝首をかくつもりだったんだ」

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃっ!?」

　ちゃきっ！　草薙護堂は黒き神しん刀とうの切っ先をアイーシャに向けた！

「わ、わたくしをだましていたんですか!?　ひどい！」

「あんたが悪いんだぞ。なるべく苦しまないよう眠っているうちにとか思ってたのに、勝手に起きちまうんだからな」

「でも護堂。何も知らずに死ぬよりもいいんじゃないかしら？」

「そのとおりです。彼女にも知る権利がある。たとえ一分後に永眠するとしても」

「エリカさんにリリアナさんまで!?」



なんということだ。アイーシャは打ちのめされた。

信じていた人々の悪意と殺意を前にして、絶望がこみあげてくる。がくがくと体が震えて、涙もあふれてしまう。

上空では今も尚、空中大決戦が続いていた。

黒き魔鳥となったジョン・プルートー・スミスが嘴くちばしから猛毒の霧きりを吐き出せば、白き神しん猿えんハヌマーンはつむじ風を起こし、ふきとばす。

猛スピードで夜空を飛びまわりながらの攻防である。

基本的に、逃げる魔鳥の背後につこうとハヌマーンが追いかけまわしているようだ。さっき宣言したとおり、翼をひきちぎるつもりなのだろう。

斉せい天てん大たい聖せいとアレク青年の戦いは見えない。

しかし、この山のどこかで最速を競うようにやり合っているはず。

アイーシャはこんなにもがんばってきたというのに、神殺したちはいまだ憎悪と闘争の連れん鎖さを克服できていないのだ。

そして今、草薙護堂が神刀と共に歩みよってくる——。

「さあ、もういいだろうアイーシャさん。目を閉じるといい」

「い、いやあああああああああああっ！」

絶望からの絶叫。そして怒り。理り不ふ尽じんへの怒り。

アイーシャは思う。

全ての神々と神殺しがいなくなれば、この世から争いはなくなるのかしらと。

その瞬間だった。いまだ赤黒いままの空——冬の星々と月がまたたくキャンバスのなかに、漆しつ黒こくの穴がぽっかりと出現した。

それはもちろん、『妖精の通つう廊ろう』だった。

時空を越えるための妖あやしき洞どう穴けつ。近くにいる者を全て呑のみこむ通用門。

かつてないほどに大きい。直径にして数百メートルはありそうだ。しかも今回、入り口のまわりには——

薔ば薇らの蔓つるが幾いく重えにもはびこり、色とりどりの花を咲かせていた。

紅あかい薔薇、白い薔薇、薄桃色、青、紫、黄、オレンジ……。洞穴の大きさに合わせてか、薔薇の花も、蔓もおそろしく巨大だった。

天空に開いた通廊の入り口をぐるりととりかこみ、極上の飾りになっている。

そして、この妖しき穴より放たれる吸引力は——かつてないほどの強さで、地上の雲くも取とり山やまへと降りそそいでくる！

すでに用意されていた『起こりうる最大限の吉凶』という下地。

加えて、アイーシャの絶望と怒りが引き金となって、天空通廊という前代未み聞もんの代しろ物ものを完成させたのだ。

愛馬を降り、ランスロットは抜ばつ剣けんしていた。

偃えん月げつ刀とうを振るうペルセウスと、存分に斬きり合うためである。

「ふふふふ。息が上がっているようだな、ペルセウスどの！」

「なに、麗うるわしき乙女をすぐに打ち負かすのも大人げないと思ってな。手加減していたら、肩が凝こってしまった。それだけのことよ！」

指摘したとおり、ペルセウスの顔と呼気に余裕はない。

疲労は明らかながら、弁べん舌ぜつはあくまで爽さわやかなまま

ランスロットの剣を避け、必死に偃月刀で斬り返してくる。

「気にせず続けてくれ給たまえ、アマゾンの君よ！」

「承知したぞ、東から来た男！」

　ふたりが斬り合う闘技場、それはクレーターの底であった。

　天からの初撃で穿うがったものだ。すこし前までは雲取山の頂いただき付近であった。標高二〇一七メートルを一〇〇メートルほど削る形で、大きなクレーターを火山の火口よろしく頂に景気よく造ったのである。

「悪いが手加減などという高尚な芸、野人たるランスロットにはむずかしすぎる。こちらは本気でやらせてもらう。怨うらみ給たもうな！」

「ふ……っ。当たり前だ！」

　痩やせ我慢する快男児を、ランスロットは容よう赦しやなく攻め立てた。

　右手に持つ両刃の長剣、これをスキュタイとアマゾンの流れを汲くむ剣術で雷いかずちのごとく打ち込み、風のごとく振りまわす。守りは甲かつ冑ちゅうと左手の楯たてにまかせればいい。攻めて攻めて攻め抜くことこそ、ランスロット・デュ・ラックの剣だ。

　ギリシア・ローマで勇名を馳はせた英雄は白しろ豹ひように似た身ごなしで幾度もやりすごしつつ、逆襲の太刀たちを繰り出す。

　三回斬りつけられれば三回かわし、必殺の一太刀を返すのだ。

　だが、それが次第に五回と一太刀になり、次いで七回と一太刀になり、ランスロットの攻める時間がどんどん増えていった。

　隕石落としメテオストライクのダメージと、底力の差ゆえである。

　ペルセウスは《鎌やじりの円盤》の恩おん寵ちようによって復活した。あの神具から供給される精気と呪力が活動源なのだ。しかも、それを斉天大聖と分け合っている――。

　対して、槍やりの軍神は一〇分だけなら全力で戦える。

　だからこその差。しかし、カラクリを知ってか知らずか。ペルセウスが雄おゝおしく粘りつづけることで、白き軍神の残り時間――実はほとんど終わりかけていた。

　そんなとき、天に『妖精の通廊』が現れたのである。

　その不気味さと巨大さ、さながら赤黒い夜空に出現した第二の月であった。

「なんと不吉な……」

　白騎士の剣との鍔つば迫ぜり合いのさなか、太陽の勇者がうめく。

　対して、仕掛けた側に仕つかえるランスロットはぼそりとつぶやいた。

「そろそろか」

　もうペルセウスは放置していい。肉体を消滅させる。

　ふたたび守護霊にもどり、草薙護堂のもとへ帰還するためだ。対して、英雄ペルセウスとその肉体は敵の逃亡に驚く間もなく、吸引力にとらわれてしまった。

　そう。妖しき天空通廊の引力によって。

　しかも――クレーター内の大地が辺り一面、黄金色に輝きはじめる！

「おお!?」

　英雄の逞たくましい体まで淡い金色の光につつまれて、天へ昇っていく。

　まるで天使たちが闘争に疲れた戦士を迎えに来たような――やさしげで神こうゝごうしい、英雄昇天の図であった。

「どういうことだ、これは!?」

　吸引力の淡い光のまわりで、小さな妖精たちがにこにこ笑ってい

た。

　背中に羽を生やした少年少女。小鳥と同程度のサイズである。みんな西洋人風の顔立ちだった。一二、三人はいるだろうか。

　うふふふ。ふふっ。ふふふふ。あははははは。

　全員が楽しそうに、親切そうに、ペルセウスを天空の穴へ運んでくれていた。

（くくくく。初しよ手てから逃げてばかり——）

　斉天大聖・孫そん悟ご空くうが嗤わらっている。

　神しん速そくでのスピード戦を空だけでやってもむなしい。アレクは稲妻形態から生身にもどり、地形や山の植生までも目くらましに使い、逃げまくっていた。

　雲取山どころか、周辺の山々まで競技場にしての追いかけっこ。

　逃げるアレクを大中華の猴こう王おうが追う。

　山にまぎれ、林木の間を縫うように走り、谷を飛び越え、渓けい流りゆうの水面までも進路にしての追いつ追われつ——。それがずっと続いていたのだが。

（見たところ、正面切っての勝負は苦手のようじゃな）

　今、アレクは小こ雲くも取とり山やまの尾根から七ななツつ石いし山やまのふもとめがけて疾走中。そのすぐ背後をひたひた走りながら、斉天大聖は挑発的に言う。

（そろそろ駆けっこにも飽あきてきた。とっつかまえて、ひとひねりにしてやろうて）

（ふん。なんとでも言え）

　走りながら、アレクは鼻で笑った。

　特に動じていない。とっくに斉天大聖の底を見切っていた。

どうやらペルセウスと力を分け合っているらしい鉄頭銅身の軍神——。そろそろ仕し留とめにいってもいい頃だろう。

実は駆けっこの間、大聖は何度か仕掛けてきたのだ。

神じん通つう力りきで山の地形を変え、アレクの進路をふさごうとする。天も覆おおうほどに巨大化して、己の体内に飛行するアレクを閉じこめようとする、など。

そのたびにぎりぎりしのいできた。

ただ速いだけがアレクサンドル・ガスコインの神速ではない。

稲妻に等しいスピードを急激に、あるいはすこしずつ落として、待ち伏せする斉天大聖の前に到達するタイミングを遅らせる。速度だけでなく時間をも操る四次元機動で、敵の魔ま手しゅから逃れてしまう。

しかし、もし大聖がかつて日につ光こうに顕けん現げんしたときのままならば——

ここまでしのぎ続けることはできなかったはずだ。

なにしろアレクは雲取山のまわりを駆けまわりながら、周辺地形をじっくり観察するというマルチタスクに挑んでいたのだから。この一帯に『大だい迷めい宮きゆう』を仕掛けるために。

ミノス神より簒さん奪だつした、迷宮を一瞬で造りあげる権能。

地下や屋内ではなく地上で仕掛ける場合、その場所のことをよく知らないと、実は使えないのである。下見を続ける必要はもうない。アレクはうなずいた。

（サルを迷路に閉じこめたあとは、もうこちらの思うままだ）

そのまま捕らえて、あとで再利用するのもいい。

迷宮のどこかに『復讐の女神』を配置して、そこに誘導してもいい。アレクを倒すために強打を放った瞬間、斉天大聖はそれを自みずから受ける羽目になる。

ともあれ、もう勝利は目前——だったのだが。

（!?）

（なんじゃこりゃ!?）

　地面が、木々が、川が、黄金色に輝きはじめた。

　さらに神速で駆けるアレクと斉天大聖まで淡い金色の光につつまれて、ふわふわ天へ昇りはじめてしまう！

　しかも、意外と上昇速度が速かった。

　あっというまに、クレーターと化した雲取山の頂よりも高みに連れていかれた。

　奥多摩と秩ちち父ぶの両地域をまたぐようにそびえる連峰――雲取山、小雲取山、七ツ石山などの一帯がまとめて黄金色に光り輝いていた。

　だが、自分たちが向かうのはさらに上空。

　赤黒い夜空に浮かぶ――妖しい穴。月と見まごうほど巨大だった。入り口のまわりはたくさんの薔薇で飾られている。

（妖精まで湧いて出ただと!?）

　アレクのまわりには、小妖精が一三体も現れていた。

　うふふふ。ふふっ。ふふふふ。あはははは。お気楽かつ能天気に笑っている。何も考えていなさそうな笑顔だった。

「ならば！」

　アレクは我が身を稲妻に変へん化げさせた。

　肉体を消したおかげだろう。天へと招く吸引力も一瞬消えて、自由になる。その刹せつ那な、ためらうことなく真下に飛んだ。

　稲妻として一直線に降る。七ツ石山の中腹あたりだろうか。

「戸と惑まどいの館を前にして――旅人よ、希望を捨てよ！」

　この一帯に『大迷宮』の権能を仕掛けて、黒王子の結けつ界かいと変える。

　山を迷宮ならぬ〝帰らずの森〟に仕立てて、最深部に隠れるつもりだった。謎の吸引力から逃れるための窮きゆう余よの策である。

　まあ、十中八九アイーシャ夫人がらみの現象なのだろうが——。

　ジョン・プルートー・スミスと白はく猿えん神しんハヌマーン。

　空中で対決する両雄までも、天空通廊の吸引力は虜とりこにしていた。

　巨大なる魔鳥も、白猿神の神こう々ごうしい巨体も、そろって天へ運ばれている。淡い金色の光につつまれ、笑う小妖精たちに見守られながら……。

「この私さえ異界送りにする門か！　あいかわらずアイーシャ夫人はすさまじい！」

「これはまさか、いつぞやも見た——」

　魔鳥の姿でスミスは賛さん嘆たんし、巨大化中のハヌマーンは瞠どう目もくしていた。

　ペルセウス、斉天大聖も同じく天へ招かれている途中。アレクの姿が空のどこにも見えないのは、いち早く吸引されたからか、何らかの方法で逃れたからか。

　そして、悠ゆう々ゆうと地上に残るカンピオーネもいる。

　草薙護堂である。エリカとリリアナもいっしょだ。すぐそばに腰の抜けたアイーシャ夫人もいて、呆ぼう然ぜんとしていた。

　今いる場所は雲取山の登山道、その一角である。

　このあたりの地面も黄金に光り輝き、小妖精の一団まで押しよせてきている。護堂たちを天に運ぶためだった。

　だが、それを拒こばむための切り札があった。『剣の言こと霊だま』だ。

「その昔、妖精たちの住む常若の国テイル・ナ・ノーグに、ニアヴ

という姫がいた」

　護堂たちのまわりでは、こぶし大の光球が幾千も飛び交っていた。

　その全てが『剣』である。恋と自己陶とう酔すいゆえに愛いとしい恋人の未来を思わぬ形で奪ってしまった――麗うるわしき女神を切り裂くための。

「美しい彼女が恋した相手は人間だった。フィアナ騎士団の一員であり詩人でもあったオシーン。ふたりは恋に落ち、いっしょに常若の国へ旅立ち、幸せに暮らしていた」

　アイーシャ夫人の権能『妖精の通廊』。

　もともとの所有者だった神について、護堂は語った。エリカと共に、さっきリリアナから授かった知識であった。

「でも三年後、郷きよう愁しゆうに駆られたオシーンは故郷に帰っていった。そのとき恋人のニアヴが使わせてくれた白馬を降りて、地面に足をつけた瞬間――彼は老人になってしまう。地上では三〇〇年もの月日が流れていたんだ」

　日本でいう浦島太郎にも酷こく似じする、昔話の一定型。

　そのあらすじを今、護堂は『剣』として転用していた。そう。これこそ常若の国の女王、金髪のニアヴを切り裂くための言霊なのだ。

「急速に老いたオシーンは結局、灰になって消えてしまう……。そして、アイーシャさんの強制的に時間を旅させる権能。もとは恋人を妖精の国へ連れていくため、女王ニアヴが使った力なんだ！」

　護堂の作り出した幾千の光球。

　その燦きらめきが今、妖しき天空の穴――『妖精の通廊』から身を守るための防御手段となっていた。護堂たちのまわりに幾千の『剣』がまたたきながら常じよう駐ちゆうし、すさまじい吸引力を切り裂きつづけてくれているのだ。

「く、草薙さんは……」

　腰を抜かし、ぺたんとすわりこんだアイーシャ夫人。

　自らの権能の暴走と、それに巻きこまれた神々とカンピオーネたち、そして護堂のあざやかな対応を目まの当たりにして、きょとんとしていた。

「こうすることを狙ねらって、わたくしを殺す――ふりをしたんですか？」

「こうなるとは、わかってなかったですよ。通廊の力が暴走してもいいように準備していただけで。上手うまくいって助かりました」

「実は護堂とリリィの演技力を心配していたのだけど」

　くすっと微笑んだのは、飛び抜けて器用なエリカだった。

　万事そつのない金髪美少女とくらべれば、護堂もリリアナもたしかに大根程度の芝居しかできないはずだった。

「予想以上にいい出来でびっくりしたわ。アイーシャ夫人もすっかりだまされて」

「そうでした。みんな、本当に悪役みたいで」

「……まあ、俺だってたまにはな」

「……ええ。思うところもいろいろありましたし」

「へっ？」

「お気になさらないでください、夫人。今のは言葉の綾あやです」

　胡う乱ろんなことを口走ったあと、リリアナがさらりと言った。

　アイーシャ夫人はへたりこんだまま、不思議そうに「はあ」とつぶやく。

　ちなみに護堂の場合、演技前にあれこれ思い出したことが成功の原因かもしれない。自称一七歳乙女の〝やらかし〟の数々やドニの奇行などを。おかげで、自然と『この連中がいなければ』という境地をつかめた。もしかしたらリリアナも……。

「ま、とにかく」

やや唐突に、護堂は話題を変えた。

「最後の仕上げといこう。あの連中、まだまだ悪あがきをしそうだからな」

雲取山の直上に、妖しき大穴が浮かんでいる。

標高二〇一七メートルの山頂から、さらに五〇〇メートルほど上空だろうか。その妖しい吸引力と妖精の導きによって、ロスの冥めい王おうやラーマの配下どもを天に招きよせ、呑みこもうとしている……。

それに加勢すべく、護堂は天あまの叢むら雲くもの劍つるぎを地に突き刺した。

「ところでアイーシャさん。あの穴、どこにつながったんですか？」

「わ、わかりません！　でも、すごく遠くだとは思います。わたくしたちのいる時代から遠く離れた過去——あるいは、遥はるか彼方の異世界……」

無意識にやったとはいえ、一応は創造主の直感である。

そう的まと外はずれでないと思いたい。この場は信じることにして、護堂は叫んだ。

「暁あかつきの女神の技を借りて——嵐を起こせ、天あまの叢むら雲くも！」

4

赤黒い夜空にぽっかり開いた穴。

色とりどりの薔ば薇らで彩られた空洞の入り口へ、稀き代たいの超越者たちが運ばれていく。

ジョン・プルートー・スミス。斉せい天てん大たい聖せい。ペル

セウス。白はく猿えん神しんハヌマーン。しかし、罠わなにかかった者たちは無抵抗だったわけではない。

　逆だった。

　妖精女王からの招待を振り切るには、生なま半はん可かな抵抗では意味なし。

　そうと見切って、妖精たちに運ばれながらも呪力を高め、最大限に達したところで脱出の一手を繰り出したのである。

「我が翼ペガソスよ、メドゥサの血より生まれし者よ！　我が自由のため、蹄ひづめのひびきも高らかに来きたれ！」

「雲よ、孫そんさまの呼び出しに遅れるなよ！」

「父ヴァーユよ、我がために駿しゅん馬めを遣つかわし給たまえ！」

「我が忌いみ名のひとつ〝全能〟のもとに命じる。神は去り、悪魔は滅せよ！」

　ペルセウスは有翼の愛馬、斉天大聖は飛行機代わりの黄金雲を呼んだ。

　剣けん神しんたちは残った呪力を全て乗じよう騎きに託たくして、飛ひ翔しようの力を最大限に高めていた。

　風神の息子でもあるハヌマーンは宇宙まで駆けあがる上昇気流を起こし、天空の通つう廊ろうそれ自体を星々の海にまで吹き飛ばそうとしていた。

　スミスは魔鳥から、『大いなる魔術師』に変身し直していた。

　巨人形態でのみ使える神力Spell 無効Cancellerの呪法で、アイーシャ夫人の権けん能のうを破ろうとしたのだ。

　……もしかしたら、どれかは成功したのかもしれない。

　だが、全ての抵抗を無に帰せしめる存在までもが空に顕あらわれたのである。

重力嵐を呼ぶ暗黒星——。

草くさ薙なぎ護ご堂どうの秘法《黒の剣つるぎ》が生み出す球体。

これが天に開いた洞どう穴けつ、そのすぐ真上に顕けん現げんした。

暗黒の球体は夜の闇やみよりもさらに暗く、黒い。特に今夜は赤黒く染まった夜空なので、漆しつ黒こくぶりが尚更目立つ。

例によって暗黒星は『ぎゅうん、ぎゅうん』と回転をはじめた。

すでに——お台だい場ばの地底で天あまの叢むら雲くもの劍つるぎがたっぷり抜ばつ刀とう準備を済ませたあと。出現とほぼ同時に回転は高速化し、重力嵐が引きおこされる。

周囲にある全てを引きよせる暴風にして暴力。剛ごう猛もうなる魔の風。

「「「「!?」」」」

スミス、斉天大聖、ペルセウス、ハヌマーン。

天空の洞穴へと運ばれていた神々と神殺し、その全員が絶句した。渾こん身しんの抵抗が成果を生む前に、重力嵐というダメ押しにつかまってしまったのである。

この暴風が向かう先には暗黒星と、すぐ真下に浮かぶ洞穴が待ちかまえていた。

「おのれ、ここまで気張ったというのに！」

「ちっ。この借りは忘れぬぞ草薙護堂、地上の神殺したちよ！」

「…………」

「…………」

斉天大聖がわめき、ペルセウスが口くち惜おしげに叫んでいた。

仮面の冥めい王おう、風の白猿神はそろって無言だった。あわてるそぶりも見せなかったのは絶体絶命に慣れているからか、余裕を

装よそおっていただけなのか。

　ともあれ、強大なる四者は妖精女王の洞穴に吸いこまれていった。

　そして、一部始終を見とどけた草薙護堂――。

「ふう」

　ようやく一息ついた。

　目の前には、地面に突き刺した天あまの叢むら雲くもの劍つるぎがある。

　あえて日本刀風の拵こしらえにした神刀の柄つかにさわり、停止の念を送った。

　空に浮かぶ暗黒星、臨りん界かいに達していた回転速度を『ぎゅんぎゅんぎゅん、ぎゅうんぎゅうん、ぎゅうん、ぎゅ……』と落とし、やがて完全に止まった。

　直後、暗黒星が一瞬にして消え失せる。

　真夜中の悪夢もかくやというほど、あっさりとした退場だった。

「おまえも、もういいぞ」

　功労者である天あまの叢むら雲くもの劍つるぎも消えて、護堂の右腕にもどる。

「今晩のゴタゴタは、これでおしまいってところだな」

「そうだとよいのですが――あ」

「……ねえ護堂。わたし、ひとつ気になったのだけど」

　護堂が戦闘終結を口にしたあとだった。

　リリアナが忘れ物を思い出したように口ごもり、エリカはもうひとりのカンピオーネを――ちらりと見やった。

　アイーシャ夫人は、冷たい雪の上にすわりこんだままだった。

さすがにもう余力がないのか、ぽけーっと星空を見あげている。彼女自身が最大限の幸運と不運を呼んだため、空はいまだに赤黒いまま。妖精女王ニアヴの洞穴も、空中でぽっかり口を開けたままだ。

そして、エリカは思し慮りよ深げにつぶやく。

「結局、ラーマ王子との対決にそなえて、護堂が只ただひとりのカンピオーネになるのなら……どこかで夫人にもご退場を願うのよねえ？」

「あー……」

「それとさっきの話だけど。妖精の通廊はどこにつながったのかしら？　過去、それともアストラル界のどこか。まあ、かつてないほどの力を持つ通廊だから、わたしたち魔術師の理解もおよばない未知の領域かもしれないけど……」

「たしかに、気になるな」

「いっそ、それをたしかめるという口実で——旅立っていただくのもありかしらね……」

当然、アイーシャ夫人をちらっと見てからのコメントだった。

尚、リリアナは無言だった。倫理にそむく悪魔のささやきにも、珍しく反論しようとはしない。むずかしい顔で沈黙を貫つらぬいている。良心と戦っているのだろう。

護堂もありかもなあ、それが今後のためかもなあと、すこし葛かつ藤とうしたのだが。

「あ——ふぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ」

唐突にアイーシャ夫人が脱力し、息をたっぷり吐き出した。

口から霊魂でも出てきそうな、長い長い吐と息いきだった。

その途端に空の赤黒さはおさまり、ふつうの夜空になった。天空に開いた妖精の通廊もついに消え失せていた。

空気の澄んだ山中では、見える星の数が都会とは比較にならない

多さである。

　ようやく冬の奥おく多た摩まらしい夜空になったのだ。

　がくり。アイーシャ夫人が背中から雪の上に倒れこむ。そのままスヤスヤと熟睡をはじめてしまう。今度こそ力を使い切ったようだ。

　雪の冷たさも、衣服が濡れるのもかまわず、寝入ってしまった。

「ま、こういうオチもありか」

　護堂は苦笑して、寝こんだ夫人のそばに近づいていった。

　どうせ地獄に落ちても死なないカンピオーネ。真冬の雪山で眠りこけても風か邪ぜさえ引かないだろうが、起こして、街に連れ帰らなくては——

「！」

　この刹せつ那な、とっさに身がまえたのは野性の勘かんゆえだ。

　来る。護堂は——目の前の虚こ空くうをつかむため、さっと両腕をのばした。同時にウルスラグナ第二の化け身しん『雄お牛うし』も使う。

　とてつもないほどのパワーを持つ獣けものに、力負けしないために！

「おおおおおおっ！」

「成長したものだな、草薙護堂！　待った甲か斐いがあるぞ！」

　弾丸のように突っこんできた魔ま狼ろう——

　護堂はその鼻と上うわ顎あごを右手で、下顎を左手でつかんでみせた！

　馬と見まごうほど大きな灰はい色いろ狼おおかみが木陰から飛び出てきて、草薙護堂の頭から胸を『ガッ』と食いちぎろうとしたのである。

「ぐあっ！」

　護堂は痛みにうめいた。

　びっしり生えた歯ごと上顎・下顎をつかんだせいだ。十数本もの歯が両手の掌てのひらにぐさぐさ突き刺さった。魔狼がサラブレッド並の体格なので、歯まで短刀のように大きい。

　しかし、両手の痛みを無視して――

　護堂はぶんぶん狼の巨体を振りまわして、ハンマー投げの要領で投とう擲てき！

　ただし、天高く放り投げるのではなく、すぐ前の地面にたたきつけた。『雄牛』のパワーを全て敵へのダメージに変えるために。

　が、大地に激突しても、魔狼は意気揚よう々ようと身を起こす。

　大型自動車をもたやすくスクラップにするほどのダメージを受けたはずだが、凶猛なる魔狼はすばやく二本足で立ちあがり、含み笑いを洩もらした。

「くくくく。激しいゲームのあとでも気を抜かず、余力も残し、次にそなえていたか。強敵と呼ぶのに、何のためらいも覚えずに済む」

　魔狼ではなく、デヤンスタール・ヴォバンが笑っていた。

　いつもどおり老人の姿にもどり、爛らん々らんと輝くエメラルドの瞳ひとみで護堂を見つめ、愉たのしげにささやく。

「いつかの約束、果たすときが来たわけだ」

　挑戦の言葉であった。だが。

　答える余裕、護堂にはなかった。予想外の人物が登場していたからだ。

「姐ねえさん！」

　なんと義姉あね・羅ら翠すい蓮れんだった。

　それもヴォバン侯こう爵しやくと同じ木陰から飛び出し、地面の雪を粉ひとつ分も乱すことのない軽けい功こう卓たく越えつの疾走で、アイーシャ夫人のもとへ駆けよっていたのである。

　護堂と侯爵がやりあっている間に——

　義姉はひざまずき、眠れる女カンピオーネを抱き起こしていた。

「この瞬間を……待った甲か斐いがありました」

　奇くしくも老侯爵と同じ台詞せりふをささやきながら、羅翠蓮は花のかんばせをアイーシャ夫人に近づけて、なんと唇くちびるを奪ってしまった。

　しかも、妖あやしい言こと霊だまをささやくおまけつきで！

「気は散じ、龍は死せり。則すなわち四し神しん絶ぜつ命めいなり」

「アイーシャさん!?」

「ふふふふ。護堂、おまえもこの魔女にはずいぶんと手を焼いていたようですが——安心しなさい」

　眠れるアイーシャ夫人の体を雪上に放り出して、羅翠

蓮は立ちあがった。

　赤ずきんにメイド服という風ふう体ていの乙女をもう一いつ顧こだにしない。興味も警戒心もなくなったように見える。

「この者の力、全て封じてみせましたゆえ」

「なんだって!?」

　ぐったりと横たわる夫人の全身から、青い光の粒子が大量に洩もれ出ていく。

　そのきらきらとした無数の輝きは強い力を感じさせた。呪力、なのではないか。護堂はいぶかしんだ。

　全ての権能の源みなもととなる呪力。それが急速に漏ろう出しゆつしていったのか。

　そして、疑惑を裏づけるように義姉がほくそ笑んでいる……。

「ふふふふ。アイーシャ夫人の権能はどのように暴走するかもわからぬものばかり。が、それにそなえる必要はもうありません」

「…………」

「心置きなく——打ち倒すことができます」

　口移しに何らかの方ほう術じゆつをかけたのだろう。羅翠蓮の宣言だった。

　一体、どんな術なのか。どうしてヴォバン侯爵といっしょにいるのか。気になることばかりだが、護堂はまず目配せをした。

　近くでひかえていた騎士ふたり、エリカとリリアナへ。

　彼女たちはこくりとうなずき、足早に離れていく。すこし距離を置いてくれという護堂の考えを察してくれたのだ。

　そう。旧世代の魔王ふたりがそろった現状、あまりに危険すぎるからと。

「姐さん。それにヴォバンのじいさんもさ」

　護堂はあらためて問いかけた。

「この面メン子ツが何だってふたりいっしょにいるんだよ？」

「なに。老いぼれ同士ですこし話をして、運よく意見が一致したまでだ」

「そのとおりです。ひとまずわれら、最後の二名になるまでは同盟を結び、魔王内戦を勝ち抜くことにしようと」

「……そう来たか」

　護堂はうめいた。

　考えてみれば、義姉も侯爵もはじめからアイーシャ夫人を標的に見すえていた。最優先で攻略すべき相手であると。今まで、よほど足をすくわれてきたのだろう。

　そのふたりが最大の難敵を片づけるため、手を組む。

　ありえない話ではない。そして、古こ豪ごう同士で最強決定戦を行うため、暫ざん定ていながら同盟関係を築く。これもありえそうな展開だ。なにより義姉・羅翠蓮が嬉々きとし

て義ぎ弟てい・草薙護堂の前に立ちふさがる。まあ、想定どおりだった。

「とはいえ、三ついっぺんに実現するのは意外すぎるぞ……」

　しみじみとつぶやく。

　二対一。しかも相手はこのふたり。どう切り抜ける？

　護堂もさすがに『全力で逃げる』以外の選択肢を思いつかなかった。だが、ヴォバン・羅ら濠ごうのふたりから逃げ切れるのか？

　まあ無理だと自みずから可能性を切り捨てた、そのとき。

「すごいな。こんなふうになるなんて、本当にびっくりだよ。できれば、僕も是非交ぜてほしいところだねえ」

「ふん」

　能天気かつアホっぽい声の割り込みを受けて、ヴォバンが鼻で笑う。

「入るなと断られても、勝手に押し入るのがおまえの流儀なのだろう？　殊しゆ勝しようなふりなどするな、サルバトーレ・ドニよ」

「はははは」

　闇のなかより、金髪の青年がやってきた。

　軽薄なるイタリアの神殺し。美男子のくせに顔つきに締まりはなく、何も考えていないような笑顔で陽気さを振りまいている。

　しかし、日本刀らしき刀剣を鞘さやごと左手に持ち、いつでも抜ける構えであった。

「じゃ、じいさまに認めてもらったということで——僕から提案してもいいかな？　あのさ護堂、お年寄り同盟に対抗して、僕らも若人わこうど同盟を組んでみない？」

　は？　一瞬、護堂は啞あ然ぜんとした。

　かまわずドニは、いつもどおりの気安さで持ちかけてくる。

「草薙護堂とサルバトーレ・ドニ。ふたりで魔王内戦を勝ち抜いて、最後に最強挑戦者の座を懸かけて決定戦としゃれこむのさ！」

　魔王内戦、二日目の夜。

　奥多摩の山中に、四名ものカンピオーネが集結している——。

あとがき

　みなさま、こちらのシリーズではずいぶんとご無沙汰しておりました。

　いよいよ『最後の戦い』三部作のはじまりです。

　まずは七人のカンピオーネが首都東京に全員集合し、魔王内戦のバトルロイヤルが開戦とあいなりました。

　この一九巻に続く二〇巻、それほどお待たせせずにお届けする予定です。

　あ、二一巻は……げふんげふん。

　さすがに『三カ月連続刊行！』みたいな荒技にはならないかと思われます。

　申し訳ございません。

　そちらはもうすこしお待ちいただければ……。

　実はこのエピソード、最初は二部作の予定だったのです。

　そのつもりでなるべく連続して出せるように、仕事のスケジュールも前々から調整したりいたしまして。

　でも、プロットをまとめているうちに『登場人物もエピソードも多いし、さすがに上下巻じゃ無理か』なんて結論に……。

　というわけで三巻目は、もうちょっと先ではあるのですが。

　当シリーズの総決算となる三部作、よろしくお願いいたします。

　さて。

　今回はひさしぶりに登場するキャラが多くて、なつかしい気分になりました。

　一巻の原稿に初めてカンピオーネ七人の名前を書いたときなんて、まさか全員登場させることになるとは、まったく考えていなかったのですが（苦笑）。

　思えば遠くに来たものです。

　特にアイーシャ夫人は……。

　白状すると、ああいう人であることはかなり初期から決定事項でした。

　何度かキャッチフレーズを『永遠の一七歳』と書いて、初代担当氏から「そこはもうちょっとぼかしましょうよ」とリクエストされたほどです。

　特殊なポジションの人なので、登場するとしても、かなり後期になるだろうと予想しておりました。

　ここ数冊では、そんな彼女をがっつり書いております。

　これも全て、みなさまより頂ちよう戴だいいたしましたご愛あい顧このおかげです。

　本当にありがとうございます。

　アイーシャさんがらみでもうすこし小話をしますと、実は当シリーズ、長らく『運命』がＮＧワードとして設定されておりました。

　神を殺す者＝運命を無視する者という大前提を設もうけていたからです。

　アニメ化の際には「全ては運命の導くまま～」みたいな台詞せりふが準備稿段階の脚本にはあったりしたのですけどね。

　それはシリーズ的にＮＧだからと、修正させていただいたりもしました。

　……あれ？

　今回、あの人の登場パートでやけに安売りしていますね、運命。

　このように、彼女のポジションはシリーズ中でも非常に特殊なのです。

　ちなみに羅ら濠ごう教主も、ああいう無茶苦茶なキャラクターであることは登場前から決定していたのですが。

　実は初登場させる直前まで、『性別は男性・女性のどちらにしようか、それとも、武術の道を極めるために自みずから去勢したジェンダーレスな人（モデル：ブリジット・リン）にしちゃおうか』なんて、考えたりしておりました。

　お姉さまネタを思いついたので、無難なところに落ち着きましたが（笑）。

　さてさて。

　次回、二〇巻のタイトルはひねりもなく『魔王内戦２』になると思われます。

　ひきつづきお楽しみいただければ幸いです。


あとがき
カンピオーネ！
いつもご愛読いただき
ありがとうございます！
しこるすきー

著者紹介

丈月 城　たけづき じょう

最近、kindleでアメコミの原書が買えることに気づきました。しかも、マーベルのアメコミが定額読み放題になるサービスまで、ネットでやっております。昔は都心の取り扱い書店や通販に頼るしかなかったのに、便利になったものです。あとの問題は、手を出すと確実に仕事の時間が減るという点だけで……。

illustration

シコルスキー

神奈川県在住のイラストレーター。ゲームＣＧや挿絵を中心に活動させてもらっています。好きなものは猫と映画です。

ダッシュエックス文庫DIGITAL

カンピオーネ！

XIX 魔王内戦

著者　丈月　城

２０１６年11月30日発行

この電子書籍は、ダッシュエックス文庫「カンピオーネ！

XIX 魔王内戦」

２０１６年10月30日発行の第１刷を底本としています。

発行者　　鈴木晴彦

発行所　　株式会社　集英社

〒１０１－８０５０

東京都千代田区一ツ橋２丁目５番10号

０３－３２３０－６０８０（読者係）

制作所　　株式会社ＩＣＥ